View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to CORE

日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第 118 号　2008 年 12 月

〈鼎　　談〉

教養の過去と現在から未来へ

江坂哲也
池谷壽夫
牧　洋子

はじめに

江坂：池谷先生と牧先生には，お忙しい中をお集まりくださり，どうもありがとうございます．「現代と文化」の編集委員会で「今求められている教養とは何か」という特集を組もうということになり，その一環として座談会形式のものも企画したら面白いのではないかということで，今こうしてテーブルを三人で囲んでいるわけです．そこでまず，このテーマが必要条件となった背景を私なりに纏めてみたいと思います．

敗戦後アメリカの制度が取り入れられ，1，2 年次の教養課程でリベラル・アーツ（liberal-arts）としての科目の必修が文部省の大学設置基準で決められました．私たち三人は一応この制度下の教育により，教養部で語学は第二外国語まで必修で，さらに自然，社会，人文科学にわたり，そして例えばその人文ではさらに具体的に哲・史・文学という具合にそれぞれの必要単位数を取って，学部に進学したわけで，いわゆるその体験者ですよね．その実体験をこの「特集」に活かすために，この教養課程の学生時代を振り返ってみたいと思います．

次にこの制度が 1991 年の大学設置基準の大綱化で大学の自由に任され，いわゆる「教養部解体」が全国的に進行したわけです．その後入試制度の多様化と相まってでしょうが，「東大生でも分数の計算ができない」などということを耳にしました．1，2 年前の「クローズ・アップ現代」という NHK の番組では，作業場に書かれている注意書きの「差異」という漢字の意味が分からず，製品にそれが生じても上司に報告せず，2000 リットルもの不良品を作り続け，120 万円の損害をもたらしてしまった新入社員の失敗が紹介されていました．その番組ではこのような国語力低下の原因を携帯電話とパソコンの普及とその使用過多に求めていましたが，そこで紹介された大学生の日本語能力の実態には驚きました．大学生の 5 分の 1 は中学生徒の能力レベルで，この割合は 8 年前の 3 倍ということでした．「では，8 年前の割合は？」と学生に尋ねると，ど

れほどの正解率になるか，それはともかくとして，これは明らかに若者の教養が解体されているということで，こういう状況から「教養の必要性」が各界で叫ばれるようになってきたのでしょうね．授業や講義で先生方もこれに似た例を体験され，それを克服するために苦労されていられると思いますが，これについても後で議論したいと思います．

ところで新世紀に入って教育界に最も衝撃を与えたのは，OECD が 15 歳の生徒を対象にしたＰＩＳＡまたはピサ（PISA）と呼ばれる学習到達度調査の結果でしょうね．これは 2003 年実施の結果が集計され，1 年後の 04 年に公表されたものですが，日本は前回と比べ「自然科学的応用力」では前回同様 2 位でしたが，「数学的応用力」では 1 から 6 位に，「読解力」では 8 から 14 位にと後退してしまいました．それで学力の向上のためにと文科省は「ゆとり教育」を返上し，それぞれの学校を評価する客観的な基準を設けようと，全国共通の試験を導入しました．この OECD は 2011 年には大学でも教育成果を調査する「高等教育版 PISA」の検討に入っているとのこと，これに対応してか，さらに AO 入試増加にも対応するためか，「学士の学位水準を維持するため，卒業厳格化」の方針を中教審は打ち出しましたね．すでに入学時ではセンター試験がありますが，今度は大学版の全国卒業認定試験の導入となるのでしょうか．しかし，そもそもそういう方法でＰＩＳＡが重視している応用力が養えるのか，さらに地球の温暖化や環境などの新しい問題を解決するための創造力が身につくのか，私には疑問に思われます．何 10 万とか 100 万を対象にする調査になるのですから，記述式はとても無理で，コンピュータで処理できる方式に頼らざるをえないでしょうからね．朝日新聞の 2008 年 10 月 10 日の記事によりますと，今年のノーベル物理学賞に選ばれた益川さんは塩谷文科相に「本来みんなが持っている好奇心が選択式テストの受験体制ですさんでいる．『教育汚染』だ」と直言されましたが，これは的を射た意見だと思いますね．結局この問題は，「今求められている教養とは何か」というものに繋がって行くと思われますが，これについてもここで深めたいと思います．

さて，私たちの学生時代とはずいぶん変わって，グローバル化がどの分野でも進んでいます．企業も日本の学生で駄目ならと，外国から優秀な技術者や人材を獲得していますし，お金持ちの家庭では日本の教育に満足できず，子弟を海外に留学させています．オックスフォードやハーバード大学などは優秀な学生を世界中から集めなければと，そのための奨学金制度を創っています．グローバル化と貧富の格差拡大が国民の教育にも大きな影響を及ぼしていますし，企業が調達した外国人労働者の子どもの教育問題も深刻化していますね．この今と比べるためにも，まず私たちが学生として受けた教養教育について話し合いたいと思います．では牧先生，口火を切っていただけませんか．

私たちの教養時代

牧：私の学生時代は昭和 39 年からなので，戦後でも比較的早い時期でしたね．京都の私立大学同志社での 1 年，2 年の教養時代，そこで漠然と面白いと思ったのは，当時はマンモス教室で，

500 人から 1000 人入れる階段教室でしたが，当時の住谷悦治総長の講義や，それから田畑忍先生の法学の講義など，非常に格調高いお話をされていたというのがとっても印象に残っているんですね．やっぱり教養人は違うなと思い，大学の先生はさすがだという印象を受けましたね．それ以外では，専門に入る前に勉強したことはあんまり印象に残っているのはないですが，もう少し勉強しておけば良かったと思ったのは英書購読です．これは当時どこの大学でもあったと思いますが，私の専門の社会福祉に近いような英書をテキストにした購読が 1，2 年であったんです．私は英語に自信がなくて充分に勉強をしていなかったこと，これは悔やまれますね．社会福祉はアメリカやイギリスから入ってきた理論の多い学問なので，あの時にしっかり勉強しておけば良かったなあというのが後悔です．ドイツ語は 1 年の間少しやったんですけど，分からないままでしたので，これも残念でしたね．

江坂：そういえば，美浜移転前，名古屋の杁中に大学があった頃には，外書講読という科目があって，私はドイツ語のそれを担当していました．なぜかすぐなくなってしまいましたがね．ところで，先生の時代はもちろん第二外国語，必修だったんでしょう？

牧：必修です．

江坂：では，池谷先生の教養部体験はどうでしょうか？

池谷：僕はちょうど 1960 年代から 70 年代の切り替わりの時期の公立大学，横浜市立大学で学びました．当時は佐世保原潜寄港反対闘争とか学生運動の時期だったので，毎日デモがあったりして学生がデモで血を流して帰って来たりという状況の中で学んでました．僕の専門は哲学ですけども，3 年生からの哲学の本格的な勉強に入る前に受けた授業で印象深いものは 2 つありました．1 つは遠山茂樹さんという歴史学者の日本史概論です．そのあとすぐに出た岩波新書の『明治維新と現代』を出す前の原稿だったと思うんですけど，それを彼が授業で熱く語ってくれました．当時はサークル（同人誌やワンダーフォーゲル部）もやっていたりしてほとんど授業に出ないという中で唯一，きちんと出てノートをとって聞き入ったとても刺激的な授業でした．そこではやっぱり牧さんが言われたように，遠山茂樹さんがその当時研究していた学問の最前線の成果を語ってくれる，話してくれるというのが，どこまで理解できたかは別としても，非常に大きな影響を受けたということがあります．

それともう 1 つは，別の学部の授業で社会科学概論という授業だったんですけど，田中正司さんというジョン・ロックを研究している研究者がいて，その先生の授業でマルクス・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』を討論する授業があって，これは他学部の授業ですので単位にはならなかったと思うんですけれど，その当時はその授業が面白いなって思ったくらいです．あとは国文学で古事記を研究されていた西郷信綱さん（最近お亡くなりになりましたが）という先生もいました．この先生の授業は少ししか出なかったんですけども，興味を感じました．後でもっときちんと出ていれば良ったと後悔しましたが．しかし全体としては，やっぱり興味ある授業というのはあまりなかったように思いますね．その当時の学生全体が，それほど授業に出ているということがなかったというのもありますけど．

江坂：そうだよね．「教養」だけでは何かよく分からないが，ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』とかヘッセの教養小説というものを読むと，主人公が社会で色々な体験をしながら自らを創り上げて行く，それがドイツ語の「ビルドゥング」(Bildung) なんだよね，つまり若者がアリやキリギリスとは違う人間として生き，大人に成長しようとすること，これをドイツ語では「教養」と言うんです．

池谷：そう，そう．だから「教養について」語るとき，忘れてならないのは学生の自主活動ですよ．僕たちの頃は大学の外で同人雑誌を作ったり，それから「鎌倉アカデミー」(戦後三枝博音さんらが作った自主大学) を文字って，自分たちの住んでいる所の地名を前につけた「〇〇アカデミー」という自主的な勉強会をよくやってましたね．同人雑誌で大江健三郎はどうだとか語り合ったり，自分たちで文献を皆で読み合うとか，そういう場で学ぶというのも楽しかった気がします．

江坂：それは原書で？

池谷：いや，原書じゃないですよ，文庫本ですけどね．文庫の翻訳とかで，長続きはしなかったけれども，とにかくよく読んでいたよね．そこに同じ学年の学生だけじゃなくて，上級生もいたかな．

江坂：それはもう教養課程の時代から？

池谷：そうそう．

江坂：へぇー，僕の大学，名古屋大学では上級生との間にそういう関係はなかったな．羨ましいような良い環境で池谷さんは教養時代を過ごしたんですね．

池谷：江坂さんの所では上級生とのそういう関係はなかったのか．僕は大学 1 年ですぐに知り合った友人に同人誌のサークルに誘われて，授業には出ずにそこに入り浸っていたね．授業には出ずに，当時のメンバーの先輩の下宿に行くと，もうたくさんの本がいっぱい置いてあるわけです．彼は演劇に興味を持っていて，金もないのに，脚本家の全集なんかはずらりと揃えていた．例えば，千田是也とか．彼は授業には出ないんだけど，一生懸命それを読んでいた．とにかく，そういう人間がいっぱいいたような気がするね．

牧：私も大学入学直後 2 年生や 3 年生の先輩達に誘われた，自主的な読書サークルというのに刺激をうけましたね．色々誘ってくる中で比較的面白そうだなあと思って，最初に入ったのが読書サークルでしたね．大学の前にある御所の中で円座になって 10 人くらいずつで集まってやっていました．そこで最初に読んだ本が柳田謙十郎の『哲学とは何か』だったかな．それが大学の民主的と言われる人たちの間で盛んでしてね，「それを読んで，どう思ったか」という感想を，先輩が私たち 1 年生にずっと言わせるんですよね．私はその御所での読書会に毎回出て行っていると，ちょっとずつ難しくなってきてね，先輩たちは「ちょっと難しいかもしれないけど」と言いながら，マルクス，エンゲルスのものについて 4，5 人で掛け合いみたいに話すんですよ．そこに参加していた私たち 1 年生の 6，7 人はその掛け合いに目を白黒させながら，とにかく聞き役の方が多かったと思うのですが，エンゲルスの『空想から科学へ』とか『猿が人間になるについ

ての労働の役割』を読み合わせしました．その後少しずつ難しくなってきて，レーニンの『国家と革命』とかも読んだというか，読まされというか，とにかくその本の内容にも驚かされ，先輩にも感心させられ「ほんに1，2年しか違わないのにすごく賢いなあ」と，彼らが先生のように思われたんですよ．それで授業を聞いてるより，すごく面白いなあと思って，毎週その読書会に通いましたね．それから別に文学書を読むというのもあって，その中では宮本百合子の『貧しき人々の群れ』，それに野上弥生子や小林多喜二とかも読みましたね．

江坂：小林多喜二の『蟹工船』は僕も読み，そのレアールな描写には感心しましたね．この小説が現代では派遣社員の状況と酷似しているということでブームになっているという新聞記事を読み，その状況は違っても，過去は繰り返されるのかと思わされましたね．宮本百合子の作品には『播州平野』という小説もありますよね．その女流作家のファンで研究者であった佐藤静夫さんはこの大学の教授でしたよ．

牧：それは初耳ですね．それから思い出しましたが百合子の『伸子』も御所での円座の読書会で扱っていましたわ．こう話してると，何か嬉しく当時が思い出されますわ．私たちに先輩がその小説の概要とか意義をとうとうと述べるので，やっぱりこれは勉強をしなきゃと思って，そうした文学書を読みました．小学校時代は『路傍の石』，中学時代は『走れメロス』，高校時代は武者小路実篤や有島武郎で，2年か3年の頃にトルストイの『戦争と平和』に少し共鳴したり，当時『パリに死す』の芹沢光治良に傾倒して，「この人は素晴らしい」と思ってたりしてました．でも先輩の薦める本は少し違う，それで価値観がすごく変わったというか，「ああ，こういう理論的な勉強や読書をするのが大学生なんだ」という意識が，先輩たちに揉まれる中で育ちましたね．その当時の2年，3年生は大学の先生を馬鹿にするくらいで，「あんな教授なんか大して勉強してへん」と言ってるような時代で，「我こそは……」という自立心旺盛な先輩に囲まれ，こういう人たちが関わっている学生運動って，やっぱり大事なことなんだとか思いましたね．

その中で私はよく発言した方ですが，先輩には「自分の意見を発言せい」とよく言われましたね．それで，京都の御所で円く座ってるから，右回りとかの一方通行で順番は進んで来るんで，「次は私の番だ」というのは明らかで，何と言おうかと必死に考えましたね．この円座では，質問されたら「ちゃんと，まとめて表現する」，「自分の感想とか意見は相手に伝えるために的確に表現する」，そういう能力が必要だということを先生からではなく，先輩に教わり叩き込まれ，非常に勉強になったと思いますね．今考えてみたら池谷先生のお話聞きながら，「一番勉強になったのはこういう自主的なサークルで，読書サークルの中で育ったのかな」と思い出しますわ．それから部落問題研究会にも顔を出しました．そこでは住井すえの『橋のない川』を読んだり，婦人問題研究会を覗いたら，「婦人問題だったら，やっぱり平塚雷鳥や帯刀貞代などをしっかり勉強しなあかん」と言われ，そういうサークルで揉まれているうちに「ああ，子供の頃には漠然としか感じられなかったが，これが本当の男女平等の考え方なんだな」と，心の感じから大学生らしい一段高い頭脳的なものになって行く，そういう自分の成長を実感しましたね．そういうのって，とっても大切で，これを御所の円座で自ら体験したんですわ．それで，そこで覚えた知識は

今でも覚えてます．作者名とか，書名をきちんとね．今そう思い出してみると，あれが私の教養を育ててくれたんかなあとね．あの懐かしい御所の円座で，人間として考えなあかんこととか，そういうことが培われたかなと今思い出されましたね．

池谷：牧さんの話を聞きながら，もう１つ思い出したのはね，ワンダーフォーゲル部というサークルに入っていたんですが，その部室にノートが置いてあって，みんながそこに何でも自由に書くんですよね．誰かが何かを書くと，それに対して反論したり議論したりする，そういうノートがあったんですよね．恋愛論とか革命論なんかもあったりしてね，面白かった．いま考えてみると，とにかく書くということ，自分の考えを出して，反論されてそこでまた思案したりする，これが意外と役に立ってる気がするな．

江坂：今では紙に代わって携帯が登場し，その画面の狭さに制約されて，文章が短くなり，または絵文字というものまで出現し，それで言葉や文章が貧弱になっていますね．

牧：そう，それは大きな問題ですよね．携帯に影響されて，紙に書く文章までそうなって，文と文を繋ぐ接続詞が使えない．使っても，接続詞にも色々あるのに，それが頭に入ってないので，少ない接続詞だけで済ませるから，正しい接続になっていないの．例えばレポートで，何でも「～なので」って続けることに，私すごく引っかかったので，「なので」って言うのは，次の文に繋がって，「従って」という意味でしょう？でも，それで一向に従っていないよね．何でここに「なので」って入れたのって聞くと，「初めて指摘されました」って言うの．

ところで，私のサークルでは池谷さんのようなノートに書くということはなかったですね．私は部活よりアルバイト中心の生活でしたが，幸いにも学校には来れる条件があって，婦人問題への取り組みや読書会に参加したりと，大学生活を満喫出来てましたね．その読書会で使ってた部屋は他のサークルとか，法学部の人たちの集まりとか，音楽サークルとか，10 くらいのサークルも一緒に使ってたんですよ．ですから，そこで読書会を文学部の人に誘われてやっていると，商学部，法学部，工学部の人とか，とにかくいろんな学部の人が来てましたね．それがもっと広がったのを「ボックス」って呼んでたんですけど，その「ボックスの会」というのがあって，そこに行ったら，サークルによってやっていることは違うけど，すごく夢をもって青春を語るところがあって，その中身は音楽であったり他にいろんなことで語るんですよ．他に演劇サークルもあったりして，色々な刺激を受けましたね．田舎から来た子からしたら，こんなのがある，こんなのもあるという新鮮な刺激をね．スポーツ・クラブの人はいなかったですけど，ああいう他の学部の人と付き合えたことは良かったですね．例えば工学のことをよく知らない私からしたら，どういうことを思って工学部を選んだのか疑問だったんです．すると彼らは「こういう所が面白いんだよ」と未知の世界を教えてくれるんで，私にとってすごく幅が広がったというか，いろんな人がいるんだなあということが分かりましたね．その「ボックスの会」の集まりが京都で 5 年に一回ずつですが，世代を越えて未だにまだ続いているんですよ．

江坂：へえ，それがまだ続いているなんてすごい，羨ましいかぎりですね．そうすると，牧さんは色々な学部生との交流で，違った専門の分野と視点を獲得できたわけで，教室の外で，まさに

自然・社会・人文科学の「教養教育」が行なわれていたとも言えますね．僕には残念ながらそういう他学部との定期的な交流はなかったですが，理学部など自然科学の院生と集まる機会があり，そこでスプーンを念力で曲げる少年のことが話題になったのです．当時テレビでさかんにスプーン曲げの実演が映し出され，今ではそれを超能力とか超常現象と言うのでしょうが，理学部の院生は一笑に付しましたね．物体が運動を変えたり変形する時には，物理的な力が加わっていると言うわけです．高校で物理を学んで来たはずですが，問題に数式を当てはめて解くという練習が主で，力学の基本を僕は身に付けていなかったわけですよ．だから，少年がスプーンを空中に投げると，それが彼の念力で曲がり落ちてくる，それをテレビで見せられると不思議だと思うだけで，残念ながら彼のように一笑に付せなかった．牧さんはそういう他の専門分野の人たちと交流できたのだから良かったですね．

牧：そうですね．その会が今年もあるんですよ．そこに集まってくる仲間はね，一番上が私より10歳くらい上で，私たちの1年後の人たち，つまり団塊の世代くらいからは集まって来ないんですよ．私なんか後からついて行った方ですが，未だにそこに参加しています．そこに集まってくる人たちはきっと，同じ青春時代を共有したという仲間意識が強いのかなと思いますね．

江坂：池谷さんも僕も戦後のベビー・ブームで生まれた団塊の世代に属するわけだが，牧さんと2年ほどしか違わないですよね．でも，牧さんの話を聞いていると，歳もずいぶん違う他学部の人たちと非常に濃密な人間関係を結ぶことができ，今でもそれが続いている．僕はサークルには入らなかったからか，とにかく先輩たちとそういう関係はできなかったですね．ところで二人の話を聞いていると，授業は例外を除いてあまり面白くなかった，そういうことですね．

僕も同感です．僕が受講した「英文法」とか「生物」は高校の焼き直しのようなものでしたし，他の講義は面白くない，または何か良くわからない，理解できないものが多かったですね．その後者の例ですが，自然科学の単位になる「科学史」の授業だったと思いますが，とにかく僕の頭では理解できなかった．この授業で夏休みの宿題が出され，それがアリストテレスの『形而上学』とプラトンの『饗宴』を読んで，レポートを書いて来いというものでした．まだ1年生だったから，真面目に岩波文庫のそれを買い読みました．プラトンの作品は「愛」がテーマで，それまで「あの女の子が好き」というのが「愛」だと思っていた僕に，そういう異性間のだけでなく同性間の「愛」もあり，さらに学問とか知というより高度な「愛」を求めなければならないと教えてくれました．僕の個人的な「愛」観はそれで相対化されましたね．

この『饗宴』には「愛」がどうして生まれたかという議論も含まれていてね，かつて人間は完全だったが，それを恐れた神が人間を二つに切断してしまった．男女に分かれてしまった人間はかつての完全を希求し，その片方との合一を求める．それで，かつて男と男で完全だった人間はその相手に男を，女と女でそうであったのは女の相手を求め，ホモ（homo，「同一の」）になり，男と女であった場合は異性を求め，ヘテロ（hetero，「異なる」）になる．そういう説明には驚くと同時に，「古代人というものは，すごいことを考え出したものだ」と感心しましたね．

ここで一つヴィッツを紹介したいと思うのですが，ドイツ統一後にこのヴィッツを見つけたと

き，あのプラトンを思い出しました．当時の東ドイツはソ連の友好国で，上の方はそれを強調していましたが，下の庶民の方は逆の気持ちでした，そういう事情がこのヴィッツの前提となっています．

フィルテク教授の「愛」についての講義

「さて皆さん，当然知っておかなければならないことですが，愛には 4 種類あります．第一が男と女の愛ですが，これは大変重要なもので，大変広まっていますね．第二に男と男の愛があります．これは全然重要じゃありませんが，これも広まっていますね．第三に女と女の愛がありますが，これは全く重要ではないですし，そんなにも広まっていませんね．第四がソ連への愛です．これはもう絶対的に必要不可欠なものなんですが，全然広まっていませんね」．

牧，池谷：はっ，はっは……

池谷：まさに『饗宴』だ．

江坂：そう，まさにそうです．このヴィッツを創った人はそれを読んでいた．こういう教養から生まれた批判的創造力がこのヴィッツを創らせ，ドイツ統一に貢献していた，これは驚きですよね．

もう一つの宿題だったアリストテレスの著書は全く理解不可能でした．高校時代まで岩波文庫の文学とかガモフの宇宙論だとか読んで，それはそれなりに理解できていたのですが，アリストテレスのはさっぱり分からなくて，僕に分らない本があったということを思い知らされましたね．これをきちんと読めるようにしなくちゃけない，そういうことを教えてもらったという点では良い宿題だったと思いますね．

それから僕は文学部だったから，先輩に語学は「しっかりやっていないと，ひどい目にあうぞ」と言われてね，そう言われても 1 年の語学の授業は面白くなかった．

牧：文学部の何になるんですか，江坂さんは．

江坂：僕は最初から独文をやろうと思って大学に入ったけど，教養課程のドイツ語は僕たちの年齢に合った例文ではなく，Ich habe einen Vater und eine Mutter（私には一人の父と一人の母がいます）というものばかりで，本物の文学とはかけ離れた小学生用のもので，だから授業は余り熱心に受けませんでしたね．そこでドイツ語の杉浦先生という指導教官にそういう理由を話し，シュトルムの『イムメン湖』（Immensee）を紹介してもらいました．名大のクラスは第二外国語で分けられていたから，みんなドイツ語を取っていたんですよ．だからクラス全員に「皆でこれを読もう」と仲間を募り，40 人中 35 人ぐらいが集まったので，自分たちでその冊数を注文し，まだアー・ベー・ツェーを 1，2 ヶ月前に習ったばかりなのに，ドイツ語の原書で読み出したんです．この頃はもう初歩的な人称変化と格変化は授業で習っていた，そしてドイツ語と英語はもともと同じゲルマン民族の言語ということもあり，途中で挫折することもなく，春休み前には読

了に至りました．ただ問題なのは，言い出しっぺの僕は余り定期的に参加しなかったということ，これは個人的に反省していますが，次に 35 人で始まったのが終わりには 5 人ほどにまで減ってしまったということ，これは必修の授業科目ではない自主的なものですから仕方のないことですね．だって最初は意気込んで参加しても，学生生活に慣れてくるとサークルとか，家庭教師のアルバイトとかで色々な都合が出てくるから，一人離れ，二人欠けということになって行くよね．だから数人になっても，読破したということは大したものだと思うよ．僕は余り参加できなかったけど，中心になって引っ張っていた数人は，その後独文とか国文とかで進路は違ったけど，研究者になって行ったね．

ところで牧さんの場合は聞きほれるような講義があり，池谷さんの場合は先生の最先端を行く専門的なもので感動しながらノートを取った教養の授業があったというが，僕の場合は残念ながら，こちらの方に責任があるとも思うが，そういうのはなかったな．ただ後になって，岩波新書の『法とは何か』とか『教育とは何か』という専門外の者にも分かりやすく，その本質を教えてくれものを読んでね，こういうものを教養課程でやってくれたら良かったのにと思いましたよ．歴史とか物理学とか色々専門分野がありますが，単なる細かな事実とか知識の寄せ集めではなく，その本質と言うか，独自の視点というか，そういうものが重要だと思いますね．

教養とは何か，

江坂：例えば，あの「スプーン曲げ」を一笑に付してくれた理学部の院生は，それで物理学の本質を語ってくれましたね．これは物理の問題が解けるということとは全く違うことですよ．あのテレビ番組はいかさまだ，どこかにトリックが隠されているということをズバッと教えてくれたのです．その番組放映の数年後，そのトリックを暴露し，テレビ局のやらせを糾弾した記事を読みました．

池谷：そのテレビ番組なら僕も見たよ．念力を集中するためにということで，テレビ・カメラや人々を後ろ斜めに離して，少年は後ろ向きにしゃがみこんで，後ろにスプーンを投げると空中で曲がるというものだろう．それで，落ちたスプーンを番組司会者たちが拾い上げ，「アッ，本当に曲がっています」と叫び，そのスプーンをカメラでズーム・アップすると言うやつだろう．

江坂：そう，そう．その暴露記事によると，ある人が不思議に思って，番組終了後その少年が屈みこんでいた所を見てみると，物体を押しつけた跡が残っていた．つまり念力を集中するためにではなく，カメラに写らない，皆から見えないようにして，スプーンを床面に押し付けるために屈んだだけで，スプーンは空中に投げられる前に既に曲がっていた．だからあの院生が言ったように，物体を変形させるための物理的力が加えられていたわけで，念力でも何でもない．プロのマジシャンは最初に「トリックだよ」と言って，観客を不思議がらせ楽しませるから良いが，あの番組製作者はそのからくりを初めから知っているのに「超能力少年あらわる」と言って，やらせるのだから罪が大きいよね．今でも民放にはそれに似た番組があるが，そういうものに騙され

ないためにも，本質を押さえた教養教育がなければと思うよ．これは物理学とか歴史学の専門家だけが知っていれば良いというものではなく，誰にも必要なものだと思うよ．

池谷：それは分かるが，江坂さんが挙げた『法とは何か』のような概論形式で教養教育がすべてできるかと考えると，そうではない形態もあると思うよ．国立と市立では違うかも知れないけど，僕の大学では概論をやらなくちゃというより，自分が専門としている学問研究の最先端をどう学生に伝えるか，これを基本に学問研究をしていた先生方が講義していたみたいな気がするね．もちろん，古いノートをもとに講義する先生もいたけど，軽蔑していたね．

江坂：それは，そうだ．学生にどう本質を伝えるのかという所が重要で，いくら概論形式のものでも本質抜きのものや，学生に理解できないものだったら，何にもならないからね．そう言えば教養のとき大橋精夫さんと嶋田豊さんの共著『近代的世界観の展開』という本を買わされてね，この内容は哲学・思想史で概論の類に入るのだろうが，古代から現代までの哲学の中心概念とか考え方の紹介で，高校レベルの頭しか持っていない僕には理解不可能だったね．「概念」とか「普遍」など，そしてカントの「物自体は認識できない」という言葉もね．だって例えば，「僕は犬を見れば，犬だと分かるのに，カントさんは犬と猫の違いが分からないのだろうか」とか，そんな水準ではカントの「物自体」なんか理解できないからね．

池谷：それは認識論の問題で，ヒュームの「不可知論」に対してカントは……

江坂：そうなんだ，今ではそれが良く分かるよ．でもあの頃はね，理解に苦しみながらも色々な本を読んだり，「この先生，何が言いたいんだろう」と考えながら，考えさせられているうちに，だんだんと分かってきた．だから何かの切っ掛けで，その頃のテキストを開いてみると，良く分かる自分になっているのに驚きながら，あの理解不可能な講義をして下さった先生に何となく感謝してしまうね．だが基本的な概念などは，例などを出して，僕に分かるように教えてくれていれば，もっと早くそれが飲み込めたと思うよ．

牧：そういうことって，誰にもあるんじゃない．

江坂：だけど，あの頃はね，授業が分からないから，面白くない．高校までは，数学はともかく，他の科目はほとんど暗記が主で，とにかく覚えなければと思い，歴史などは物語風に想像して覚えていましたね．大学生になっても覚えること，それが勉強だと思っていました．そんな頃のある時，マルクスとエンゲルスが書いた『共産党宣言』を読んでいたのですが，その冒頭にある「これまでの歴史は階級闘争の歴史であった」という一文これだけは良く分からなかったんです．読了しても，それが良く分からないので，何となく気になっていたのです．ある日，生協の書籍部の棚でその原書を見つけ，「日本語訳だから分からないのでは」と考えて，辞書を引きながら読んでみたんですが，そうではなかったことだけが分かり，実に自分が情けなかったですね．僕にとっては「歴史とは覚えること」だったのに，それを「階級闘争」と言われても，当惑するしかなかった．分からないっていうものは，いつまでも頭のどこかに残っていて，折に触れて心をチクチクするものですよね．

牧：悲しい片思いと同じですね．会えば苦しい，会いたくない，だけど会いたい．

池谷：ロマンにまで至らない閉塞感…….

江坂：まさに，そういう心境ですよ．それが，ズーッと続いていた或るとき，僕は生まれ変わりました，高校生から大学生にね．歴史は単なる暗記の対象ではなく，僕と同じように「自己成長」(sich bilden）して来たし，未来に向かって成長しているんだってことがね．マルクスたちはその歴史を動かしている原動力を探求し，神でも英雄たちでもない，「階級闘争」にその原動力を発見したんだってことが分かった．同時に，高校までの教科書も含め，これまでの歴史書というものは色々な歴史観で書かれているのだということも理解できましたね．「現人神」という天皇中心の歴史観，神の意思が展開されているというキリスト教などの歴史観，技術の発展を中心にすえた歴史観など色々あり，エンゲルスたちは唯物史観というもので「階級闘争の歴史」だと考えた．ではお前はどう考えるのだ，そういう質問が僕に突きつけられたわけです．すると，これまでの歴史は僕にとって暗記の対象でしかなかった赤の他人ではなく，それは僕と共に歩きながら発展し，「お前は歴史の中でどう成長（Bildung）するんだ」と絶えず問いかけ，励ましてくれる同伴者と思えるようになりましたね．

牧：そう，そうですね．でも最近の人間と社会の関係を見ていると，人間がどんどんバラバラになり，歴史性も社会性も失っているように思えますわ．社会福祉も社会が取られて「福祉」とか「ふくし」になってしまったり，

池谷：社会科学という学問はルソーの『社会契約論』が 1762 年で，マルクスの『資本論』の第一巻が 1867 年だから，18，9 世紀ごろから特に興隆する比較的新しいものですよね．ここで議論している「教養」という点で言えば，アメリカの教育制度のリベラル・アーツ（英：lieral arts）がいわゆる教養科目ということになりますが，元来中世ヨーロッパの「自由な学芸科目」(ラテン語：Artes liberals）で，これには文法，修辞学，弁論術の 3 言語分野と，算術，幾何学，音楽，天文学の 4 数学分野で，合計 7 科目でした．これにどうして「自由な」という形容詞を付けるかと言うとね，古代ローマの時代に他の実用的な土木・建築などは奴隷の仕事に関係するものとされ，これに対してこの 7 科目は自由な市民が修得すべきものだったから，そういう形容詞が付けられたのです．これは当時の国際語であったラテン語の学校で教えられていたんだが，時代と共に変化した．

江坂：中世を支配したのが神と人間の仲介をするとしたキリスト教会で，当時は「神の命」に従って「人間は生きるべし」とされていましたが，ルネサンスと宗教改革により，その教会の権威が崩れ，その教徒を指導するマニュアルそのものが果たして正しいかどうかに疑念が生じ，批判が加えられるようになりますよね．それで，次は池谷さんの専門になるが，宗教から哲学へと主導権が移って行く．

池谷：そうだ，すべてを疑い，そう疑っている自己が最後に残っていることだけは確かだとして，「我思う，ゆえに我あり」と言ったデカルト（1596-1650），彼はそれで神までも一旦否定してしまったのですから，近代哲学の祖と言われるんです．イギリスではホッブス（1588-1679）やヒューム（1711-76）が，ドイツではカント（1724-1804）やヘゲール（1770-1831）が出てくる．これ

らの哲学者は宗教に代わって人間界のすべてを扱った．例えばカントは『純粋理性批判』で自然科学の根拠を，『実践理性批判』では倫理とか法という社会の基本をね，『判断力批判』では芸術とか美を扱ったんです．神の問題はそれぞれの哲学者で違いますが，教会の神から自立した個人の神に，あるいは絶対精神のようなものに変化して行くんです．

そしてフォイエルバッハ（1804-1872）やマルクス（1818-83）はそれを唯物論的に逆転させ，神は人間が作り出したものとなる．絶対的真理とされていた神が否定され，科学がそれに代わるわけだが，その科学がどんどん細分化されている．そして，その科学・技術が生み出したものが人間の手によって悪にも使われる現状，これが問題ですよね．例えば原水爆や化学兵器などですが，第二次大戦後アインシュタインなどはそれを生み出すのに協力してしまった科学者の社会・人類的責任や倫理を問題として，原水爆反対の運動を展開しましたよね．こういうものが教養の問題として係わってくると思うよ．だって「人間としていかに生きるのか」という問題なんだから．「自分は科学者の役目を果たしただけで，それが大量殺戮に使われようと自分の問題ではない」，それで善いのかということですね．それは科学者だけの問題ではなく，みんなの問題にもなる．例えば，「一国民として税金を払うが，それがどのように使われても知らない．自分の生活のために働いているだけで，私が産出したものが兵器であろうが，食中毒を起こそうが知らない」．人間としては，いくら何でもそうは言えないでしょう．もちろん労働者にそうさせた政治家や会社の上司の責任の方が重いでしょうがね．

江坂：僕もそう思うよ．細分化された学問・科学を個人ですべてマスターすることはできないが，基本的なものは押さえておかなければならない．それが自然・社会・人文科学を修得すべしという教養課程であった．その現実化がどうであったか，それはともかくとしても，人間として生きようとする限り，そういう教養は必要だと思う．インテリジェンス・セオリーのような似非科学とかオウム真理教のようないかがわしい宗教が今なお存在するということ，これに騙されない人間として生きて行く基礎として，教養は必要だと思う．オウムの信者に高学歴の医師などがいたことが問題になったが，その彼は「医学だけで人間の問題は解決できない」と考え，入信したそうだよね．その点では僕も彼と同じ考えだが，逆に宗教だけでも解決できない．法廷に立たされることになってしまった彼の姿がそれを証明している．そもそも人間なんて不完全で未熟だから，知らなかったことを恥じ，それを知ろうと努力しながら自己成長して行くものだよね．ゲーテの言葉に「人間努力する限り，過ちを犯すものだ」というものがあるが，「あやまち」とか失敗の連続が人間の人生だと思う．それを恐れて何もしないのは人間として死んでいる状態で，いつまでも成長できないわけですからね．

牧：あれって普通「迷うものだ」と訳されていますよ．

江坂：そう訳されたのは語呂が良いからじゃないかな．だって「あれか，これか」で「迷っている」だけでは何もできないし，成長も発展もない．その言葉は『ファウスト』の最初に，神の言葉として出てくるのですが，その主人公が迷っているだけでは神の境地に近づけないですよ．ファウストは色々な過ちを犯します，グレートヒェンという無垢な女性の悲劇までも招きますからね．

それを契機にして彼は反省し，新しく大きな世界へと自己成長して行くという，ドイツ教養小説の主題を戯曲というジャンルでゲーテは展開しています．

牧：そうですよね，確かに迷っているだけでは何にもならない．ところで，細分化された科学が起こす問題解決に「教養」が重要だということ，私もそう思いますね．この問題は細分化され，個々人がバラバラになっている人間関係を再構築するのにも重要やなと思いますよ．もともと社会福祉というのは資本主義が生み出した貧困を社会的に解決しようという所から生まれてきたと思うのよ．ヨーロッパではスウェーデンなど北欧諸国を中心にその本来の社会福祉を実現しようといるのに，日本はアメリカの真似をして，格差を広げる社会にして，最近問題になったグッド・ウィル（good will）という会社がやっていたコムスンは福祉産業をお金儲けの種にしている，これは変だと思うわ．そこで働いている人はワーキング・プア（working poor）にされ，その仕事にやりがいを感じているのに人手不足の負担を背負い込まされ，疲れ切って 3，5 年で職場を後にする，これは悲し過ぎますよね．だから教養とは個々人を人間として結び合わせるものでないといけない，そう思うのよ．

江坂：そう，僕もそう思う．池谷さんが話したように，宗教にとって代わった哲学はすべてを扱った．その全体から色々な部分に独立・発展し，人類はその各専門科学から多大の恩恵を受けているわけだが，逆に見るとその全体性を失って，現在に至っている．19 世紀で社会科学が持てはやされ，20 世紀ではその一分野の経済学が大手を振っていたが，日本ではバブル崩壊で後退し，最近ではアメリカでもサブ・プライム問題でリーマン・ブラザーズが潰れてしまって問題になっている．人間はお互いで助け合わなければ生きて行けないのに，人間社会の全体がおかしくなって，人にではなくお金に頼っている．

ところで，この問題についてユダヤ人のヴィッツを一つ紹介したいんだが，これは時々ポッと頭に浮かんで来る，なかなか意味深長なものでね，ちょうど今もそれを思い出したのですが，かいつまんでお話しましょう．ユダヤ人の男がその宗教指導者ラビのもとを尋ねている時にこう質問するんですよ，「ラビ，どうしても分からんことがあるんですが，人間というものはどうして利己主義なんでしょうね？」．するとラビが「そのガラス窓から外を見てごらん，何が見えるかね」と逆に尋ねるのです．その問いに対して，「街路を歩いている人がお互いに出会って，ニコニコ挨拶したり，笑いながら談笑したり，抱き合って喜び合っています」と男が答える．ラビは「では，その壁にかかっている鏡を見てごらん．何が見えるかね」．男は「私しか見えません」，ラビは「分かっただろう，金がからむと，人は自分しか見えなくなるのだ」．それで終わりなんですがね，鏡のガラスの裏には銀が塗られているから，自分の顔が写り，銀は当時の貨幣ですよ．それがなければ，透明な窓ガラスの向こうのように人間同士の自然な光景になるというわけです．なかなか意味慎重でしょう，このヴィッツは？

牧：そう，面白いわ．それで思い出したのですが，「ウサギとカメ」のお話があるでしょう，丘の上を目指して兎と亀が競争をするという話．兎は途中で休んで眠ってしまうが，ノロノロの亀は休まず歩き，兎を追い越し，先にゴールに辿り着くという話．これって休まずコツコツと努力

することが大切だってことを子どもに教える話ですよね．でも，今の格差社会で派遣労働者はなかなか正社員になれないし，怪我とか障害で健常者のように働けない人に合った仕事を社会の方が提供しないで，「頑張れ，頑張れ」，「エンパワーメント（empowerment)」，「自己自立」と言っても酷ですよね．それを「自己責任」と言っても可笑しいと思っていたのですが，この前 NHK のテレビでね，「寝ている兎さんを起こしてあげられる亀さんになりたい」という言葉を聞いたのよ．そうお坊さんが言ってたの，それで彼のような高僧もいるんだなと感心しましたわ．これって，それぞれの人生で助け合い，一緒にゴールしよう，そういう精神でしょう．

池谷：江坂さんのヴィッツは人間の矛盾をついている意味深長なもので，牧さんの話は人間の真善美を結晶化したものだね．ドイツのビーレフェルトに市民がボーデルシュヴィングの指導の下で，1867 年に設立したベーテル（Bethel）というキリスト教の奉仕施設がある．ヒトラーの時代にそこの精神薄弱者たちを抹殺しようとナチスが門に迫った時にね，体を張ってそれを阻止し，救ったというので有名なんだ．このキリスト教の団体の話も，牧さんが紹介された高僧の話も実に美しいですよね．

江坂：吉井さんが本学にね，確か北海道「べてるの家」の人を招かれて，講演会をやられていますよ．日本にもそういう精神が受け継がれているとしたら，嬉しいですね．宗教は古いとか，葬式坊主に成り下がったとか色々批判の声も聞きますが，二人のお話に出てきた宗教者には本当の教養があったのでしょうね．牧さんの高僧は本来の社会福祉の精神を体現していますし，ベーテルが守ったものは今まさに言われている「人権」ですよ．

池谷：ナチスは当時の最先端をいっていた遺伝学を勝手に解釈し，ユダヤ人やベーテルの人たちを劣った遺伝子を持った者として殺していたのだから，それに抵抗するというのは，まさに自分の命を賭けた勇敢な行為ですよね．単なる宗教的心情とか法悦のようなものではなく，ヒトラーの御用生物学者より幅広い分野の知識を持った教養人だったと思うよ．その反例は似非宗教のオウムで，これは上九一色村の住民と敵対していたのに，あのベーテルはビーレフェルトの市民たちがその施設設立に協力し，ナチスの手から精薄者を守り抜き，そして今でもその維持と発展に協力しているんだからね．

江坂：本学を設立した鈴木修学さんも，そういう高い宗教心と教養を持っておられたと思うよ．僕が聞かされた話ではね，戦後の日本は戦争で親を亡くした孤児で溢れていた．その彼らを救おうと努力され，とても自分一人の手ではどうしようもないから，この志を継いで助けてくれる若い人を育てようと「中部社会事業短期大学」を創られた，そう聞いてるよ．そういう「人権」意識のある宗教心と科学を基礎にした小さな大学，当初は経営という面で色々苦労があったようですが，福祉を実現するためには社会科学の総合的な大学にしなければならない，そしてそのためには杁中の校地では狭すぎるということで，総合移転が最大の課題となってきた，そのころ僕はこの大学に赴任したんです．

その頃の教養科目として「現代と学問」という 1 年生のゼミがあり，そこで僕は新書レベルの本を学生と読みながら，高校までの知識・暗記中心の学習から，その知識を批判的に受け継ぎ，

創造的に発展させる精神を養おうとしていました．このゼミ目的は，誰がそう名づけたかは知りませんが，「高校時代の垢落とし」と言われていましたね．この１年生ゼミは全国でも珍しかったらしく，多くの大学に広まって行きました．2 年次にもゼミができ，3，4 年次の専門ゼミと繋げることになり，福祉大のゼミ体系が整って行ったのですが，最近は実習体系に取って代わられているようですね．

クラス編成はこのゼミ体系で行なわれ，他大学の第二外国語クラスによるものとは違っていました．例えば僕が教養時代を過ごした名古屋大学の場合は第二外国語が必修で，文学部の場合は第三まで，そして学部に進学するとラテン語までもそうでしたが，とにかく第二のドイツ語かフランス語でクラス分けがされ，そのクラスが体育の授業を一緒に受ける，他の教養科目も他のクラスと共に大き目の講義室で受けるという編成でしたからね．福祉大ではその第二外国語が選択になったため，語学と言えば英語だけが必修でしたから，そういうクラス編成は不可能だったのでしょうね．

「教養」または「一般」と「専門」との統一とは

江坂：そういうわけで，私が赴任したとき大学は名古屋に校舎があったのですが，その頃は今の学長の宮田さんが教務部長をしておられましたね．その時良く聴かされた言葉のなかに「一般と専門の統一」というのがありました．ではドイツ文学を「専門」にしている僕は，「一般」課目の担当者として，何をどう講義すべきか考えましたが，ドイツ語に直してみると意外と簡単になります．ドイツ語で「一般」とは＞allgemein＜というのですが，これは「みんなに共通」と意味です．人間は個々人でも「みんなに共通」なこの時代の社会で，それぞれ自己「成長」(Bildung，教養）しながら，それぞれの「専門」へと進むのだから，その成長を助け，専門研究の基礎を作る科目が「一般教養」ということになるのだろうと考えました．ところが，それを具体化するとなると，大変な試行錯誤の繰り返しでしたね．

というわけで，今から主にこの「一般」と「専門」の関係について話し合い，その統一への足がかりでも，お互いにつかめればと思いますが，…….牧さんは社会福祉をやろうと京都の大学に入られたのでしょう．そこでの体験を話して下さいませんか．

牧：そうですね，その専門の話なんですが，入学当初にオリエンテーションで，「あなたたちはこういう専門で来てるんやから，これはこのために必要ですよ」と，きちんと説明してくれたら良かったと思いますね．必修科目で，とりあえず１年生で語学をとって，他に教養科目は色々ありましたが，福祉関係の科目は多くなかったですね．専門との関係がはっきりしないから，教養科目を受けながら，そんなのを求めてじゃなく，福祉という専門を勉強するために大学に来たのに，いつ始まるんやろうと，ずっと思っていましたね．私だけではなくって，仲間もそう言ってたんですよ．「公的扶助論」は確か大きな教室で，それから「ケース・ワーク」なんかも聞いた記憶はあるんですけどね．当時は資格もないし，とりあえず卒業すれば良いという感じで，出て

も出んでも良いような講義を受けながら，こんな勉強してて，専門家になれるんやろうかと不安に思ってましたね．今とはほんまに逆の状況でしたわ．これから職業に就くための必要な勉強，技術や知識を私はどこで学ぶんだろうと思ってる間に，なんとなく卒業しちゃったんですよ．そのためか，学士で卒業して専門分野の職業に進まなかった人が多かったですね．7，80 人のうちの 4，5 人ですよ．特に男性の半分くらいは一般企業でしたね．

「福祉を勉強しに来たつもりやったけど，大した専門の勉強をしてないなあ」と不安に駆られて，先生に聞きに行ったら『医療社会事業』という本を紹介して下さったのですが，これは授業でやっていないから，自分で読んだわけです．それと孝橋正一の『個別社会事業』だったかな，これも独学で．当時の就職先は福祉施設という選択肢しか見えてなくて，しかも「それはどういうことをする所？」という具合で，はっきりしたイメージが持てない状況でしたね．だから「福祉関係の就職先がなかったら」という場合を考えて，当時は「でもしか教師」の時代だったから，なりたくないけど，いちおう社会科の教員免許は取ったかな．それからね，当時は健康と命を守る職業と言ったら，保健師さんとか看護師ということでしたけど，今からそれになるのには時間がかかるし，それは嫌だなあと思って，そんな消去法で就職先を考えていたんですわ．そんな時にね，ゼミの先生は角田豊教授でしたけど病気がちだったので，当時まだ若くて講師だった三塚武男先生を訪ねたら，「医療社会事業（今の MSW）はこれからの職業だ，資格も何もなく自分たちが創り上げるものだから，そういう所へ飛び込んだ方が面白いじゃないか」と言われましてね．ところが，その勉強もきちんと習ってないし，「そんな漠然としたもの，職業としてどうかな」と，そういう感じで過ごしていたの．それで先ほどお話しました，あの本を紹介していただいたわけなんです．

今の若い子たちは社会福祉士の国家試験の勉強を重視してますが，あの頃はそんな風で，むしろ逆でしたね．

江坂：福祉大も僕が赴任した頃は，牧さんが言われたような声が多かったですよ．福祉を学びに来たのに福祉の科目が少なく，1 年生用に「社会福祉概論」のような何かが置いてあったぐらいでね．そういう状況はね，僕たちが入学した時にそれぞれが感じたこととも一致しますよね．僕にしても，ドイツ文学をやろうと思ってきたのに，どうして教養部で一時お預けにされるのかと思いましたからね．牧さんは専門科目の少なかったあの頃を学生として，そして逆に教養が少なくなり過ぎているのではという今を教師として，その両極端を経験されているわけですよね．現時点から見て，教養というものをどう思われますか．

牧：私は今の若い子たちを見ていて，大学入学前の教養形成の違いをまず感じますね．私の高校時代を振り返ってみると，当時の高校は非常にしっかりしていたような気がしますけど，違いますか？私の高校では日本史や世界史の授業が結構長くあったように思います．

江坂：そう言えば昨年，世界史の未履修が問題になりましたね．

牧：そう，そう，私はその世界史が好きだったんですよ．日本史も好きだし，国語も大好きで，「好きこそ物の上手なれ」で，それはものすごく勉強しましたね．英語はあまり好きじゃなかっ

たですけどね．それから生物は個性的な先生がいて，植物とかの面白い話をしてね，当時はそういう個性的な先生がおられたように思うわ．私の高校は県立でも片田舎の，今でいう偏差値の低い方でしたけど，私はこういう面白い先生のおかげで，日本史や世界史などが好きになり，しっかり勉強した気がするんですよ．また短歌・俳句もやらないかんみたいな雰囲気の中で，古文も大好きでしたね．とにかく当時は学校でしっかりと教えてましたから，一般的な教養の基になるものは全部高校で習ったように思いますね．

今の大学生を見てると，その辺が少しずつ抜けてきてるのかなと思いますね．今の高校教育はどうなのかなと思うのは，社会福祉の歴史の話をしていてもね，仏教の影響や少しキリスト教の影響を受けているとか，日本の社会福祉の特徴について話していても，学生が乗ってこないというか，それで「基礎的なことを習っていないのでは？」と思うことがありますね．戦後の話をしていても，マッカーサーも知らない．笑いをとろうと思って何か言っても，ポカーンとして何も知らないということなんですよね．戦後の混乱期というのは，私の時代ですと，当然高校で習っていたんですがね．戦災孤児がいて，戦争に負けて手や足をなくして外地から帰って来た傷痍軍人とかね，そういうのが頭に入ってるから，「福祉六法」を勉強した時に，「あ，だからこれがこういう制度につながって福祉六法になっていったんだ」と，私は頭の中でスーッと繋がったんですよ．今そういう話をしても，一向にピンと来ないのは，日本人が当然押さえておかなければならない戦前戦後の歴史を高校で教えていないんじゃないかなと思います．私はこの大学に赴任する前に，ある短大で「社会福祉概論」を教えながら，基礎的なことを教える所からしなくちゃいけないと思って，国語のテストや高校の時の歴史からやりましたね．それほど基礎的な教養が，高校までの学習力が弱くなっているんじゃないかと感じますね．それと文章力という読む力と書く力という最低のこと，これが余りできてないから，箇条書きで書く子が多いですよね．きちっと文章を繋げていける能力が育ってないですね，当時は作文や日記を書いていたから，ほとんどの子が高校の時にそれはマスターしていたのにね．今，日記や手紙を書くということがほとんど無くなってしまったから，こういう国語能力や文章力が弱っている，それは非常に感じますね．私は小学時代，毎日日記をつけていて，中学生になってからは茨城県に同い年のペン・フレンドができて，大学を出るまでまめに最低月１回は手紙のやり取りをしていましたの．読後感やその時々の心象風景や出来事などを，下宿していて時間だけはたっぷりあったので，楽しんで書いてましたね．当時ペンフレンドと往復書簡をするというのがブームだったかな．未だにその彼女とは就職のこと，結婚のこと，子育て，親の介護などと，回数はぐっと減りましたけど，手紙で近況報告を欠かさずに続けてますよ．

江坂：今は年賀状もラブレターも書かないし，ケータイとかメールで文字はできるだけ節約して，ハートのマークなどの絵文字ですね．これは大変な問題ですよ．牧さんの言われたこと，全く同感です．読解力も書いたり話す力も貧弱ですね．まず文章が短い，それから主語と動詞，目的語などの関係が良く分からない文が多い．それに１文と１文を繋ぐ接続詞があるはずなのに，これが上手に使いこなせない．だから書かれたものが広がりを持ち，さらに深みを持つ立体的なもの

になってこない．僕は「総合演習」などで，まずそういう読解力や言語能力を身につけることに重点を置いているのですが，

牧：そう，そう，その接続詞でね，もう言ったことですが，「なので」って続けるの，あれって私ものすごく引っかかるんだけど．

池谷：僕も同感，あの「なので」っていうのにはね．そう話し言葉みたいに書く，そういう本が今いっぱいあるんだよね．

牧：漫画とかの影響でしょうか？

池谷：いやあ，漫画かなあ，どうだろう．書店で普通に出ているような本なんかでも，「なので」っていうのは出てくるんですよ．だから推敲された文章になってないのを学生たちが読まされているという状況があると思うんだ．

江坂：それもそうだが，アルバイト先で叩き込まれたマニュアル言葉．客は僕一人だけなのは一目瞭然なのに，「お一人様でしょうか？」．僕がお金を出したのに，「千円からお預かりいたしますす」というの，ムッとするよね．「俺から預かったんだろうが！」，「千円から」なら，後でおつりを渡す時，「1 万円払った」と言われたら，どうするんだろうね．だって「～から」なら，上限がないからね．

牧：それから「よろしかったでしょうか？」ってのもあるでしょう．あれはマニュアル言葉そのものですね．

江坂：最近そういう言葉遣いが広がって，病院に行ってもそうですよ．人間らしい感情も何もこもっていない一本調子の言葉で，「注射うたせていただいてよろしいでしょうか？」なんて言われると，「嫌だよ」って応えたくなりますよね．

上司が部下に対して「お疲れ様でした」とか「ご苦労様」と言うのが，上下関係なく使われているらしく，これをアルバイト先で習得して来て，授業後「先生，どうもお疲れ様でした」って．これには「俺が疲れるのは，お前たちが勉強しないからなんだよ」って，言いたくなるが，グッと我慢する．「教養」の基礎である言語活動が崩れてる，それでは頭の中できちっとした思考ができないと言うことですよ．こんな日本に誰がしたかって考えると，僕たちもそこで生きてきたのだから，完全無罪とはならないでしょうが，高校教育を大きく変えた責任は文部省の，いわゆる「センター試験」の導入だと思うよ．何十万の受験生の能力を把握しようとするとコンピュータに頼らざるを得ない．そして，僕たちの時代はすべて記述式だったが，マーク・シート方式にならざるをえない．ところが実は書きながら考え，考えながら書いているものなんですよね，人間ってのは．

池谷：聞きながら書く，この能力も落ちていると思うよ．ノートを取りながら受講できる学生も少なくなっているし，ゼミで討論しているとき，メモを取っている学生もいない．人間の記憶力なんて大したことないんだから，書き留めておかないと総合的な議論に発展しないと思うんだけどね．

牧：それには講義形式が変わったせいもあるわよ．最初に資料を配るでしょう，すると学生はそ

こに必要なことが書いてあると安心して，ノートを取らない．でも，それは聴覚障害の学生のためにということで始まったことでしょう．その平等原則が，逆にマイナスの平等原則に取って変わられて，…….

江坂：そうだなあ，プラスがマイナスに転化した，コンピュータが採点するセンター試験と同じようにね．そもそも，そんな方式で果たして本当の能力が測られるのか，問題だよね．数学などの問題で，昔の記述式は与えられた大きな問題を順に解いて行って，最後に答えを出すというもので，だから途中で間違えれば「はい，それまでよ」だが，マーク・シートのではその段階ごとの設問があり，そういう意味では親切で易しくなっているようにも思えるが，例えば最初を間違えても，後の設問の箇所がちゃんと塗りつぶされていれば，得点になるのかな．鉛筆を転がしても，5 分の 1 とかの確率で合ってしまうのではないか．すると満点取るのは難しいが，同じように 0 点取るのも難しいことになるよね．とにかく高校や予備校側はそれに対応した授業をする，そこでテクニックも教える．確かにその方式で，それまで批判されてきた難問・奇問は排除され，基礎的な問題で数十万受験生の一定の能力は序列化できるが，それに何の意味があるのだろう，そう思うときがありますね，今の学生たちを見ていると，マイナスのほうが多いのではないかともね．

池谷：確かにね．そんなセンター試験の水準では意味がない，「うちの入学希望者はそれでは測れない」と言って，やめてしまった大学もあるよ，たしか慶応の医学部がそうしたという記事を読んだことがある．

江坂：そうなるよね．でもセンター試験を利用する大学も増えているんだからね，とにかくそれなりの水準と学生数を確保しようとね．国・公立は英数国と社会・理科が受験科目で，僕の受けた大学は前の 3 科目は 200 点満点で，後の社会では世界史と日本史とか，理科では物理・生物・化学などから 2 科目選択で，それぞれ 100 点満点で，合計 10 科目の 1000 点満点だったが，私立はほとんどが 3 科目だったと思う．牧さんが言われたように，あの頃は授業がきちんと行われ，理系か文系への分離は 2 学年が終わってから，そして国立か私大への進路決定は 3 年の前期か中間試験が終わってからだったと思う．だから僕が受験選択しなかった物理も数Ⅲも，そして倫理社会も授業ではそれなりにちゃんとやったよ．後期になると早稲田や同志社を受けるという生徒の中には受験科目ではない授業のとき，例えば数学のとき，日本史とかの参考書を机の上に載せていた者もいたようだった．ところが先生はそれを注意しなかったようだったが，それを見て奇異に感じたことが思い出されるぐらいで，とにかく授業はきちんとやっていたよ．

池谷：僕は 9 科目ぐらいだったかな．

江坂：まあ，国公立はそんなもんだったよね．ところが，私立は 3 科目．あれは今から考えると，ものすごい影響を高校教育に与えたんじゃないかなと思うんだ．ところが僕の時代は私学に行くというのは少なくて，みんな国立志望で，3 年の後半になって勉強の力点を私大用の 3 科目に置くという具合だったと思うよ．だから彼らも国公立も受けて，結果的に早稲田とか中央に入ったんじゃないかと思うよ．ところが，その進路決定が早められると，文科省がいくら「世界史，……」

は必修だといっても，一応やるのか，またはやったことにして，牧さんが言われたように「頭の中に残っていない」，そういう大きな問題が出てきている．

池谷：それはそうですよね．今は高校だと大体 1 年生が終わって，2 年生くらいから類型化されちゃうからね．

牧：文系とか理系とかに分かれてしまう？

池谷：そう．それから他にも類型化されていくから，そうすると次の 3 年生で文系から理系に変わりたいとか，理系から文系に変わりたいとか思っても，それができないという問題が起きてくる．それともう一つ，やっぱりその受験対策というのでね，まさに単なる受験対策やテクニックになって，非常に浅いものになっている．

僕の高校時代はちょうど転換期だったんだけど，高校 3 年生のとき初めて補習というものがあって，例えば国語の古文ではね，問題を解くんじゃなくて，『大鏡』を丁寧に読んでいくというもので，「これはなんて面白いんだろう」と思った．受験対策ではなく，学ぶ面白さを教わった．英語もそうだった．ジョージ・オーウェルやイーヴリン・ウォー作品を読んだり……

江坂：僕の高校では確か「ギリシャ神話」の英訳がテキストだった．

牧：高校で？

江坂：そう．早朝の 7 時ごろから．全 1 年生 360 名が対象だから大教室で，でも希望者だけにね．僕は寝坊だから，池谷さんのようにその面白さが分かってくる前に脱落してしまったけどね．牧先生の頃はどうだったんですか？

牧：今のように塾もなし，補習も全然なかった．私の高校は真ん中より下ぐらいの普通高校で，当時は高校入学 3 割の時代で，しかも田舎だから，私の中学から高校行ったのは 2 割ぐらいですよ．高校全入を目指していた時代とはほど遠かった．ところが私が大学生として京都に来た時は，「15 の春を泣かせない」というスローガンの知事がいましたから，「時はそんなに流れていないのに，何という変化！」と驚きましたわ．だから私の頃はね，中卒でほとんどの子が名古屋か大阪に就職するって時代で，高校に行くのはある程度勉強ができる子に限られ，それが 2 割か 3 割ぐらいだったわね．それで入った高校でも，まだそんなに「受験，受験」って言ってない昭和 36 年で，戦後の混乱と貧困しかないという昭和 20 年生まれだから，生徒数も少なかった．そんな時代に高校に私は入ってたもんだから，「このクラスから大学に行くなんて無理やろ」と言われるくらいの高校だったけど，とにかく頑張ったわね．後から考えたら，あの時が一番勉強したなと思いますわ．受験直前は朝から晩まで十何時間，とりあえず公立の女子大にも願書を出したんだけど，絶対こっちへ行くんだと思って，2 ヶ月から 3 ヶ月，3 科目を必死で勉強したんですよ．それから 4，5 年たって同じ高校に弟が入った時は，もう理系と何とか系とかにクラスが分かれていて，他の系に移りにくい状況になっていましたね．私は勉強が好きでしてたけど，どういう試験問題が出るとかっていうのはほとんど知らず，「蛍雪時代」という受験雑誌を「やっぱりこれぐらい読まなきゃいけない」と 3 年生の途中から読んだ程度で，やったのは高校 3 年間の教科書だけでね，それで 3 教科を全部マスターしたんですよ．それで，受かった．でも，それを 4，5

年ほどの後輩たちに言うと，「そういう時代では，もうなくなった」と言われましたわ．

私の 2 年後はベビー・ブームの団塊の世代で昭和 22 年，西暦 1947 年生まれ，私の頃の高校生は 2 割 3 割でしたが，それが 7，8 割になって，そして彼らが大学に行く頃はもっと厳しい受験競争になってしまったんですよ．だから私は競争を知らない最後の世代で，やっぱり時代の急激な流れを感じますね．2 年下の生徒たちは，見るからに賢そうな子が何人かいて，「すごい子達がいっぱいおるんや」と思うんだけど，だからといって彼，彼女たちが良い大学に入学したとか，後の人生が良かったという訳ではないですけどね．

江坂：ちょっと待ってくださいよ．僕はその団塊の世代で昭和 22 年，西暦 1947 年生まれ．

池谷：僕は 1948 年生まれ．

江坂：牧さんとはたったの 2，3 年しか違わないのに，何かものすごい違いがあるように言われますが…….

牧：すごく違いますよ．何百人しかいない，ほんとにド田舎だから，高校に行くのも難しくて，大学に進学するのはもっと難しかった．経済的にも，田舎からなので大変でした．

江坂：でも経済的にと言っても，あの当時はそれほど授業料は高くなかったでしょう．

牧：それでも大変でしたよ，物価は時代で違うんですよ．とにかく入学できるような大金なんか我が家にはなかったんですからね．でも父方の親戚にちょっとお金持ちの叔母さんがいてね，最後には助けてくれたんです．父親は以前から何度も借金して，それを返さないもんだから，「もうあんたに貸さん」って言われたらしいの．でも「勉強がようできる娘で，大学行かせたいから」って言ったら，「これが最後やで，姪にやると思ってこの金貸す」ってね，当時で 10 万円，今では 100 万くらいかな．だから入学金と前期の授業料を，それでやっと納めることができた，そういう時代だったですわ．

池谷：そういう時代かあ．

牧：そう，そういう時代で，それで入れたの．今だって先々の計算しなあかんけど，私は後期の授業料が少し安いから，自分で夏休みにまとめてアルバイトをしただけで済みましたけど，周囲の男子学生たちはズーッと肉体労働をしてたわ．私は寮に入ってたから，それほど休まずに大学に行けたけどね，地方から来た男の子なんかは「本当に金が無いため，2 週間ずっと突貫工事のバイトに行ってて，単位が取れるか危ないから，必死になって久しぶりに大学に出てきた」とか言ってました．そういう子達には，昼間とにかく授業に出られる私が「お嬢様」に見えたらしく，「あんたらええなあ，親の金で授業に出れて」って言われました．でもね，寮に入れたので助かったけど，それでもアルバイトで家庭教師は 2 年から 4 年まで定期的にね，それと特別奨学金で何とかの状態でしたわ．だから私，生活力はすごく身についた，…….

江坂：私学は大変だったんだ．でも，当時の物価と比べなければいけないが，ずっと安かったんでしょう．ところが今は，

牧：授業料と入学金で 120 万円くらいですからね．

江坂：あの当時は国立大学の授業料は半期で 4500 円か，6000 円？

池谷：公立は年 12000 円から 15000 円くらい．僕の頃は年間 15000 円くらいでした．

江坂：あ，そう．じゃあ公立と国立と違ってたの？

池谷：違う，違う．公立は国立よりちょっとくらい高いだけで，それでも安かったからなんとかね．授業料だけは親に出してもらって，あとは自分でバイトして，生活をしてたりしていた．

江坂：10 万円が大金だということは分かったが，寮費が 2400 円で，特別奨学金が 8000 円，……でも，その当時の 8000 円って言うのはすごいじゃない？

牧：今の 8 万から 10 万近くになるかな．寮に入っていたから，2400 円の寮費を払えば，朝と晩の食事は出てくるから，それで最低の生活はできるし，あとは交通費とちょっとした参考書とか自分で買って．

江坂：二人の話を聞いていて面白いと思ったのは，高校までの教育というのは案外きちんと行われていた，そして大学の教養課程の方は 3 人ともあまり面白いとは思わなかったが，ただ友達だとか先輩だとかとの影響が大きかった，そして自分たちで本を読んだり，議論したりと，そういうことですね．

それから池谷さんの言われた，あの当時の「デモ」とか，それから「大学紛争」と言われた状況，これは外から見るとセクト間の「紛争」としか見えなかった，またはマスコミが「中立」を守っているようなポーズをとるため，そう呼んだのかも知れないが，原子力空母エンタープライズの佐世保寄航とか，アメリカのベトナム侵略戦争，沖縄返還問題とか，そういう問題に学生は敏感でしたね．

牧，池谷：そう，そう．

江坂：愛知県は保守的な所で，そこにある名古屋大学はもちろんその影響を受けていたと思うんですがね，ところがあの頃の学生はずいぶん違っていた．自民党などの偉い政治家とか，大企業の社長の令嬢とか子弟などもいたんですが，皆そろってそういう問題には革新的だったですね．いま振り返って見ると，あの頃そこで生きていた時は気づかなかったが，「同時代人として〈共に生きる人間〉(Mitmensch) だったんだな」と不思議に思うと同時にね，イラク戦争とかサブ・プライム問題などが起こっている現在の問題に，学生は余りにも鈍感というか，自分たちの問題として考えていないのではないかと思いますね．「果たして彼らは自己成長しているだろうか」，「その〈教養〉はどうなっているんだろうか」とね．「共に生きる人間」として共有していなければならないことさえ「他人事」としてしか感じられないほど，個々人がバラバラになってしまっている，そういう時代なのかなと，

牧：そう，そう，白昼とつぜん何人も殺してしまった「秋葉原，通り魔事件」，あんなにマスコミで騒いでいたのに，全然知らなかった学生がいたのには驚いたわ．

池谷：新聞は読んでいない，テレビでニュースも見ていないんだよ．僕たちの頃は新聞を読むのは当たり前だったが，それが彼らには高いからということもあって，取っていないんだよ．アルバイトが主で，ついでに授業に出る．夕方などのニュースの時間はアルバイト中なんて言う学生は結構いるよ．

江坂：時代の違いかなあ．とにかくね，あの「大学紛争」で僕が学んだことの一つが，「先生たちは駄目だな」って言うことなんだ．名大でも教養部が「暴力学生」とか「反代々木系」とか呼ばれていた者たちに数ヶ月封鎖され，文学部も１週間ほどそうなったんだが，大学当局も教授会もオタオタするばかりで何もできず，結局機動隊の導入で終わってしまった．入学した頃は「高校の恩師より偉い大学の先生」と言う畏敬の念があったけど，そのオタオタした醜態ぶりを見て，僕の素朴な「権威主義」は消えましたね．

牧：確かに頼りない感じでしたね．

江坂：そう，「偉い人」はすべて偉いという「権威主義」から僕は解放され，色々な面を持った個人として見ることができるようになりましたね．だから当時はやった「全面否定」とも無縁で，例えばドイツ語なので僕よりはるかに上の先生たちを，その点では尊敬しながら学び，いつか追いつきたいものだと思っていましたね．あの時代は，大学内に限られていた雰囲気だけだったかも知れないが，とにかく社会とか世界にも目を開いていましたよ．

池谷：やっぱり，その当時の大学生はエリートだったわけですよ．

江坂：その頃は全然そんなことは思っていなかったけどね．今か考えてみると，確かにそうだったのかなあ．

池谷：僕はその当時横浜に住んでいたけど，中学校のたったの 50 人クラスで大学に行ったのは 5 人だった．仲の良かった友人なんかも，お金がなくて企業に入って，そこの養成校の企業内学校に行ったり，農業を継いだりしたのもいた．

江坂：僕は，池谷さんの横浜とは違って，随分田舎の刈谷だったけど，高校から企業に入って行ったのは 1，2 割で，大学進学のほうが圧倒的に多かった．

牧：高校の違いじゃないんですか？

池谷：そうだろうね．学生時代にね，多分デパートの警備の仕事だったと思うけど，警備のおじさんから「お前ら学生さんだから，ちゃんと勉強してくれよ」って言われた覚えがありますよ．そういう期待感が社会的にあったんだね．「ああ，そうか，ちゃんと勉強しなくちゃ」と思っていましたし，「自分は大学に受かって学問を学んでいる，では何のに学ぶのか」って，随分それで考えさせられましたね．それから他の学部の学生で，よく勉強している友人がいて，「すごいなあ」って思って，見習おうと思っていた．その彼からは「何のために，誰のために学問するのか」って，そういう鋭い問いを突きつけられていましたね．そういう風潮の中で「学問とは何か」などと，常に考えざるをえなかった．

江坂：それと同名のタイトルの小冊子を僕は学生か，院生時代に読みましたよ．それから少しして，この大学に赴任して，「現代と学問」という教養演習を担当することになり，そんな大それた科目など習ったことなど無いし，テキストの選定に困って色々な先生に相談したら，ここの先生が書いた「島田パンフ」というものを紹介され，生協で「島田パンフ下さい」と言って，手にとって見たら，それでした．

池谷：そうなんだ．今回の本題でいくと，今は「みんなが大学に行くから行く」っていう状況に

なってるわけでしょ？ほとんど何も考えなくても大学に行ってしまう状況が作られているわけだから，これを受けて大学では，学生に向き合って，「お仕着せの勉強」ではなくて，「学ぶとは何か」「何のために学ぶのか」ということをきちんと学生たちに伝える必要があると思うね．

江坂：それはそうだ．ところで当時の大学は国公立とか私学に関係なく，教養時代は専門に関係する科目は 2，3 だったとしても，文部省の指定する自然，社会，人文科目，そして第一外国語……が必修で，同じでしたよね．ところがその後そういう枠がはずされ，自由になったのは良いけれど，大学が多様化して，一方はエリート教育の大学に，片方は職業大というように二分化されている，そんな感じがするんですがね，

池谷：日本の今の大学のどこでいったいエリート教育をしているのかな？例えば僕の専門は哲学だけど，東京の有名大学の大学院の授業でも，カントとかヘーゲルを読むのにドイツ語の原書ではなく，今では英語の訳本を使っているとか，そういう状況だよ．院生の定員が上から増やされて，その定員を確保するために社会人とか他の大学卒のも入れるから，ドイツ語を学んで来ないのも同じ教室にいる，そういう状況になっている．それで仕方なく英語で誤魔化す，そんなことを聞いたよ．

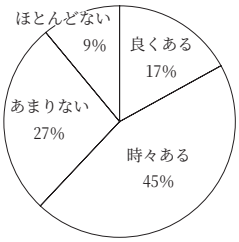
江坂：東京でもそうなのか．僕が聞いたのには，国文の学生が『源氏物語』について卒論を，漫画で読んで書いた女の子がいたというのが．

牧：漫画で，卒論を？

江坂：そうなんです．ところで池谷さんの話で，日本はとんでもないことになっている，そういうことが分かりましたよ．その話と最近のテレビ・ニュースで驚いたことがね，ようやく結びつきましたよ．それはね，東京大学教育学部の金子元久教授の研究グループが全国 127 大学の学生 5 万人を対象にした調査結果なんです．「講義について面白いと思いますか，興味を持ちましたか」というアンケートに答えた割合が，図の 1 の円グラフです．これは僕の頃とそれほど違っていないと思うが，インタビューに「ほとんどは単位を取るために授業に出ているのでは」と学生が答えていましたのには，不思議に思いましたね．少なくとも僕はそれなりに教養課程では授業に出ていたが，単位には全く興味がなく，それより内容が問題で，結果としてそれを取ったというだけでしたからね．ところが予習・復習に費やす時間が「1 時間以内というのが 64%で，全くないが 13%というのには驚きましたね．僕は文学部だったからかも知れないが，いつも辞書を片手に持って引いていましたからね．もっと驚いたのは「漫画をの

東京大学教育学部金子元久教授が全国 127 大学 5 万人の学生を対象に 06 年から 1 年間かけての調査結果。

授業に関心がわかないか？



1 日の勉強量は？
予習・復習に「1 時間以下」── 60%
「全くない」── 13%

漫画以外の本を 1 ヶ月に何冊読むか？

全く読まない	1 冊	2 冊	3 冊	4 冊以上
29%	28%	17%	8%	16%

ぞいて，ひと月に何冊の本を読むか」という質問へのパーセントで，それを示したのが図1のグラフで，一ヶ月に0冊が30%，1冊も同じほどで，2冊が20%弱で，合計が75%なんですよ．あの頃は，前に話したように僕はアリストーテレスの『形而上学』にまいってしまったこともありますが，「とにかく本を読まなければ」と思い，僕の友人は皆1ヶ月に4冊どころか毎週数冊ぐらいは読んでいたと思いますよ．僕の先輩なんか，歩く間も惜しんで，歩きながら読んでいて，電柱にぶつかってメガネを壊してしまった，そんな院生の「つわもの」もいたほどですよ．ところで話を元に戻すとして，その調査を主導したあの教授は「1日1時間も勉強していない学生が半分以上で，これは国際的に見ても非常に少ない水準で，日本の教育全体から見て非常に大きな問題で，勉強する癖をつけて行くとか，興味あることを読み書きするとか，そう仕向けて行くように大学教育は積極的にしなければ」と言っていましたよ．「東大でもそうか，または全国平均でそうなのか」，これは分からないが，とにかく「日本沈没」ですよね，これでは．

そうすると文部省も，その後科学技術庁と合併してできた文科省も色々改革をして来たはずなのに，それほど役立っていない．それどころかマイナスの結果しか生んでいないのではないか，そんな気がしますね．色々あの大学には不満もあったが，「とにかく語学と本を読む力は養ってくれた」，それには感謝していますよ．

牧：そうですね，あの昭和の30，40年代，もうちょっと前の「大学を出たけれど」就職先はない，そういう過去の時代ですけど，社会的に高校とか大学とかの高等教育を受けることができた者に対する畏れとか，池谷さんが言われたように，期待というものがありましたし，その教育を受ける本人にもその責任感がありましたよね．世間も，私の頃は〈エリート〉という言葉はなかったけど，〈選ばれし者〉という眼で見ていましたね．だから社会的に「すごく勉強する子」だと認められていないと，「大学に行きたい」って言えない雰囲気がありましたよ．社会に出て一生懸命働いてる同級生がいるのに，彼らだってもっと勉強したかっただろうに，ところが私は大学で勉強できるのだから，「人生，真面目に生きなければ」と，ずっと思っていましたね．「大学行って，アルバイトいっぱいして苦労したでしょう」って言われたことがありましたけど，そんなのは苦労じゃないですよね．田舎に帰ったら，朝から晩まで働いている同級生に「あんたは良いわ，大学に行けて，好きなことができるから」って言われるとね，それがプレッシャーとなって，「頑張らねば……」って思いましたわ．4年間も国から奨学金をもらって，彼らの代わりに大学に行かせてもらっているんだから，卒業して社会に出たら，それを還元することが自分の使命みたいに，すごく感じてましたね．

ところが社会人となってからね，故郷の田舎に帰って見聞きしたことなんですけど，勉強も働くこともせず，気楽に親元でノホホンと生活している人も結構あって，家柄とか，街か田舎のどちらに住んでいるかという違いでね，つまり社会的な環境で価値観も大きく違うのだなって思い知らされましたね．そういう人たちはね，自分が恵まれているのは自然なことで，自分は頭が良いから大学にも行けて，働く働かないのは個人の自由と思ってるみたいで，つまり自分のことしか考えていない，そういう感じでしたね．私の時代の女性はほとんど皆お嫁に行って，社会に出

て働かなかったけど，私は社会で働くのは自分の使命だとか，その使命を確認しながら生きて行くということは大切なことだと思ってましたから，「高校・大学で学んだことを，働いて世の中に還元するのは当然だ」と，かなり真面目にそう思ってましたね．

江坂：牧さんのそういう信念は当時としては先進的だったと思いますよ．と言うのはね，牧さんより 2 年後輩の僕が大学 1 年生の頃，講義で「女子大生亡国論」というものを耳にしたからなんですよ．多分マスコミでもそれが喧伝されていたと思いますが，当時はそういう認識だったのでしょうね．つまり，男子を押しのけて，女子が大学に進出すると，国費などを使って大学で教育しても卒業後は結婚して家庭に引きこもり，それが社会に還元されない，だから国を滅ぼすことになる，確かそういう論調でした．その論に反対して，女子学生を擁護する先生の意見も講義で聴かされましたが，「家庭で母となった女子大生が子どもの教育をする．それが後に回りまわって社会に還元されるから良い」というものでした．その賛否のどちらもね，「女性は結婚して，家庭にこもる」という前提に立っていた，そういう時代だったんですね．だから大学のサークルなどで医学部などの先輩を射止め，家庭に入った女子学生も確かにいたのですが，勉強や学生運動の中で目覚め，当時の社会の「女は家に」という風潮に抵抗して，牧さんのように就職して行った女子学生もかなりいましたよ．そして今ではね，女子学生も就職するのが当たり前になっている時代ですよ．だからね，女性を自己に目覚めさせ，新しい自己へと実現するように促した役割を当時の大学教育も担っていた，そう思いますね．こうして見ると，かつての「教養」過程にプラスもあったが，

牧：問題もありましたね．それに，今では高校教育がセンター試験のマイナス面と大学入試の科目数減によって弱体化し…….

池谷：PISA の国際的調査の結果として出ている．それを現実として受けとめ，僕たちは大学教育で「教養」を身につけさせ，そしてそれを「専門」へと繋げなければならないのだが，その「連携」とか「統一」がうまく行っているかどうか，これは問題だよね．高校の補習をせざるをえない大学も出てきているし，高校退職教員とか予備校の名物教師を招く大学もある．文科省は PISA の大学版に備え，「学士卒」の質を維持しようと次の手を考えている．だけどその高校教育を担っている先生たちがね，そういう試験とか入試結果に，そして子どものテスト結果に一喜一憂して「我が子大事」と無理難題を持ちかけるモンスター・ペアレンツにまで振り回されて，広く深く勉強できる自己成長の自由な時間がない．

大学も大学で，マークシート方式の入学試験で高校教育をダメにしている．しかも，ずいぶん忙しくなって，研究どころじゃあない．

江坂：そう，その研究と教育の統一が脅かされている現状は確かにあるね．ところで本題の「一般と専門の統一」に戻すとして，英語のジョーク，ドイツではそれをヴィッツと言いますが，こういうのがあります．

一般と専門家の違いは何か？

一般家はすべてのことを知ろうと扱う範囲をどんどん広げて行き，専門家は特定のものを深く知ろうと，その範囲をどんどん狭めて行く．そして最後に，一般家はすべてについて何も知ら無いことに気づき，専門家は無についてすべて知っていることに気づく．

結局どちらも無になってしまうわけですよね．だって，一般家のすべては表面的であるから，深さは無いわけですし，専門家は一点についてだけ深く知っていても，広がりは無いのですからね．そういう数学の面とか点の定義はともかくとして，実際には社会で皆それぞれ専門家なんですよ．それを深めようとすると，広げないと深まらない．だから黒澤映画の「赤ひげ」の専門は医学ですが，彼は視野を広げ，病の原因が社会的貧困にあることを見抜いていた，それで彼は歴史的な名医になることができたんですよね．彼は松平の武家屋敷に往診に行って，今日ではメタボリック・シンドローム，いわゆる肥満なんですが，その原因である献立表を墨で塗りつぶし，ダイエット用の処方箋を書き，治療代として家老から 50 両もふんだくる．でも，これは最良の医療処置ですよね．だって 50 両という大枚をふんだくられたら，その松平家は当主の食費までも切り詰めなければならなくなり，彼のメタボという肥満病は回復の道を辿ることになるわけですからね．松平さんの病を生んでいた富をワーキング・プアの治療代に回す，そのプラスとマイナスで答えはゼロ．それで皆ハッピィ（happy）で，始めは御殿医を志願していた長崎帰りの若い医者の安本も，そのぼったくり「赤ひげ」のもとに残り，貧しい患者から学びながら社会的な視野を広げ，自らの専門を究めようと決心し，「ジ・エンド」(The End)．

牧：その映画は見ましたわ．医師と看護士の患者を治したいという一心での協働，これも感動的でしたわ．食事係や掃除をする人たちも含めて，皆がみな地域の状況を良く知っていて，患者と人間的な繋がりがあったわよね．それが現代では分業化され，医師は医術の，看護師は看護へと特化され，さらに社会的な視野が欠落するから，これを補い社会と病院を繋ぐ MSW とか社会福祉士が登場し，退院後の方策を患者と共に探る仕事をする．

池谷：そういう専門に特化するというのは仕方のない面もあるけれど，どの分野も今は忙しくなり過ぎて，余暇が無くなり，自分で勉強するとか，境界の分野にまで目を広げようとか，そういうことができなくなっているという事情がある．

江坂：そう言えば，入院した時にね，入ってきた看護婦さんに色々尋ねたり訴えたりしたいことがあるのに，「診察のとき先生に」と言いながら，点滴の針をブシュッと刺して，走るように出て行ってしまった．診察時に何か言うと，「では，血液の検査もしてみましょう」とかで，色々なことをされる．「物言えば，唇寒し」どころか，「また針で痛い，僕の腕」でしたよ．そしてその検査料がプラスされてね，僕の財布に，冷たく吹く「秋の風」でしたよ．

池谷：はっはっは．それは小・中・高の教育現場でも同じだよ．教育予算カットで専任を増やさず，しのぐ春で，専任教員の仕事がどうしても増えてしまうんだ．授業の準備，色々な業者テストの結果の記入，クラス指導と保護者への対応，そしてクラブの顧問とか，色々な仕事も重なっているところにね，「生徒の成績など，個人情報の入ったパソコンを紛失した」とかいう事件の

あおりを食らって，「校外持ち出し禁止」で，仕事を家に持ち帰られなくなり，夜遅くまで職員室に残ってやらなければならない．夜 9，10 時の帰宅は普通で，企業と同じ午前様まであるよ．

江坂：親は夜遅くまで職場に，子どもは塾にで，家庭破壊が進んでいる．それはともかくとして済ませられない恐ろしい状況だけど，ここで「一般と教養の統一」ということに話を絞りましょう．社会では皆どんな職業でも専門家として働いているのだから，そこで成長するためには，その分野を自ら広げることのできる基礎教養が必要で，それでこそ両者の統一が実現できる，そう思いますね．そうでないと，あのヴィッツにあったような「点」という「無」になってしまう．

牧：専門を深めるためにも「一般教養」は必要ですよ．例えば日本のとか，地域の社会福祉だけやっていれば良いかというとね，グローバル化の波がヒタヒタと迫っている時代でしょう．外国人労働者が増えたりとか，逆に働くために日本人の方も外国にどんどん出て行き，その地域で生活しなければという状況でしょう．外国語をマスターしなければというのは研究者や教育者に限らない．

江坂：そう言えば，ドイツにデュセルドルフという都市があるのだけど，そこに日本人が 8 千人ほど住んでいて，日本語の新聞や本を売る店，幼稚園も学校もあり，お寺まで建ったという記事をドイツの新聞で読みましたね．帰国子女が困らないように日本語教育の学校は当然あるだろうと思っていましたが，「お寺まで」とは驚きましたね．その寺のお坊さんは自分の専門分野の使命を果たそうとすれば，ドイツ語がそれなりにでき，その地で幅を利かせているキリスト教会とか，そこの信徒との付き合いもあるだろうから，相手の教義も教養・文化も理解できなければ，そういうことになるよね．

と言うわけで，それぞれの自分の「専門」分野で真面目にやろうとすれば，言語とか文化の境界を越えなければならない．その他分野へと越境し，自己を成長させようとするとき，どうしても必要となるものが他分野を統べている基礎を理解できる能力だと思う．それが教養の力となるのではないかな．そんな定義では余りにも抽象的すぎると思うが，かつての「自由な 7 科目」であり，その 2 系の中心となる言語と数学ということになるのだろうが，それを創造的に操れ，自分の専門分野を発展させながら自己成長できる能力となるのかな．各々の専門を繋ぐ能力が教養力となる．その異分野との関係を「統一」できるものが「一般」(allgemein) で，どの専門分野も必要ということになるけれど，それを究極的に「統一」するのは自ら成長しようという個々人だと思うよ．もちろん大学ではね，それをどうカリキュラムで実現するかということになるが，それは学生と教員の質によって決まるんじゃないかな．

社会という場での教養

江坂：と言うことで，今からは「社会という場での教養」について話し合って行きたいと思います．これまでの中で「忘れた」と思われることを，お話し下さって結構ですが，このタイトルにふさわしい形でお願いします．

さて，牧さんと池谷さんのこれまでの話を聞きながら感じたことなのですが，生まれたのはほんの1，2年しか違わないのに，牧さんとは随分違う時代を僕は生きてきたんだなと思いましたし，池谷さんは横浜という都会で僕は刈谷という田舎，そういう環境によっても随分違うと思わされました．そういう時代とか環境も含めて「社会」と考えて下さい．そういう「社会という場」での「教養」(Bildung) という自己成長をね，生きようとする限り続けるわけですから，そういう「教養」について話し合いたいと思います．

そこで先ず，世界史などの基礎的な知識が不足しているとか，入学前の段階で一般的知識が不足していることを嘆く話がありましたけれど，学生と私たちが共有しているはずの現在に起こっている事件，例えばあの「秋葉原の事件」を知らないという学生がいるということ，これには驚くだけでなく困りますよね．新聞も読んでいない．

牧：テレビでニュースも見ていない．学生たちのアルバイトは夕方から始まることが多いから，仕方がないという面もあるのよね．その時間帯で飲み屋やサービス業でほとんどバイトしてる．パチンコ屋とかでもね．だからテレビなんて見てられないじゃないですか．

池谷：学生の状況で言うとね，そういうのは多いかもしれないが，かっての牧さんのようにね，寮に入ってる学生で実際に色々なバイトをやりながら，学校の図書館で夜遅くまで勉強してる学生もいる．

江坂：僕はマンガ読んでるか，就職とか国家資格試験とかの過去問の本とにらめっこしているのはよく見かけるけど．

池谷：図書館の1階よりは2階でね，夜遅くまで本当に勉強しているよ．そういう学生が一方ではいるが，他方ではバイト中心という，貧しくって生きてゆくのが精一杯という学生もいる．親元から離れて自由になり，遊ぶお金欲しさでバイトにはまっているのもいる．そうなるとね，バイトの中で人間関係を作り，そこで彼らなりの「消費文化的教養」を積んでいるという生活になってしまう．そうなると学生としての生活ではなくて，バイトのついでに大学に来ているという生活感覚だね．以前では高校でそれが問題になっていた，工業高校だとかでね．

江坂：高校の方が先だったのか？

池谷：そうそう．

江坂：そうだったのか．僕の行きつけの喫茶店でね，ずいぶん若い子がいるんだなと思って，「どこの大学生」と訊ねたら，「高校生」と答えられて驚いたが，高校が先端を切っていたのか．

池谷：学びの成長過程にある彼女らが，それで本当の教養を身につけられるか，これが大問題だよ．店の方では安く使えるから良いかもしれないが，江坂さんが言っていた「〈差異〉という漢字が読めず，会社に大損害を与える」ということにもなるからね．とにかくバイトから帰ってちょっと寝て，学校に来て，講義が終わったら，またちょっと寝てバイト行くか，友達の下宿で夜遅くまでしゃべって，そういうのが学生生活になってしまう．牧さんの時代と違って，誰でも高校に行き，大学にも行きたい，または行かなければと言う，同世代の半分が来るという時代の風潮の中で，大学で勉強するという自らの動機づけがほとんどなくやって来る．大学受験の勉強が穴埋

め式のマークシートでだから，自分で文章を書いたり，レポートを書くなんてこともして来ないわけですよ．

ところがその逆を行く高校があってね，そこでは大学に進学する生徒なんてほとんどいないんだけど，就職先はものすごく良いんだって．そこでやってる授業を聞いて驚いた．試験はほとんど書く問題で，とにかく読解力も書く文章力も，どちらも身につけられているし，身につけているんだ．それで考えてみるとね，僕たちは中・高でそれが当たり前と思っていたけれど，今日では「読み・書き・算盤」という基礎が奪われてしまっている，そういう状況がある．もう一つの困る状況は，自分たちで何か実際にしたことがない．例えばクラスで何か企画を立てたり，友達と何かを計画してやってみるとか，そういうのがない．もちろん僕らの時代でも十分あった訳じゃないけれど，そういう経験が全くないものだから，大学に入っても仲間をまとめてゼミで発表をするとか，とにかく意見を述べ合ったり調整したりということが，高校までの中で培われていない．

牧：ひと頃，高校生でアルバイトは良くないって言ってたのに，……

池谷：今は当たり前になっていますね．

江坂：僕がこの大学に赴任した頃は「現代と学問」，その後は「教養演習」そして今は「総合演習Ⅰ」と名前は変わっているが，最初のそれを略した「現学」で学んだ一年生は野外で，テントの中で寒さをしのごうとお互いの体温で寒さをしのごうと暖め合って，翌日は車椅子の仲間を皆で担いで登山していた．今年の新入生はホテルの暖かいベットで別々に寝て，「春セミ」というものをやっている．その「現代と学問」の頃は「キャン・セミ」(camp seminar の略）と言ってね，クラス全員でキャンプ生活をして，体育の授業の単位になる必修科目も兼ねていたから登山をしていたけれど，その後「春セミ」となり，「ようこそ先輩」いう時間が設けられ，卒業した先輩たちが自分たちの学生時代を語ってくれる．そこで新入学生としては学ぶとことはそれなりに多いだろうけどね，その先輩は「アルバイトで社会性とか人間関係とかを学び，サークルで先輩と仲間との協調性を身につけた」というのが多かったですよね．

池谷：僕の学生時代もアルバイトをしたが，必ずしもアルバイト中心ではなかった．

牧：私の頃はね，もう話したことだけど，田舎から出てきた男の苦学生は建設現場の力仕事でね，ようやく生きてられるという「アルバイト」の子たちもいたけれど，決して今のようにアルバイト中心ではなく，学びたいという一心だったわよ．でも今の学生はアルバイトのせいと思うんだけど，あまり本を読んでいないわよね．「アルバイトで多忙のため授業は出なかったけど，国家資格はとっておいた方がいい」という学生もいるわね．それじゃあ，「ちょっと」と思うんだけど，それに教員として何も言えないという状況があるわね．

でもね，そういう学生をアルバイト先が必要としてるのよ．学生同士が話してるのを聞いていると，結構真面目に勉強しているなと思う子でも，アルバイトのシフトに組まれているとか，逆にシフトを組む側になってね，…….

池谷：もう管理職みたいにね．

牧：いま問題になっている，権限のない管理職っていうか，それに近いようことに現実はなっている．例えば，こんな事があったの．私はゼミでフィールド・ワークや学外見学などを計画するんだけど，授業時間だけでは無理なので，半日か１日を使おうと思うと，学生のバイトに振り回され，日程調整が非常に難しくなる．Ｘ月Ｘ日にしようと提案すると，ある女子学生が「その日は無理だけど，この日は空いています」と言うのよ．私が不思議に思って，「同じ曜日なのにどうして空かないの」と聞くと，「もう先に私がシフトを組んで，その日は私が入ってる」って．「バイトより授業の方が大事だから，その日は代わってもらったら」と言うとね，「でも店長に頼りにされてるし，私が抜けたら店が回らないから，しなきゃ」という具合で，もうそこまで責任感を彼女は持たされてしまっている．

池谷：本当は，誰とでも取り替えられるんだけどね．本当に学生はお人好しで，労働権だとか，残業すれば残業手当がきちんともらえるとか，ほとんど知らないから，そこを付け込まれる．企業側も労働基準法を知らないなんてことが多いからね．まして学生は知らないから，酷使され搾取されているのが全くわからないっていう状況であることはありますね．

牧：ところで，今ものすごく色々なサークルができてまいすよね．それをきちっとやってる子もいる．

池谷：サークルはね，今の調査では，ちょっと減ってる．

牧：減ってる？

池谷：やっと５割の学生が，なんらかのサークルに入っている状況ですよ．いわゆる文系や芸術系よりも，研究系っていうのが減ってるし，スポーツ系も少しずつ減っているかな．サッカー・ブームとか，イチロー・松井でマス・コミは煽っていますがね．

牧：学生に「何が面白いの」とか，「誰に影響受けているの」って聞くと，アルバイト先の先輩とか上司がすごくいい人で，憧れるとか，そして自分の将来のイメージもね，そこで人生観を学ぶとかって，

池谷：それはもう高校生のバイトなんかでもそうだよ．

牧：結構ショックやわ，先生から影響あまり受けないって言うからね．大学の先輩だとか，もちろん先生なんかでは見あたらないとね．中にはいるんでしょうけどね．

池谷：だって大学で何か学ぼうだとか，教養を得ようというような者は，ほんのわずかな部分になってしまった．多分サークルでも，そういうのは少なくなっている．バイトから帰って，大学の授業に出て，そして帰ってバイトして一日が終わる．そういうバイト中心の生活サイクルになっている，そういうことになっている可能性は多分にあるよ．

江坂：牧さんの話の中に出ていたけど，先生よりも先輩たちから影響を受ける方が多かったというのは，時代は違うけれども変わらないのでは？授業や講義などを通して，例えば「太った豚になるより，痩せたソクラテスになれ」などと言う，強烈なメッセージを送る，かつての東大総長のような先生もいなければ，受け取る側もそれが理解できないのではないかな．

戦時中にね，卒業する時に先生からソッと「死ぬなよ」と言われたことを今でも覚えていると

いう当時の生徒がね，その彼は今では老人になっているけど，その恩師のことは未だに忘れられない．そういう話を朝日新聞の「声」の欄かで読んだことがあるがね，当時の校長はきっとその先生を背後に従えて，その生徒たちを前に見下ろして，卒業式で「天皇陛下のため，国のために」という勇ましい犠牲的精神を鼓舞したと思うよ．家の内はともかく，表の社会は「鬼畜米英」，「贅沢は敵だ」などという戦時色一色，そういう状況の中で危険を冒してまで，そう言ってくれた先生だったから，その生徒は覚えていたんだよね．

レマルクの『西部戦線異状なし』という第一次世界大戦を小説にしたもの，これは映画化されているんだが，その主人公はギムナジウムの先生に鼓舞され，若者らしい正義感と冒険心で戦地に行き，教師たちに教えられた状況とは全く違うのに驚き，帰ってきた故郷で，その現実を後輩たちに語っても信じてもらえず，逆に「臆病者」と罵られ，虚偽に満ちた故郷の現実に幻滅し，再び戦地に戻って戦死する，そういうストーリなんだが，これと第二次大戦中の日本も同じ状況だったと思うよ．非常勤でお手伝い願っていたドイツ語の長谷部先生がね，彼の小学生の頃を振り返って，「とにかく驚きましたよ，子どもながらもね．戦後の授業は墨で教科書を塗りつぶすことから始まり，先生は皆この前とは全く逆のことを言うんだからね」と聞かされましたよ．

1970 年頃大河内東大総長が「太った豚になるよりも，痩せたソクラテスとなれ」と卒業生に餞として贈った言葉は，名式辞として新聞にも載ったが，今そんなことを言ったら，「ソクラテスなんて動物は知らないわ，でもダイエットには良いかもね」ですよ．もちろん，これは冗談だけどね．僕たちにできることは授業で学問を通してね，学生たちが自己成長できる基礎的力，そういう教養を身に付けさせることですよね．

池谷：もちろん，それは江坂さんので留まってくれないと困るけど，その哲学者の名を知らない学生がいるかもね．ところで先生とだけでなく，先輩との関係もだんだん薄くなって来ているよ．しかも大学 4 年生なんかは就職とか，国家試験に追われてだかということで，サークルでも 2 年生が主体になってるでしょ．だから大学の上級生から下級生への影響も少なくなり，学生文化を継承するっていうのがだんだん弱くなってきてる．それが教養教育の中でも課題になってるんですよ．どういうふうにして，かつてあったような学生間での教育力を回復するかという問題です．教室だけが教育の場だけではなく，かつてのサークルだとか自治会などで，学生間の縦と横の関係で「ああ先輩はすごいな」とか，「同じ教室で学んでいるのに，あいつはすごいなあ」，「ああいうふうになりたいな」と先輩からも同級生からも学べた．そしてそれが自己成長を助ける大きな力を持っていた．

バイト先でも人間関係の機微は学べるだろうが，そこで満足していたら，卒業して社会に入っても，大学卒らしい仕事を任せてくれるかどうか，それは疑問だね．職場で起きた問題の解決策を提案し，従業員の皆の文句と考えをまとめながら統率できる力，これはサークルとかバイト先からだけでは養えないと思うよ．グローバル化しているのに，上の者が，理系卒の現場だけに海外での仕事を任せ，それで良しとする，そういう不満を飛行機の中で僕は聞かされましたよ．外国語に弱い理系の彼らが，文系で語学に強いはずの奴らに「海外での問題を解決して来い」と命

令され，コミュニケーションに不安を感じながらも，現地の従業員に「これはこう，それはそう」と実地指導し，冷や汗を垂らしながら，それなりに問題を解決し疲れ切って，ようやく帰国の途に就いたのだから，怒りがまだ納まっていなかったらしい．理系は語学に弱い，文系は数・理に弱いが，法・経が支配系統を独占していて，彼ら理系にだけ難題を押し付ける，そういう不満を僕に語ってくれましたよ．

僕は彼にね，「あんたがたが工場で作った製品を使わされていますが，その使用説明書を読んでも，よく分からない．だからそんなものは読まずに，納品してくれた人から『これはこう，それはこう』と教えられ，使っていますよ．どうも理系の現場と文系の関係がうまく行っていないのではありませんか」．そう言ったらね，彼は「分からないが，そうかも知れない」と言っていましたよ．文系と理系，上と下，または前後左右がお互いに意見を戦わせ，協同しなければならないのに，かつての「自由７科目」を現代的にマッチさせるような教養がなくなっている，その時もそう思いましたね．大学の研究・教育でもそれが貧弱になっているのではないかな？

牧：そうね，幅広い読書がね．サークルとかで先輩や同期生同士で話し合う時も，かつては本が媒介になっていたと思うの．いろんな本，大学生としての教養に必要な文学書とか哲学書とか，そういうものを文献にして集団で学んでましたよね．今は色々話し合い，意見を言い合っても，その間に本は入ってないね．読書するという習慣が，今ではもう高校生の時から身に付いてないんですかね．

池谷：今はもうないね．高知県の数年前の調査でも，高知の高校生は受験校ですらほとんど皆家で勉強しない．塾や学校が全部やってくれるから，それに身体を従順に合わせて，ただゲームのようにやり過ごしているだけ．ただひたすら受け身の授業をこなすだけで，受験勉強も必死にやるという状況にはなっていない．

江坂：そんな馬鹿な．僕の頃は雑読のほかに参考書を読んだり，数学の問題などを，巻末の答えに頼るのが嫌で，「独力で解いて見せるぞ」と１週間ぐらい考えたり．

池谷：だからもう日本の高校生の勉強時間なんて，世界的に比べたら少ない．中学生もね．

牧：ましてや大学生なんか？

江坂：前に話したあのグラフによると，そうなるね．

池谷：何をもって勉強とするかにもよるけど，一番勉強してるのは，たぶん小学校６年生だね，中学受験で．

牧：本を読むというのは何かに好奇心とか興味がないと，しないんだろうね．マンガでも良いんだけどね．

江坂：漫画だけでは困るよ．ところで僕はドイツ学の教師だから，形容詞と副詞などの違いをきちんと理解してくれないと困るから，具体的に例文で説明してするんだが，なかなか分からない．

牧：何年生？

江坂：１年生．ドイツ語は動詞が英語よりよく人称変化するから，1，2，3 人称の違いから具体的に「僕が君に話しているから，僕は話し手で１人称，君は聞き手で２人称．君が話し，僕が聞

く方になれば，人称は逆になる．この二人の会話に出てくる僕たち以外のものが 3 人称だ」と教えてもね，それがなかなか分からない．色々な例を出してね，「君のお父さんは」何人称と尋ねると，「2 人称」とか，「私の〈お父さん〉だから，1 人称」．「僕も君も〈お父さん〉ではないだろう？それから〈お父さん〉ではなく，私の〈父は〉だろう？」．

池谷：たぶん国語の文法も日本語も，きちんと学んでいない可能性があるね．日本語は主語が曖昧だから，ドイツ語や英語などの外国語を学ぶのは難しいし，主語を曖昧にしないという訓練もできていない，そういうことが奥にあるでしょうね．外国語を学ぶときに一番大切な，いわゆる言語の相対化が身についていない．

江坂：読書量が少ないから，日本語力も読解力も身についていない．僕らの頃は紫式部とか鴨長明など，随分暗記させられたと思うが，どうも古文も軽視されているらしい．

池谷：日本語もそうだと思うけど，例えば平家物語とか読むとリズミカルなものがあるでしょう．そういうのを声に出して読むということをしない．

牧：俳句を学ぶ会なんかもないわね．私たちは俳句・短歌，万葉集を懐かしいと思って読むじゃないですか，何度も教科書で読んだものだから．あれを今の大学生が読んでも面白くないと思うわ，だって読んでないから．平家物語の「諸行無常の……」とかを読まされた経験がないと，7・5 調とか 5・7 調のリズム感とかが身になっていないから，面白くないんでしょうね．

江坂：そうだね．だけど現代の日本語に古文の言葉が入っていて，それが味のある趣を出していると思う．例えば「ひとしお」とか，「募る」だとかね，そういう言葉がどんどん無くなって，日本語が非常に貧弱になっている．「一入（ひとしお）恋しさが募り」なんて文は，もう理解できない．そういう情緒だけでなく，文がどんどん短くなって，最近の小説を読んでも，長い文章でしか表現できない人情とかの機微がなく，僕には面白くない．社会はどんどん複雑になっているのに，文章は逆に短くなり，そして逆に分かり難くなっている，そしてマニュアル化とか携帯の絵文字とか，

池谷：そのマニュアル化の問題でいうとね，受験もマニュアル化されているし，大学に入っても穴埋め問題みたいな授業をやっている．そういう思考パターンを我々大学人も受け継いでしまっている，これも問題だよ．つまり合理主義・技術主義的になっている．これはね，「技術とは何か」，「技術主義とは……」となってくると，なかなか根深い問題になるね．福祉の専門家だとか，マネジメントだとかにも関係するけど，たしかに短期的なマネジメントはマニュアル化されたものもある程度有効だと思う．しかし長期的なスパンで考えると，マニュアルでは役に立たないこともいっぱいあるわけでね，それが一つの問題としてある．

もう一つの問題はマニュアル化されて行くとね，自分の感じたことだとか，もう一度反省し直すというリフレクションが全く無いままで続けるということになる．それで時間だけを，つぶして行くということになる．受験勉強もそういうのがあるね，言われたことを言われたとおりに解くというテクニックを覚えていくというものになってしまう．そこでは何故かという疑問を発すること自体非常に非効率になってしまう．

江坂：その「なぜか」という疑問が重要なんだよ．「英語にはいつも主語があるのに，どうして

日本語では曖昧にされてしまうのだろうか」という疑問を大切に胸で温めて，冷静に頭で考えること，それで「日本語と英語は違うんだ」ということに気づき，外国語が相対化できる．それをしないで，とにかく単語の意味を覚える，文法をおろそかにして，〈God saves us.〉も〈God save us！〉も良く似ているから同じ，これでは困るよ．だって前の文は「助けてくれる」から安心だけれど，次のは「助けがなく」困ってるから，そう祈るんだからね．

池谷：そりゃあ，そうだけどね．そういう「何故」が本当は大切なんだけど，それは非効率なことだと思って，避けて大学に来るわけでしょ．だからこそ，その「なぜ，どうしてなの」という問いを，たえず僕たちが突きつけていく必要がある．それが大学で十分できているかどうかというと問題で，学生もそういう機会に恵まれることが少ない，これこそが問題だよ．

江坂：その通りだけどね，入学まで基礎的なことを学んでいないというか，参考書を読んで補っていないというか，とにかく語学の場合はその基本を押さえてくれないと困る．「3 人称単数にエスを付けるかどうかなんて，どうでも良い．とにかくしゃべれれば……」という会話重視の文をね，どこかの本で読んだけど，とんでもない！ 基本やポイントを押さえずして，何になるかですよ．ある学会の催しに「サクラで良いから」と頼まれて，後ろの席に座っていたんだ．「通訳は何年も外国にいたから」と聞かされていたが，それが良く理解できない．「後ろだからだろう」と前に行ったら，招かれたネイティブ・スピーカーの方が良く理解できる．その公演が終わって，文句を言ったら，「日常会話は上手なんですがね」だって．

日常会話でもね，込み入った話になると，Yes とか No だけでは済まされず，複雑な構文になるよね．それが契約とか，学会での議論とか，その後の懇親会での談笑のなかでは教養とか国際的センスまでが問われることになるよね．そういう所では何の役にも立たないんだ，マニュアル通りの会話ではね．

牧：でも，"You are a vegetalian, are'nt you？" とレストランで聞かれても，まさかジベタリアンになって，土下座するなんてのは，いくら何でもいないでしょう？

江坂：そういうのは知らないが，トイレで笑ったら，自分が笑われたと思ったのか，その男にすごい剣幕で怒られて，そうしたという留学生の話は聞いてるけどね．

牧：まあ，トイレで！

池谷：語学は難しいよね，僕も大学の頃にドイツ語の授業は真面目に聞いた方だと思う．だけど本格的に勉強しなきゃと思ったのは，研究する必要に迫られて．だからマルクスの『経済学＝哲学手稿』を学んだときも，これはドイツ語で読まなくちゃと思って読んだ．その学ぶ必要性みたいなものが今の学生にはない．例えば英語圏の人たちは，どこでも英語が通じると思っているから第二外国語をわざわざ学ぶ必要性が出てこないわけ．だから彼らが第二外国語を学ぶというのは非常に大変なんだよ．だってイギリスだとかアメリカの人たちは英語で全部通用してしまうわけでしょう．たしか社会福祉研究者のエスピン-アンデルセンだったと思うけど，社会福祉学者の彼なんかは英語圏で長く生活してたから英語はしゃべれたけど，北欧とかを本格的に調査しなきゃいけないってということになって，歳をとってから第二外国語を勉強したんだそうだ．今の

学生の状況っていうのはそういうことと似ているね．今は自分の生活の中で何も不便を感じないわけですよ．

江坂：仕方がないよ，ある意味ではね．だって文科省がいくら「英語は重要だ，だから小学校から英語の授業を始めろ」とか，或る政治家などは「大学は英語で講義をしろ」なんて言っている，そして生徒の方も確かに「それは重要だ」と思ってはいるが，試験ではマーク・シートを H か HB の鉛筆で塗りつぶせば良いのだから，とにかく池谷さんが言ったように，「どうして，そうなるか」などとは何も考えず，その技術とか暗記の方法を習得する，これが肝心ということになる．そして彼らなりに「これにどんな意味があるのだろう」と疑念を抱きながら，苦しんでいるだろうが，どこかで安住している．英語の点数が良くても，悪くても，それなりの生活ができているではないか，そういう安心感がどこかにある．

僕らの頃はテレビがある家と，ない家，これは大きな違いだった．それがない家の子どもは，ある子の家に入り込み，覗かせてもらっていたが，その親の思いにはね，今から考えると，計り知れないものがあったと思うよ．つまり貧富の差が質的にあった．ところが「皇太子の結婚式をテレビで見よう」というメーカー側の宣伝が社会的風潮になり，普及し，今ではカラー・テレビが各家庭どころか，各部屋にもあり，それが何インチかという量的な差になってしまった．普通車か軽かという量的差はあるが，雨風をしのぎながら移動できる，庶民の夢であった車はどこの家にもある．そういう意味でね，池谷さんの言った，若者は「不便を感じていない」というのは正しいと思う．しかし，「自分は何をしたいのか」，「私はどう成長し，どんな人間になりたいのか」という質的な問題が棚上げにされ，点数とかアルバイトの時間給とか，社会に出てからの給料などという量的なものに振り回され過ぎている気がするね．例えば，これこれのことを究めたいから，この言語を勉強するというのではなく，皆が取るからとか，資格とは関係ないからという理由で決めてしまう．自分は「こういう仕事に就いて，こういう者になりたいから」ではなく，「安定しているから」とか「給料が良いから」で就職先を決める．

牧：でも学校がそういう指導をするでしょう．例えば「お前の成績はこうだから，どこどこ大学の医学部に行け」とかね，でも「入学後，どうも医者にはなりたくないし，なれない」という学生もいるそうよ．実習で血を見て，卒倒するとかね．

江坂：僕はそこに行かなくて良かったよ．出血の話を聞くだけで，手足がすくんでしまうからね．

牧：「自分はどう考えるのか，どうしたいのか」というより，周りの空気を気にして，本音で話さない傾向もね，江坂さんが言われた事と同じように思われるわ．

池谷：仲間からはじきになるのを恐れて，つまり「いじめ」に遭わないようにという事だけに心がけ，無言で「多数」とかに順応しなければならないからね．そしてね，こういう技術には実に長けるが，「何故それが正しいのか」，「正義とは何か」ということは考えたことがない．学生は自分の生活の中で何も不便を感じていない，だからね，外国語の必要性に気づかなかった，あのアンデルセンと同じだよ．

江坂：そして，ある意味では大学もそういう環境を作っている．

池谷：何のために必要なのかということをね，学生に気づかせなくては．

江坂：そう思うね．それに関係すると思うんだが，ある学部の学生が「テレビでドイツの福祉を見て，ドイツ語を勉強しなくてはと思ったのですが，私の学部には開講されていないから，先生の授業に出ていいですか」と部屋に訪ねてきたから，OK したこともあった．またこれも突然だけど，文科省か何かのに応募して合格となり，ボン大学で何かの研修を体験して来た女子学生が研究室に訪ねて来てね，「ドイツ語会話を習得したいので，先生のお部屋にお邪魔してよろしいでしょうか」と言われてね，時間を都合したんだが，彼女からの訪問は数回で終わってしまった．先の女子学生は数回教室に現れただけで終わってしまった．僕の授業に出ても単位にならないからなのか，ついて行けないと諦めたのか，それは判らないけどね．後の子はね，訊いてみると，ドイツ語の初歩の授業は取っていなくてね，だから「僕の 1 年生用の授業に出たら」と勧めたんだが，他の科目との関係で「不可能」とのこと，でも彼女の「ドイツ語会話を続け，上達したい」という熱意は分かるから，「どうしたら良いのか」と思っているうちに，来なくなった．実に残念だと思うよ．学習意欲を持っていても，環境がそれを許さないとか，その意欲が実を結べるような土壌が用意されていないとかね．

それは僕たち大学の責任だが，それより入学以前の中高の日本語も含めた語学教育がどうなっているのか不思議に思う．とにかく基礎的なことが習得できていない．

池谷：その中高の英語教育に問題があるね．まずアルファベットの筆記体を教えないから，ブロック体しか書けない．辞書の引き方も教えないから，それが分からない．だって，中学校ではほとんど辞書を使わせないから．

江坂：そんな馬鹿な．

池谷：本当だよ，それが普通になっている．教科書の後ろにある単語を覚えれば良いんだから．僕が中学校に入った時は，辞書の引き方も，英語の発音の仕方も丁寧に発音記号も含めて教えてもらったけれど，今はそんなのはしないし，その時間もない．

江坂：池谷さんは発音記号を教えてもらえたんだ．僕の中学ではそれがなかったように思うが，4 線紙のノートをね，音楽のは 5 線紙だが，とにかくそれを買わされ，筆記体をそれに書かされ，それを提出させられて覚えた．池谷さんのように発音記号は教えてもらわなかったが，岩波の『英和辞典』を買わされ，先生が授業中に読む単語をそれで引きながら，「あの発音はこの記号で表されているんだ」と覚えましたよ．

池谷：それは江坂さんの頃の昔話で，今の中学生は辞書をほとんど持たない．せいぜい電子辞書だよ．それを引いても構文が分からないから，文章の構造がまるで理解できない．そういう中学校や高校の英語教育の弊害を負って学生は入学して来るのに，英語の先生はともかくも，他の先生にそういう高校教育までの問題性が共有されていないし，語学教育の重要性も共有されていない．

江坂：だけど就職の第一関門は一般教養と英語の試験でしょう？そこでほとんど落とされて，次には数段階の面接試験が待っていて，その教養と語学力が本物かどうか，わが社の職員としての

品格を備えているかどうかが試される．

牧：それって公務員の，一般の企業の？

江坂：家で取っている朝日新聞の「職員募集記事」には，まず「一般教養（英語を含む）そして複数の面接試験が続く」とありましたよ．もちろん海外に派遣できる社員が必要だからでしょう．国内で働くにしても外国語ができないとまずい，もうそこまでグローバル化が進んでいるんですよ．警察官や税関の「第二外国語の能力まで必要」という募集記事を読んで驚いたけど，ちょっと考えてみれば「そりゃあ，そうなるよな」と思いました．逮捕して連行した容疑者が外国人だったら，お巡りさんも「困っちゃうな」．

牧：その前に困らない？逃げる犯人に，「止まれ」と言っても，日本語が分からない外国人だったら，止まってくれないわよ．日本の警官はむやみに発砲できないことになってるから，ある意味では良いけれど，映画で見るかぎりアメリカのポリスマンはすぐ撃つわよ．だけど，突然後ろから大声で〈stop〉と怒鳴られ，その意味が分からなかったら，びっくりして走り出すかもしれないわよ．

池谷：そうだよね．「セントレア」中部国際空港に降り，荷物受け取りホールで待っていると，犬が走り回ってる．あれは麻薬犬で，大麻とかヘロインを持っていないか嗅ぎに来るんだ．犬もグローバル化のあおりで，国際的に通用できる鼻がないと働けない．

江坂：そうなるよね，ワンちゃんも勉強しなくっちゃ．吠えてくれたワンちゃんの後始末は税関の職員に受け継がれる．その人間が国際化していないとね，犬にも……，今はそういうものすごい時代になっている．小学校の先生になろうとしたら英語は教科で教えなければならない．もちろん他の外国語もね，ブラジル移民の子孫とか，中国に戦後残留させられた人たちの子どもが学んでいる学校でも，働いている工場でも，スペイン語とか中国語ができないと駄目，そういう時代になっている．

池谷：そういう場面ではマニュアル化された会話でしのげるかもしれないが，それ以上のものになると，リフレクションしなければならなくなる．第二外国語とか英語とかを勉強してみると，文章の構造はどうなっているか，何が主語かなどを考えないといけないのに，日常会話にはそんなのは必要ないからね．だからますます日常会話の世界が，そのままの自分の世界になっていくから，自分と世界が一枚岩のもののようになってしまって，リフレクションもしないし，できないマニュアル人間になってしまう．

江坂：そう，そう，マニュアル化が進むと，機械の部品になってしまう．コンピュータのあるキーを押した時のように，決まったことしかできない人間にね．

牧：今の職業教育もそうだからね，これをこういう風に覚えなさいって言われたことをそのまま覚えたら，とりあえず試験には通る．

江坂：それでね，最近よく思うんだけど，1999 年にウラン溶液をバケツで運んで臨界値に達しちゃったという東海村での事故があったでしょう．あれにはビックリしたよ，上司の命令なら何でもするんだからね．僕は中学か，高校で放射線とか，連鎖反応という基礎的なことを習ったけ

ど，あの事故を起こした職員や，それを命じた上司は自分たちがどんな危険なことをしているのか分からなかったのだろうか．高濃度の放射性物質をどんどん一ヶ所に集めれば連鎖版が起こる，その反応を一挙に起こさせるようにしたのが原爆，そんなことは中学生でも分かることだよ．会社もきちんと科学的な社員教育をしていなかったし，国の承認を受けた本来の作業手順を逸脱したことを 10 年ほど前から続けていた．96 年からはそれが「裏マニュアル」として文書化され，その事故はこの不正なマニュアルまでも逸脱していたというから，もうどうしようもないよね．人間は自分が何をしているかを理解し，働き学びながら問題点を見つけたり，新しい発見をし，自己成長して行くものだと思う．これが機械と違うところで，発展性がある．ところが社会の風潮はどうも逆に，マニュアルで人間を機械化しているようだ．

僕は 2 年国家公務員として勤めたんだが，最初「誓約書」のようなものにサインさせられてね，そこには「日本国憲法を守り，上司の命令に従い……」というようなことが書かれていた．「その二つが矛盾した場合は，どうなるんだろう」と思ったけど，それはともかく，最近その憲法に当たるものとして「企業の社会的責任」というものが強調される反面，そういうものが排除されたマニュアルが横行しているようにも見える．とにかく考えるな，「マニュアル道理にやれ」ってね．

牧：マニュアル化すると便利だからね．上司も部下もとりあえずは考えなくても，勉強しなくても良いから，後のことなんか考えないようにさせられている．

江坂：だけど，上の指示とかマニュアルに慣らされ，何も考えなくなってしまったら改善も発見もできない，間違ったこともやってしまう．外国産の牛肉を国産と偽装していた，これが発覚した事件があったよね．その現場で働いていた人の声が新聞に載っていたのを読んでね，驚いたよ．国産の肉に偽装するための箱詰めを指示された一人が「何でこんなことをするのですか」と上司に訊いたら，「うるさい，黙ってやれば良いんだ」とか怒鳴られたとね．

池谷：それを内部告発してるんだよ，働く者の良心がね，そんなことは許すことができない，社会的使命とか自分のモラルを裏切ってはならないという良心がね．

江坂：それは勇気ある人の行為で表に出てきたが，氷山の一角のように思うよ．

池谷：そうだろうね．とにかく人間がすべてマニュアルどおりに動くとは限らない．現場ではね，人間にとって働くということの原点みたいなものと，上の連中の利益追求みたいなものが，ぶつかり合ってる．

牧：そうでしょうけど，まだまだ「上に従っている」という方が，やっぱり強いのでは？大阪の料亭「船場吉兆」の事件，あれもね，従業員の「これは料理人としてのプライドが許さない」という仕事への情熱や自信，それが内部告発という行為になったんでしょうね．そういう人が僅かでもいると思うと，何かホッとしますわね．

池谷：同感ですね．

マニュアルと技術，それと教養について

江坂：これまでの話の中では受験技術とかマニュアルのマイナス面が多く出てきましたが，牧さんが言われたように，「マニュアル化すると便利」という面もあると思いますよね．この「マニュアル」(manual) を英和辞典で引くとね，「手引き，入門書」という意味なんですよね．僕は「ドイツ語入門」書も読みましたし，他の分野の「手引き」書にも導いてもらいました．「技術」(technique) も「(専門的) 方法，手法」という意味ですが，子どもの頃に親の鎌などの農具を使う「手法」を見よう見まねでやっていたら，草の代わりに指を切って痛い思いをして，さらに親の手つきを観察し直し，自分の鎌技を物にしましたよ．だからマニュアルも技術もね，単なる猿真似でなく自分で理解しながら，痛い目に遭いながら習得するというものならね，自己成長 (Bildung) に繋がり，血となり肉となった「教養」になるよね．

池谷：うん，本来はそういうものでなければならないんだ．NHK が「プロジェクト X」でやっている技術の伝達なんかもね，そういう個々人の自己成長への努力をもとにして，自分たちが創意工夫して，ああでもない，こうでもないと模索していく共同作業の中で伝わってきたわけだ．ただ NHK の好みに合った，性別役割分業のもとで女性に支えられてきた男社会という枠にはめられたお話なんだけどね．とにかく技術もね，そういうふうに一緒に働きながらやっている中で習得され，伝達され，磨きがかけられてきた．

牧：私は人間として一番重要な教養はね，生き抜く力を養うことだと思いますよ．それを実生活の場とか教室で学ぶのであって，先輩とか先生は本来その援助・教育者であるんですよ．だから個々人の生き抜く力という生活力は当然総合的になるわけで，先輩も先生も含めて周りの皆もそういう力を持ち合えるわけよ．それが先生は教える人，生徒や学生は教わる者とだけ固定化され，ばらばらなマニュアルの伝達だけになってしまうと，その部分・部分を繋いでいた総合的なものが失われてしまう．これにはこっちのマニュアルで，あれにはあっちのでと，バラバラに対応するだけで，自分で考えたり応用する力が無くなって機械的なものになってしまい，同時に人間同士もバラバラになってしまう．学生と話していると，本当にそう思わされることがありますよ．親や教師や周りから言われたことには非常に従順だが，自分で考えるという力が養われていないのではとね．

江坂：そう言えば授業中に「先生トイレに行って良いですか」と聞かれますね．そういうのが多いので，「駄目だって言われたら，どうする」と尋ねたらね，「漏らします」だって．その学生はなかなかできる奴で，そう半分ジョークで応えてくれたから，「これからはニヤッと笑って，黙って行け，みんなの迷惑になるからな」で終わりましたがね．僕らの頃は小学校の低学年でね，授業前に用を足しておく習慣を身に付けていたのですがね．

牧：そう，そう．私たちの時代にはね，戦後の民主主義の影響で自ら考え，自らしなければいけないという社会的雰囲気があったような気がするんですよね．荒廃した世の中を皆で立て直して

行こうというような創造性が溢れていて，だから自分の意見を必ず言いなさいとか，例えばこの考えに賛成・反対というだけではなくて，「自分がなぜその意見に賛成なのか，理由を述べよ」って，もうしつこいくらい言う先生たちがいたの．だから，「何か決める時には，何か理由がいる，何か考えて自分なりの意見を言わなきゃいけない」という思いが，子どもの頃に染み付けられた気がするんですけどね．皆で意見を戦わせ，それがなかなか一つにならないと，やっぱり多数決でということになるんですが，たった 16 人の小さなクラスだったのに，必ず多数決になりましたわ．それくらい皆自分の意見を持っていましたね．話し合いの時は弁の立つ子の方が有利でしたけど，とにかく決めるまでの議論の中に自分の考えが反映できたので納得しましたわ．

戦前は上から言われるのに従っていたから，戦争に巻き込まれてしまった．その結果，実に多くの人たちが犠牲になって死んでいった．そのことへの反省から敗戦後の日本はスタートしたと思いますよ．教育界でも，教え子を戦地に送ったことを本当に後悔した教師たちが大勢いた．だから，教え子を戦争に駆り出すことは二度としない，戦争のない社会を作ろうと決意したと思いますね．何かをする時には，その前に皆が自分で考え，自分の意見を言う，そして皆で考える，そういうことが当たり前だったんですよ．今ではそれが当然でなくなり，上からのマニュアルに従うことが当然になっているように思うのよ．「危ない，危ない」と言うのが昔のアイドル歌手の歌詞にあったように思うけど，本当に危険な状況に世の中はなっているように思うわ．今の「当然」ではなく，戦後のあの当然に立ち帰らなければいけない，私たち大人にはそれが義務としてある，そう最近つくづく思いますよ．私は丁度きっかり終戦の年に生まれたから，8 月 6 日の広島，9 日の長崎に原爆が投下された日と，16 日の終戦記念日にね，テレビのニュースで「戦後何年になりました」とアナウンサーが言うと，それが私の歳になるのよ．江坂さんも池谷さんも，年の変わり目に 1 回だけ「ああ，また一つ歳をとったか」と思わされるだけで，「もう，そんな歳になったのか」とは公共放送で教えてもらえないでしょう．私は 8 月に 3 回もそれを確認させられるから，かなわんわ．

池谷：そうか，僕は 8 月に放送されたその数字に 3 をプラスすれば，僕の歳になるのか．ところでね，江坂さんの言った技術伝達方法のことで思い出したんだけど，そういう集団の中に徒弟が入って来た時にね，徒弟は「どういう風にして一人前になっていくのか」という研究をした本があるんですよ．ジーン・レイブとエティエンヌ・ウェンガー共著の，タイトルは『状況に埋め込まれた学習　正統的周辺参加』です．徒弟はね，初めは親方の周りを兄弟子が囲んでいるから，ソッと遠くから覗かせてもらいながら，与えられた単純な仕事しかやらせてもらえないんだが，周りで覗きながら段々とその技を盗んで身につけ，そうして最後に一人前の職人になる．そういうプロセスを学習論として捉えた「周辺的参加論」というのがありますよ．

牧：それはどの辺の分野になるの．

池谷：それは広い意味での教育心理学の分野になると思うけどね．

牧：そういう本当の苦労と喜びを学ばせようと，デンマークなどでは高校を出てすぐ大学には行かせないでしょう？

池谷：スウェーデンもそのようですよ．

牧：それが皆で創る社会と国の方針になっているのね．それって大事なことだと思うわ．

池谷：ヨーロッパでは日本のようにね，まだ大学は大衆化してないからね．

牧：それで，そうなるの？

池谷：別に大学に行っても，それだけでは大した職を得ることにはならない．ドイツでもそうだよ，飯を食えるための技術を身につけられるマイスターになるという道がまだまだ残っているからね．

牧：私の頃は個人も社会もね，国中が渾然一体となっていたような，とにかく皆が個人であり，社会の主人公というような混沌としたカオスの中から創り出そうという雰囲気があったわ．

江坂：僕は牧さんのたった 2 年後に生まれたんだが，そういうのは無かったな．きっと親の方はその日の生活のために精一杯だったからと思うんだが，放ったらかしでね，子供同士で走り回って遊んでいたよ．ところが突然ランドセルを買ってもらい，それを背負ってルンルン気分で小学校に上がって，先生にしょっちゅう往復ビンタをもらっていた．その先生は軍隊上がりで，それが彼の習性になっていたんだと思う．いつも殴られて廊下に立たされていたので僕は知らなかったんだがね，その先生は算数の九九をいくら教えても，児童がなかなか覚えてくれないのに情けなくなったのか，それとも軍隊時代に身につけさせられた，すぐ殴る習慣を自己批判してなのか，自分の頭を黒板にガンガンぶっつけて泣いていたんだって．その小学時代の逸話をね，とっくに 50 を越えた仲間が集まったクラス会で聞かされてね，あの先生も「ただの鬼軍曹ではなかったんだ」と僕は考え直しましたが…….

池谷：僕もその頃体罰を受けた．

牧：弱い女を殴る男は最低という古い観念がまだ生きていたからなのか，私にはそういう記憶はないわ．私は終戦の年に生まれたから，子どもが本当に少なかったから良かったのね．ベビー・ブームで急増した小学新 1 年生用に急募し，それで軍隊上がりの先生が紛れ込んだかもの知れないわね．それで男の子には災難の時代，女の子にはラッキーな社会風潮というなかで私たちは教育を受けたのよ．でも，そんなの今の学生には想像もつかないことよね，暴力を振るったら教育委員から懲罰ものだからね．でも，先生を友達のように思っている現代の風潮もちょっと困るわね．外国は，どうかしら？

江坂：それは各国で違うんじゃないかな，だって文化とか伝統が違うからね．米国は人種の坩堝で，ドイツで会ったアメリカ人はそれをプラス評価していたがね．黒人でも国務長官や大統領になれるという新しい歴史を作りつつあるのは素晴らしいが，肌の色による白黒黄色の差別は経済的にはまだまだある．ところで，男女差別が先進国でナンバー・ワンはね，例えば国会議員とか社長など指導的地位にある女性の割合の少なさでは，残念ながら日本ということになっている．

池谷：日本には徴兵制がないから良いが，ヨーロッパでは男性の場合だと，兵役がある．ドイツでは兵役を拒否すること自体まだなかなか難しい問題があるから，一年半ぐらい軍事訓練を受けるか，それに代わる市民奉仕活動についたりしなければならない．それに就くと，それなりの日

給がもらえ，そのお金を貯めて大学へ行く資金にしたりする者もいるし，兵役を終えてから外国旅行などの修行遍歴みたいなものをしたりする者もいるから，高卒でストレートに大学に入ってくるわけじゃないんだ，ドイツなんかではね．

牧：大体 24 とか 25 歳？

池谷：そう．それに社会に出てから入学してくる人もいる．だから「この人，先生か」と思うような歳の学生がいたりする．だが，日本はもう本当に同年齢化している．

江坂：ギムナジウム，これは日本の高校に当たるものだけど，この卒業試験を受けて合格すると，基本的にはどの大学にも行けるらしいが，各大学と学部では社会的評価が違うから，その卒業試験の点数によってどこに入学できるかが決まるようだ．例えば心臓手術ではミュンヘン大学の医学部が有名で，当然そこの競争率は高くなるだろうから，余程高得点でないと無理だとかね．僕の知っている姉妹の姉はある大学の医学部に入り，妹は農学部に入ったが，その点数による差が影響したのではないかと思う．だけど結局どちらも入学後進路変更し，一人は医学部には見切りをつけて心理関係に移り，他の大学でも 1 年間学び，今ではある病院で科長をしている．妹の方は金細工の学校に移り，卒業後フィレンツエの親方の工房に弟子入りし，技を磨いている．

もう一人は友人の息子の場合だけど，ギムナジウム卒業後ドイツ銀行に入り，その見習い期間が終わった時「正式に採用したい」と言われたのを断わり，大学に入った．そういう風に社会に出て働くと，あの卒業試験結果に一定の点数が上乗せさせられ，それが合格点に達すると，その大学の希望学部に入れるようだ．その友人が僕を家に招待してくれた時にね，その見習い期間中の息子が紙に数字を書いて計算をしているのを見かけ，「何をやっているんだい」と尋ねたら，「上司がこの問題を解いて来い」と命じたんだって．その問題というのが銀行業務とはほとんど関係のないもので，面白かった．池谷さんが言ったように，日本と違ってストレートではなく，こういう風に社会に出て，それから大学に入るという迂回経路があるようだ．スウェーデンのストックホルム大学では，「学生の 8 割が社会人」という話を聞いて驚いた．

牧：ちょっと，その面白い問題ってどんなのでしたの．

江坂：正確には覚えていないが，こういう問題だった．「市場で雀を 1 羽 3 マルクで，鳩は 5 マルク，鴨は 7 マルクで売っていた．合計 50 羽もらい，200 マルク払った．では客は，それぞれ何羽ずつ買ったのか？」

牧：面白いわね．それって算数の問題で，教養の問題でもあるわね．日本の大学ではインターシップや実習などの科目があるけど，入った企業とか施設などでどんな指導をしてくれているのかしら．便所掃除を二週間やらされて帰ってきたと言うのをね，聞いたこともあるけど．

江坂：それはひどいな．僕が喫茶店で偶然同席した若者から聞いた話だけど，彼は中学か高校しか出ていないけど，正社員として雇われ，工場で働いていたらね，上司に「お前が作っているこの製品が，工場全体で毎日どれだけ製造され，それを親会社に納入するのに何トンのトラックを手配すれば良いか？」って訊かれたんだって．彼はどう考えるべきか分からなかったが，彼の上司は「1 つが 50 グラムで，ベルト・コンベアの今のスピードでは 1 時間に 150 個できるかから，

8 時間労働では x 個，そのラインが 7 だから y 個，それに 50 グラムを掛けると……．その総グラムをトンに直すと……」と暗算で答えをアッという間に出してしまったんだって．それに驚いてね，彼は「僕は数学を勉強したい」と言っていた．その彼の目の輝きからね，明らかにその上司を尊敬し，そうなりたいと思っているようだった．これは池谷さんが言っていた「学生時代にすごい先輩に会った」というのと同じだね．

池谷：勉強とか学問は社会と本来そういふうに結びついているんだ．そういう相互関係のなかで本物の教養を身につけ，自己成長して行くんだよね．マニュアル通りにやっているのと訳が違う．マニュアルはあくまでも壊されるためにあるものだよ，実際の現場で応用されてね．例えば 1 ラインが故障で 1 時間止まってしまった場合，配送トラックの手配はどうすべきかとかね．もちろん，江坂さんが先ほど紹介した東海村のような基本から逸脱した壊し方では困るけど．

江坂：PISA の問題のなかには，まず自分で考え，応用できる能力を試すものがあるが，そういうのに「日本の高校生は弱い」という新聞記事を読んだが，それに弱いということは，基礎ができていない，基本が分かっていないと言うことで，これでは応用も何もできないよね．

教養のルネサンスへ

江坂：さて，これまで「社会の中での教養」という視点で話し合ってきました．そこでも問題点とそれを克服する方向というか，萌芽のようなものも含まれていたと思いますが，ここでは「教養」とか「創造力」,「地頭力」などの必要性が叫ばれる最近の事情に則り，それらの「再生」または「新生」のためにという積極的な方向で話し合いたいと思います．これが「はじめに」で申しました「今求められている教養」になると思いますが…….

池谷：そうだね．技術について前で話題になったけど，昔は「技」(わざ) の一字だけで通用していた．この技を徒弟たちは親方や先輩たちの「真似」(まね) をしながら盗んできた．これをもっと上品な言葉で「模倣」(「まねび」) に置き換えても良いが，そもそも「学び」はこの「模倣」から始まるんだ．これが僕は大事だと思うんだけど，でもそれは意識的に盗んでやろうとしなければ，ただ記憶するだけのことになってしまう．

江坂：そうだね．その「意識的」というところに主体性が関わって来るのだからね．機械的な単なる真似でない，創造的な模倣ということで，そこに主体者である人間のオリジナルなものが加わる．

牧：一つ気になっていることで訊いて置きたい事があるんです．江坂さんは「小学三年で，九九ができなくて，廊下に立たされていた」，そう聞いたんですが，九九は必要じゃないですか．どうして覚えなかったの？

江坂：難しい質問ですね．思うに，僕はそのころ田舎で充足していたからだと思います．周りには田畑とか林しかなかった．遠くに人間が住んでいるらしい家が 2，3 軒あっただけで，家族の 4 人以外，僕の友だちは蛙とかアメンボ，そして嫌な奴はネズミと蛇でした．そういう敵は嫌だっ

たけど，友だちは実に面白い顔とか形をしていましたよ．カエルは僕とは違って，彼の身長の数倍もピョンと跳びますし，兎は実にすばしこくって，小屋から逃げ出したら，なかなか捕まえられない．夏になるとね，蛍がいっぱい飛びかい，夜空に光の絵を描いてくれました．

池谷：僕の住んでいた横浜とは随分違う環境で，江坂さんは充足していたんだな．

江坂：そうだよ，蛙がピョンピョン跳ねているのを数えると，3 匹いた．そこに 2 匹がピョンピョンと加わり，足すと 5 匹になる．1 匹が小川にポチョンと飛び込み，僕の視界から消えたから，4 匹になる．そういう自然に囲まれた生活をしていたから，2 年生までの足し引きの算数は理解できた．

ところが 3 年生になると，突然「九九を覚えろ」と言われ，その意味が僕の生活感覚ではすぐに理解できなかった．それで長考の末に出した答はね，1×3 というのはね，1 を 3 回足せば良いということだった．だって蛙が 1 回ピョンと跳ぶ，次にまた 1 回，さらに 1 回ピョンで合計 3 回ということになるでしょう．

牧：でも 23×32 となると，23 を 32 回も足すのはしんどいでしょ？

江坂：僕はそれ以前の九九でしんどかった．その先生は僕の前で「4・7」と言うんだ．その足し算をしている間に時間切れで，往復ビンタを食らい，「立っとれ」という軍隊式命令で僕は立つ．しばらくするとね，その鬼軍曹が僕の前で「7・6」と来る．「椅子の上に立て」で，そうする．次は「机の上に」，「教壇の前」で晒し者になった訳だが，「九九は足し算を繰り返せば良い」と確信していたから，僕は正々堂々だったか，どうかは分からないけど，とにかく立っていた．次は廊下に出されるが，しばらくすると同じ仲間が出されてくる．いつも僕が最初で，次に彼が来る．幼い二人が廊下で並ぶとね，雑談が始まる．すると突然ドアが開き，「うるさい，運動場を鐘が鳴るまで走っておれ」と軍令が下る．

とにかく小学 3 年生は，そういう毎日でしたね．ところが 4 年生になると，牧さんが言われたようにね，何桁もの掛け算になると，足し算では時間がかかり過ぎて駄目だと気づき，考えました．蛙が真っすぐピョンピョンと跳んで行く足し算のような直線ではなく，掛け算は面積だということに気づき，そこで真面目になって九九を覚えたんです．だって直線上を 2 センチずつ 3 回跳べば，6 センチの点に来るんですが，掛け算は縦に 2 センチ，横に 3 センチで，その面積は 6 平方センチとなるんです．これは全く違った原理で，基本的な違いですよ．1 次元と 2 次元の世界の違いですよ．それで僕は九九の必要性を理解して，初めて覚えた．その頃はそれで済みましたが，では 3 個の数字を掛けたら体積になるかと言うと，問題によってはそうなりませんから，いつも具体的に考えなければ駄目だということに気づきました．

池谷：それはマニュアル通りにやるか，それを自主的に受け入れるかという問題と繋がるね．だから先でも言ったけど，僕はそこに自分が「参加」しているということ，ここに重要な意味があると思うんだ，「学ぶ」という点ではね．例えば，牧先生がやってるインタビューなんかも同じことになりますよね．初めてインタビューをする学生たちは色々戸惑うだろうけど，そこに「参加」して初めてね，相手にどう対応しなくちゃいけないかとか学ぶし，相手の話をじかに聞きと

ることで，学んでいくという部分はとても大きいものがあると思うね．高知県の平和ゼミナールの高校生たちがまず最初にやるのも，聞き取り調査なんだ．

牧：私は，それ知っていますが，まだやってますの？

池谷：まだ続いていますよ．高校生たちがやっているのはね，地元の人に戦争体験を聞きに行くとかの社会問題でね，例えば，50 年代の南太平洋のビキニ水爆実験で被爆した人のインタビューに行く場合，先生方はあらかじめ一応マニュアルみたいなものを生徒に教える．だけど具体的に生身の人間と会って，その人たちの声を聞く，しかもそれを丁寧に聞き取らなくちゃいけない．これ自体，すごい勉強だよね．

牧：私は学生をフィールド・ワークに連れて行くことが多いんです．地域へ出かけてインタビューさせるわけですが，「どう聞いて良いか分からない」と言うので，そのために 20 項目ぐらい作って，学生に面接をさせるわけです．ところがその前にね，面接の最初の声掛けが分からないと言うので，「こんにちは」というところから練習させるわけですよ．最初はね，「練習しないで行くように」と言ったんですが，それでは「自信がないし，不安でたまらない」と言われ，「学生に恥をかかせても，かわいそうだから」と思い直して，練習を 1 回ほどやらせて送り出したんです．ところが実際にインタビューに行ったら，その相手の人はもう 70 代くらいのおばあちゃんで，今まで語り部として経験がある喋りのベテランでね，向こうの方はもうこの学生は何を聞きたいかも，先生に言われて来ている事とかも分かっているわけですから，学生の方が尋ねる前に話してくださったらしいの．「あなた達 20 項目ちゃんと聞けた？」って聞くと，「先生，あのおばあちゃん全部話が横に逸れて，聞きたいこと聞けなかった」って言うんです．だから「最初にそんな項目なんて，作らんで良かったやろ」って言ったら，「でも，それがあることで自信になり，それを持ってることで安心できた」と応えられましたわ．その逸れた話のなかに思いがけない宝が埋まっていることも多いのにね，マニュアル通りに行かなかった方が随分ショックだったらしく，その宝に気づかずに帰ってきたのかしら．

それからね，学生たちにはあらかじめね，インタビューに応じてくださるのは「15 人だ」と情報を伝えると，「それでは自分達も 15 人で」と決めて行ったわけです．ところが当日行くと，相手の方が 1 人増えるとか，2 人減るとかいうことが起こるんですよ．だってね，相手の方は高齢で病人なのに，「若い人のために」と思って，一所懸命頑張って吸入などして集まって下さるんですが，急に病気になったりとか，病が急変したりとか，こういうことは良くあることですよ．私はそれが当たり前のことだと思うんですが，学生の方は「予定が狂った」と私に怒るのよ．

池谷：怒る？

牧：怒るというか，私に文句を言うわけ，「先生，いっつもいい加減や」とね．相手は 15 人と言ってたのに，今日 13 人しかいなかった，「どうしてくれるんねん」って．「どうしてくれるって言われてもね……，じゃあ，あなた達が 2 人ペアになったら良いだけじゃないの」と応えたら，「誰と誰がなるの？」，「それぐらい自分たちで考えなさい」．4 年生がそうなんですよ．だから次の時には，これではちょっとまずいから，最初から 2 人ペアにしようとか，次々変えて行くわけ．

するとね，「先生の言う事は毎回違う．アバウトでいい加減だ」って言うわけ．その時は私も思わずね，「あなた達，この人達は病人やで」―― だって MSW になりたい子もおるし，福祉施設に勤めたい子もいるからね ――「『何月何日の何時にこの人病気になりますから，よろしく』って誰が言えるの？いつどうなるかなんて分からない．あなただって明日交通事故にあうかもしれないよ」って言ったの．そしたら，学生は『先生，それは詭弁や』って言うから，「これは詭弁じゃなくて，臨機応変に物事を見ないとね，現実社会は常に動いてるんやで」と教えてね，「それが現実社会の姿．地域に行ったら色んな人がおって，その色んな人の動きに応じて，こちらは臨機応変に対処せなあかんと」．「先生がそんなに深く考えてるように思わへんかった」って，よく言われますわ．計画通りにね，例えば 13 時に集まって 15 時に終わりたいわけですよ．でも相手の方が熱心によく話して下さったら，やっぱり延びるでしょ？その時は一所懸命に学生たちは聞いてるんだけど，終わってから「先生，今日 16 時半になったわ」とか言うんですよ．それで，「いや，あなたが気に入ったから，向こうは喋ってくれたのよ」って言うと，「先生いっつもその言い方やね」って言われるの．毎年そういう風に始まり，学生たちは徐々に分かってくれて，そういうのに慣れなれながら，成長してくれる．「これもマニュアルの内の一つなのかな」と思っているの．

池谷：僕もね，いつも学生から「先生はいい加減だ」と言われていますよ．

牧：言われますか？

池谷：だってその場に応じてさ，ゼミの運営とか進行はそういうものじゃない？その場に応じて，学生の状況を見ながら，変えないと行けないわけですよね．

牧：3 年生の時はゼミ生も戸惑うみたいで，それが 4 年生になると段々，この先生はこんな動きをするけど，もうしゃあないから付き合おうかと．

江坂：僕は 1，2 年の学生を中心に教えているが，そこでよく「文章はコンテキストを考え，状況を想像しながら，行間を読め」と言うが，牧さんの話を聞いていると，僕の前で黙って聞いている学生たちは腹の中で「変な先生だな，行間には何も書いてないじゃないか」と思っているかもしれないね．もちろん，これは冗談だが．「読書は自分の頭で考えながら，著者と対話を楽しみながら，〈あなたが前に言っていたことには同感だったが，ここで書いていることには肯けませんね〉とか，余裕を持ってするものだ」と言葉を変えることもある．これって大切なことだと思うから，分かってくれるようにね，そして「ニュートンと農民」の話を付け加えることもある．「ニュートンはリンゴの落下を見て，万有引力の法則を発見したという話，これは有名だから皆知っているね．だけど，リンゴが落ちるのを見る機会は，リンゴ園で働いている農民の方がずっと多かったではないか．それなのに，どうして偶然リンゴの木の下で本を読んでいたニュートンの方が先に，地球の引力に気づいたのか」，学生は黙っている．「ニュートンには遊び心があったからだ．〈どうして落ちたんだろう〉と，不思議に思う余裕があったからだ」とね．車のハンドルに遊びがなかったら，しょっちゅうそれに気をとられ，周りを見ながら余裕を持った安全運転ができなくなる，これと同じだと思うよ．

池谷：牧さんが言ったことは，江坂さんの言う遊びと同じだね．まさに，「こういうのはこうじゃないと駄目」というマニュアルに慣らされ，それが勉強だと勘違いし，どうしてそうなのかという本質に迫る問いを発しないから，知的・精神的には自己成長できない．それとは異質の，決まった型にはまらない個性のある者とか，空気が読めなくて，それを乱すような者はいじめの対象になりやすい．彼らはマニュアル通りやゲームとしてやってきたことをかき乱すからね．だからマニュアル式の教育がいじめを生んでいるとも言える．もちろんその背景には大人の「いじめ」社会の問題があるけどね．

牧：そうなのよ．「女子どもは出しゃばるな，黙っておれ」，「出る杭は打たれる」，そういう古い言葉がまだ生きているのかしら，ずいぶん時代も生活様式も変わったと思うけどね．だから「出る杭」は出過ぎれば良いのよ，「出過ぎた杭は打たれない」から．ちょっと前にね，「親離れ，子離れ」とかいう言葉が流行したでしょう．それとね，これは関係があると思うのよ．親はいつまでも「子どもは，子ども」と思っているから，「愛情と心配ゆえ」と言えば美しく聞こえるけれど，「まだ春には早いから，出るな」と「出ようとする若芽に土をかぶせ」て，親の支配権を維持しようとしている．着せ替え人形のように，娘をいつまでも自分の気に入った服で飾る母親とか，何でも買い与えるパパ．でも思春期になった子が「出過ぎた杭」になれば，打たれず，親の方も「あの子も大人になったのだ」と見上げる．そのために昔は元服とかの儀式があったんだけど．

江坂：それでね，以前ある学生が話してくれたことを思い出した．彼は父親によく殴られていたが，体が大きくなったある時，殴ってきたその父親を殴り返したら，それ以来殴られなくなったんだって．それが，彼と父親の儀式だったんだね．

牧：そういう通過儀礼もあるのね．人間の巣立ちって，鳥のようにいかないから難しいわね．でも子鳥だって，その前に羽ばたきを何回もして翼を強くしておかないと，下に落ちて命を失うことにもなるわね．人間の場合，それが教養をしっかり身につけ，自立して自己の責任で成長できる力を蓄え，そして社会へと巣立つ，そういうことになるのかな．

そこで思うんだけど，以前私は介護福祉士の短大で教えていた，これって前に話したかしら，そこの学生の方がね，「まだ融通が利いていたなあ」と思うの．彼女たちは高齢者の施設を見てくるから，そこには色んなお年寄りがいるのを知っている．自分が決めたり考えた通りに，お年寄りは決して動いてくれないし，期待通りの反応もしてくれないからね．でもここの学生は真面目だけど，融通が利かない子が多いと思う．いついつまでに資料を出すようにと言うと，きちんとそうしてくれる学生が多い．それは良いのだけど，その内容が伴わないとね．

「先生，わたし欠席何回した？」って気にして，聞いてくる子が多い．一回のゼミでものすごい学びをしたら，2，3 回ぐらい休んだって良いと私は思ってるんだけど，学生の方は出席の「点数くれるの？」って，気になって仕方ないようでね．何かマニュアルのような形式だけに止まっている感じで，私の方はその内容の充実とか，向上にもっと目を向けて欲しいのにね．

江坂：強いですね，学生のそういう感覚は．

牧：それが年々強くなってません？その出席とか，形式へのこだわりは，私がこっちに来た 4 年前と較べても随分違うわよ．ただ座っている出席と，主体的に学びに参加するのとは全然違うのにね．

池谷：牧さんの言っていることは良く分かる．でもやっぱり出席とか授業の厳しさはあって良いと思うんだけど，これまで学生はマニュアルでやって来たから，そこから外れると，もうどう対応して良いか全然分からなくなる，そういうのが多くなっている．

江坂：出席が多ければ，それが評価される，そういうマニュアル理解の学生の問題点を牧さんは指摘されたと思うんだ．でも逆にこういうマニュアル理解もある．例えばそれで 3 分の 1 以下とか，7 回までは休んでも大丈夫と思っている学生もいる．そういう学生は「先生，私もう何回休みましたか」と聞きに来る．「X 回だよ」と答えると，指を折って「まだ Y 回余裕がある」と安心して帰ろうとする．その彼女にね，「しかし，ちょっと考えてごらん．君が学んでいるのは，初級ドイツ語の文法だ．君がお母さんの胸で日本語を習っているとき，形容詞，敬語と謙譲語，動詞の過去を教えてくれなかったら困ることになる，その時きっとお母さんを恨むだろう．君が休むのは自由だが，そういうお母さん役を自分で今やってるんだよ」と言うのだが，余りピンと来ないようだね．彼らから見れば，「マニュアル外れの先生」になるのかな．

池谷：そうなるかも知れないね．彼らは自分の日常生活のマニュアルが壊されちゃ困るんだ．だから僕もね，それをわざと壊す，そうすると学生は混乱しちゃう．

牧：困っちゃうわね．先生の仕事って，困られながら，困りながら，それを続けるしかないのね．

江坂：これまでのとは違うマニュアルの問題ですが，僕たちの頃は高校では英語の，大学ではドイツ語とかフランス語の参考書を買って勉強したけれど，最近の学生はそういうマニュアルも辞書も買わない，これには当惑しているんだ．勧めるんだが，買わない．「入学時に色々出費が多く，そういうものに回せないのだろう」と思って，数ヶ月待ったんだが，辞書ぐらいは買ってくれないと困るから，「辞書持ち込み可という試験もやるから，用意するように！」，これで彼らはようやくボチボチと手に入れた．

試験中に回って見ていると，辞書の引き方がおかしい．授業中に教えた文法に沿ってではなく，すぐ意味の所を見て，書き写している．この辞書について，ここでちょっと紹介しておきたいデータがあるんだ．それは約 10 年前に特別な学生 25 人ほどを対象にして，彼らが所持している辞書の種類を調査したことなんだが，こういう結果だった．

英和辞典 ……	100%
国語辞典 ……	96%
漢和辞典 ……	75%
第二外国語の辞書 ……	8%

英和辞典が 100 パーセントだったのは英語が 8 単位（？）で必修だったからで，国語辞典は 1

人が無しで済ませられる学力の持ち主だったからだろうか．第二外国語の率が低いのは必修ではないからで，1 桁というこの低率は同じように必修でなかった杁中時代と比べても桁違いで，この大学 30 年の変化を示していると言えるね．深刻なのは漢和辞典の 75%という所持率．だって，他の辞書を引いて分からない漢字が出てきても，それがなくては，そこで学習はストップということですよ．ところが，これには落ちがあってね，その 2，3 年後の授業中に偶然「漢和辞典を手元に持っていないものは手を上げて！」と言ったら，何と挙手は半分だった．

牧：2，3 年で 4 分の 1 も減ってしまった，それとも 10 年前の「特別な学生」と関係があるの．

江坂：「特別」というのは「スウェーデン研修」参加希望者でね，ネイティブの先生に頼んで，その最低限の基本会話を付け焼刃で教えてもらった時の学生だったんです．だから外国研修に行けるという経済的なものだけでなく，外国語も含めて，言語というものに興味・関心をより多く持っていた学生がそこに集まっていた，そういうことだろうと思う．

池谷：今では中学・高校で辞書を買わせない，そういうことも関係していると思うよ．だから辞書の使い方を知らない．

牧：ちょっと待ってください．それで，どうして勉強できるの？

池谷：だって教科書の巻末に載ってるから，それだけで充足してしまう生徒も沢山いる．

牧：まあ，驚いた．でも，それはその教科書に出てくる単語の意味だけが載っているんでしょう．

池谷：もちろん，そうだよ．

江坂：僕も驚いたよ．それであの試験中，辞書がうまく使えない学生がいたんだ．僕が中学で買わされた岩波の『英和辞典』はね，今でも使えるしっかりした代物だよ．『ハムレット』が好きだったから，その好きな場の原文をそれで引きながら読んだりしていたが，今の中・高生はそんなチャンスも与えられないのか．親が使った辞書を受け継げる子とか，経済的に余裕がある親から新しい辞書を買ってもらえる子は良いけれど，そうでない生徒はどうなるのだろうか．全国学力テストよりもね，それが国民の血税の無駄使いか，プラスになっているかはともかく，それよりも憲法第 26 条の「能力に応じて，ひとしく教育を受ける権利」を保障してくれなければと思いますね．その「能力」が親などの経済的能力よって発揮できないということは，国とか社会にとっても大きな損失になるのではと思うが，どうですか？

池谷：その通りだよ．「こいつは伸びるだろう」と期待していた学生がね，仕送りが少ないからということでアルバイトをする，そして授業中眠っている．しなくても良い学生も「皆がしているから」とか，「先輩も他人との協調性が身につき，社会勉強にもなる」と言ってたからとかで，とにかく学生のバイトは当たり前だからね．そして企業の側も安上がりの学生労働力を搾取している．発展途上国では児童の労働が問題になっているが，日本のこういう社会風潮も大局的に見れば，将来に禍根を残す．とにかく今の学生にはまとまった自由時間がなく，牧さんが先ほど紹介されたように，アルバイトが手帳のスケジュール表をしっかり埋めてるから，授業外で何かをしようと計画を立てても，または「次の授業まで，各班であれこれをしなさい」と指示をしても，皆が集まれる時間がないから非常に困難になる．

牧：池谷さんが言われた通りよ．フィールド・ワークを計画しようとしても，「先生，アルバイトが入っています」で，無理になるの．私の方はそれで，「このバイトを許し，社会が要求する水準の教育を放棄すべきか，それとも妥協せず，学生の今の生活水準を落として，彼女の将来の学力を守るか」，それで悩むのね．

池谷：ドイツの大学は最近ちょっと変わってきたが，数年前まで学費はただで，生活のための奨学金が支給されていたんだ．

江坂：そう，そう，その通り．ドイツ統一直後ちょうどその或る市にいてね，そこの学生部長にその事を聞いたことがあるんだ．奨学金の最高額は確か 800 マルクで，親の収入とか，自宅から通っているかなどの条件でその額が決められるという事だった．それで「その額で，学生は十分な生活を送れるのですか」と尋ねたら，「本とか衣類を買おうと思ったら，ちょっとジョブ（job，英語：日本のアルバイト）をしなければな」．その学生部長とはちょっと懇意だったらか，僕の質問にね，「例えば，私の息子は医学部生で親元から通っているから，X マルクの奨学金で，それでは足りないからと言って，月に 100 マルクほど持って行く」と個人的な具体例を付け加えて下さった．大学のそういう役職者の息子でも，基本的には奨学金だけでやって行けるということだが，そこでちょっとした悪戯心でね，「メルツェーデスの社長の息子だったら，どうなりますか」と聞いたんです．言葉に詰まると思いきや，さすがその役職に就いているだけあって，すぐこう答えられたのには驚きました．「大変少ないだろう．しかし満額もらえる場合がある．例えば自分の跡を継がせようと，親が息子に学部選択などの進路を強制し，さもないと経済的援助をしないという場合，その息子は裁判に訴え，それが認められれば，800 マルクの奨学金が支給される」

牧：それは私が学生の時もらっていた 8000 円と同じか，それ以上ということかしら．私は私学だったけど，池谷さんと江坂さんの学費は年間 6000 円か 1 万円で，そのドイツとほとんど同じ条件だったのでしょう．それが或る首相の「同世代の若者が社会に出て働いているのに，高等教育がその税金で優遇されているのは，如何なるものか」と言うことで，大学で学ぶことは個人的な事にされ，国立大学の授業料が上がり始め，私大の方も同じように…….

池谷：ドイツの大学はほとんどが州立，ところが日本は 8 割が私学という，この違いは大きいと思うよ．日本では国・公立の授業料が上がって，その分が私学助成に回され平等になるかと，そう願った節もあったようだけど，現実はそうならなかった．あの頃は国立が 6 千円で私大が 6 万ぐらいとして 10 倍の差，今では国立は 5，60 万で私学は 100，120 万で 2 倍．この倍率だけ見ると，差は縮まったようだが，年間 5，60 万円の差というのは大きいし，結果的には国立の授業料が上がっただけとも言える．そして今，国立大は法人化され今後どうなることか．これは社会と国民が決めることだけど，教育も教養も決して個人的なものではなく，実に社会的なものだと思うよ．人づくりは「百年の計」なのに，試験の合格率とか就職の結果という目先のことばかりで．

江坂：そういうのも必要だけど，その合格も基礎的学力に裏打ちされたものがなければ，結果は出せないだろうし，その内定をもらっても入ってからが大変だろう．社会の中で自己成長して行

ける教養がなければ，創造力も地頭力もなく，問題を解決し，危機を乗り越えることもできない．それでとにかく上から指示されたマニュアルに従って，「良く分からないが，とにかくそれに黙って従って，力いっぱい頑張ろう！」？

それで思い出したことがあるんだが，小牧のホテルのスナックで睡眠薬代わりに何か飲んでいた時にね，上司が数人の部下を連れて入って来た．その声が指導というか，発破を掛けているのか，とにかく大きな声だったから僕の耳にも届き，その集団は営業課だと僕には判った．「どの会社も同じようなものを作っているのだから，差を出すのは我々営業の仕事に掛かっている．お得意さん訪問の回数を増やせ，新しい客の開拓に走り回れ，自信満々の声で売り込め」などと言う，「力いっぱい頑張れ」式のマニュアルだった．それを聞いていてね，「ああ，この会社に未来はないな」と感じたよ．だって営業マンは，他社の製品と比べて自社の長所と短所を熟知していなくてはならないのに，「どの会社も同じようなものを作っている」という認識では，どうもね．営業マンはね，使ってくれるお客とそれを生産する工場を繋ぐ架け橋になり，その使い勝手とか不都合をお客から聞き出し，それを製造現場に知らせ，改善と開発に積極的に関わらなければ，そしてそのためには色々勉強しなくてはね．僕がその上司だったら，そういう方向で部下を指導する．すると部下の方もきっとその創造的な仕事に魅力を感じ，主体的になってくれると思うよ．それを「どの社も同じ製品」ということで，各営業マンの棒グラフ成績表を壁に張り出し，競争させるだけでは，消耗するだけに終わってしまう．その点トヨタの改善運動は良いと思うが，それを人間的で主体的なものにするためには，先ず社員が自ら教養を身につけることのできる余裕と遊び心がないと駄目だと思うよ．そうでないとこれも単なる消耗戦に終わってしまう．

池谷：トヨタだけではなく，日本の企業は正社員には厳しいノルマを課し，夜遅くまで働かせ，不景気の皺寄せは派遣とか期間工にという具合で，残る者には過労死が，放り出される者には貧困と困窮がで，どちらも地獄．それで精神を病む人が増えている．企業の社会的責任が叫ばれているが，これは年金問題を起こした社会保険庁を先頭に各省庁も，そして大学も含めた教育関係も，つまり日本全体が行き詰まっている，そうとしか思えない危機的状況だと思うよ．江坂さんは「教養の」を前につけて「ルネサンス」という言葉を使われたが，イタリアから出てきた文化運動が後にフランス語で「ルネサンス」(renaissance) と名づけられたのであって，その背後には中世社会の行き詰まりがあったんだよね．

江坂：そう，そう．今の日本と世界の状況がそれに似ている．

池谷：サブ・プライム問題，地球の温暖化と環境問題などを考えるとね，そう思う．

牧：ヨーロッパの社会主義諸国が崩壊し，「アメリカ中心の資本主義が勝った」とネオコンは喜んでいたけれど，「ソ連・社会主義は自滅した」という説もあったわ．今ではアメリカが世界の災いのもとになっている，そういう論調も出て来てるわよね．

江坂：そういうことは念頭におきながら，一応ここでは日本における「教養のルネサンス」ということで話を進めましょう．

池谷さんの話に派遣社員の問題が出ていたけど，この制度は企業にとって都合の良い安全弁で，

製品に対する需要の多少に応じて，その弁を緩めたり閉めたりすれば良いというものですよね．ヨーロッパでは同一価値労働・同一賃金ですが，日本では正社員と派遣では賃金も違えば，昇給や社会保険などの制度も違う．これでは終身雇用で醸し出してきた家族的雰囲気を捨て，さらに社会的正義と責任をも放棄することになるよね．それどころか低賃金と不安定な労働のため，自分が作ったものが買えない層を生み出し，企業側からすれば，それでお客さんを自ら減らすことになる．これは格差が広がれば当然のことで，サブ・プライム問題以前からこの兆候はありましたよ．大型車から軽への乗り換え，そして最近では車そのものが売れなくなり，大幅減産体制への移行，GM などの株価が 3 ドル以下へと急落するという現象に現れてるよ．

牧：そして就職内定の取り消しと，採用枠の絞込みよね．でも社会福祉分野の需要は高齢化の影響で沢山あるんですが，ワーキング・プア（working poor）の職種ですから，ほとんど 3 年ぐらいで辞めてしまうという状況で，働き手の需要が常にあるという訳なんです．それでも残って頑張っている人を私は沢山知っていますし，厚労省が最近介護報酬の改定で，そういう人たちに手厚く報いようとしてますから，彼女たちに少し希望が出てきたんじゃないかな．

池谷：その希望が大きくなると良いですね，グッド・ウィルという会社がやっていたコムスンという会社のような問題もあったけど，福祉は人間らしい「やりがいのある仕事」と言われてるからね．

ところで，そういう小さな希望が芽生える反面で，「この社会はどうなってしまうのか」という不安が大きくなっているよね．そういう状況の中で「教育のルネサンス」を目指すため，克服すべきものとして，小・中・高での教育の問題，センター試験とか全国統一学力テスト，そして大学の試験科目の減少化や AO 入試などが高校教育をゆがめていること，これらはこの鼎談で話題に上って来てきたけど，青田買いの問題とそれに関連した大学の実学化の問題が抜けてたと思う．各社が他社より先に優秀な学生を確保しようと，採用人事がどんどん早期化して，最近では 3 年生が就職活動に走っている．これは大学の教育と研究に大きなマイナスを強いてるよね．10 年ほど前は 4 年生が茶髪を黒髪に染め「リクルート服で身を包み」という姿をよく見かけたけど，今では 3 年から走り出している．

江坂：そうだね．

池谷：それと就職率を高めることに対応して，大学側も短絡的な就職対策になっているし，授業もますます資格取得に対応して実学化しているよね．僕たちの学生時代は 2 年間の教養課程で語学などを学び，専門でそれを使った演習や講義があったが，最近ではその教養や語学が減らされことになった原因はそういうことも関係していると思う．理系の学部では実験が大きな比重を占めているのに，3，4 年生が就職で浮き足立ち，早く内定をもらった者は安心して勉学に身が入らない．そういう学生を採用して，企業は基礎的なことが習得されていない青田買いのマイナスの大きさに気づいて，入社後大学に再入学させるものも出てきたそうだ．最近テレビでそういうのを見たよ，製品開発などを担当させようとした新入社員が基礎的な実験ができないのに驚いて，そうしているというのをね．この企業はそうしたからまだ良いけど，江坂さんが言っていた「差

異」の読めない欠陥卒業生を働かせ，欠陥製品を作って出荷してしまうかも知れない．大学入試で高校生が身を入れて勉強すべき英数国社理などの中から 3 科目とか 0 科目に減らしてしまい，就職試験では大学で学ぶべき 4 年間を 2 年と少々に短縮してなど，このような人材教育をしていて，日本が世界で沈没しないわけはない．3，4 年生が抜けた学生の自主的サークルはもっと危機的で，上・下級生の交わりは 1，2 年生の間だけに狭まり，独自の文化・技術などの受け継ぎと発展を妨げることになっている．

江坂：そうですね，大変危機的状況です．学生たちはまだ若いのだから，まだ 50，60 年も生きて行かなければならないのに，自己成長できる教養を身に付けて卒業できるだろうか．読書をしている学生はあまり見かけないし，彼らの読解力のなさを日常的に教室で感じますし，レポートや試験の答案を読みますと，文章力の衰えを感じますよね．数学というより算数の問題ができない学生も多くいますよ．その応用問題の解答欄を白紙で提出した女子学生にね，「こんな簡単な問題がどうしてできなかったの」と聞いたら，「式を解くのは練習させられましたが，こういうのは頭の中が真っ白になって……」，という答えが返ってきました．ある男子学生が「数学は式を暗記して，それを当てはめれば良い」と教わりましたと言うのを聞いて，僕は小学校で九九を暗誦させられた時のことを思い出しました．例えばコインが 2 枚あるとしても，実際はいつも 1＋1＝2 とはならない．それが 1 円玉と 100 円玉だったら，それ以外に 1＋100＝101 ともなる．しかし 2 枚落ちていたら，誰でも 100 円玉の方を先に拾い，白紙と 1 円玉だったら，1 円の方を拾う．何かメモしたいとか，障子の穴を塞ぎたい時は紙の方がずっと重要なのにね．その時の必要な視点で現実を見て考えることが重要なのに，その現実と数学という人類の英知を繋げる基本が疎かにされている現状，人と人を繋ぐ言語能力が衰えている現在，これこそ社会と人間的教養の危機だと思います．

個々人を繋ぐ教養

江坂：そこで最後に，社会を構成している「個々人を繋ぐ教養」について話し合いたいと思います．もちろん人間は社会の中でしか生きられないのですから，前に話し合った「社会という場での教養」と同じではないかと思われるかもしれませんが，これまでの話では，班とかグループで自主的に勉強できないとか，学生同士で議論して決められず，じゃんけんとか先生に頼るとか，マニュアルを求めてくる，そういう話がよく出て来ましたし，それからイジメの問題もちらほらとね．これまでの話では「教養」(Bildung) を社会の中で個人が個人として自己成長して行くこと，またはそのために必要な基礎的学力として話題になっていたように思うのですが，その個人と個人を繋ぐものが希薄になっているように感じられましたので，こういう副タイトルで終わりを飾りたいと思うのですが，……

では僕より始めるとして，僕の幼年時代，あの頃はどの家にも子どもが 3，4 人，今は．合計特殊出生率が 1.3 を切っている．当時はおじいさん，おばあさんと同居の大家族，親戚は同じ村

か，近隣に散らばっていて，それで隣近所と同じように日常的な付き合いとか助け合いがあったよね．今は核家族と独身一人住まいが主流で，盆・正月の帰省には新幹線や飛行機で里帰りと，随分違ってるよね．子どもが少ないから兄弟げんかもできない，当時は小学校にクラブやサークルなどなかったから，村のガキ大将が神社などの広場に低学年の小さい子を集め，鬼ごっこなどの遊びを仕切ってたが，今ではテレビやゲーム，漫画や携帯と何でもありで，いじめまである．あの頃そういうものはなかったから，皆で遊ぶしかなかった．そういう幼年時代の影響からか，中・高時代には友達の家に集まって一緒に試験勉強したり，教え，教えられの関係が日常的にあった．

大学時代はヴェトナム戦争と沖縄返還問題そして大学紛争で，とにかくクラスや研究室の皆で色々やっていた．今の学生達の友情関係は随分変わっていると思うんだ．というのはね，そういう自主的な関係がどうもできそうもないから，こちらから班という器だけは作らせるのだが，中にはやるのもいるが，なかなか…….

池谷：それには２つ原因があってね，一つはそういう経験をしたことがないからだと思う．例えば自分たちで計画を立てて，キャンプに行くのでも何でもいいんだけど，１年生の学生に大学に入る前にゼミらしきものをやった経験があるかと聞いたら，一人いただけで，新入生のほとんどはやったことがない．だからどうして良いか分からないというのが一つの原因．それからもう一つは，これは福祉大の学生に特徴的なのかどうなのか分からないけど，生活がある意味ではバイトを前提とした生活になってきている．これにはもちろん貧困の問題と係わる面もあるだろうけど，他面ではバイトで生活をしていくということが学生生活の前提になってしまっている．だからバイトに行きながら学校に顔を出すという，かつて数年前にいわれた高校生の状況が大学生にも出てきている．いわゆる偏差値の低い職業高校では，バイトをやって，ついでに学校に行くっていうことが言われてた．今は大学でもそういう風になって来てる．だから学生はすごく忙しい．要は時間が物理的に持てないんだ．

江坂：だから１週間の時間表を書き，その空欄に参加できる自分の名前を書かせ，その時間帯ごとを班にして，班長を決めさせたら，学生はジャンケンで決めるんだよ．ドイツ語の作文問題を「班でやって出しなさい．その際そこに参加した学生の署名を添えて提出すること」で，最初は各班ごとに出揃うが，だんだん少なくなって，さらにその共同勉強への参加状況は分からない．その中身の濃さは前期の試験で把握できるが，全体として尻すぼみだね．

牧：そういうのは何回か経験しないとね．民主主義という言葉以前の問題で，集団で話し合って物事を決めるというのは比較的幼い頃から，そして小・中・高と質を高めながらね，そういう経験の積み重ねの中で自分の意見を出せるようになり，きちんとした言葉と内容の充実した意見表明とかプレゼン能力とかが身につくのよ．だから大事なのはね，小さな集団とかグループでも良い，サークルとか他の仲間同士でも良い，とにかくね「ああでもない」，「こうでもない」と言って何かを決めていくのは楽しいという経験，これがとっても大切なのよ．その時は摩擦とか，ひょっとしたら喧嘩も起こるかも知れんから，多少しんどいけど，後になって考えると，「あれが良かっ

たな」となるのよ．これは兄弟や夫婦が喧嘩をしながら，絆を深めてゆくのと同じよ．それをしていないと言うことは，学生を見ていると，すごくよく分かる．そういう経験がないまま大学に来てしまったので，やっぱり受け身になるんですよ．

江坂：そういう人間関係がないまま？

牧：子どもたちだけの関係よね，それが私は重要だと思うの．隙間というか，大人が見てない所での遊び場，隠れ家，そういうものが無くされているのではと思うの．私たちは親のいない所で遊んでたでしょ．親が見てないなら，悪い事しても叱られなかった．でも今の大人は忙しい人達も含めて，何か管理してるっていうか，「うちの子は」って結構見てますよ．子供のことを結構把握してるもんね．塾に行かせて「何々してる」とか，友達関係も「あの子と，あの子と，あの子はグループだ」とかね．私，自分の子どものころは知らなかったけど，今では学校はもちろんだけど，親からも色んな所で見られてるというか，何か本当に変な意味で管理されているという感じがしますよ．親がお友達を選ぶというご時勢になってしまって，変な事とか，悪さとかができる隙間が無かったら，友達同士で腹を割って話し合おうなんていう事はできないのでは，そう思うわ．私が今の大学 4 年生に「何々しよう」って言っても，「先生，どう思う」って，未だに聞くからね．「こんなのどう」と提案すると，「それは先生がしたいの」．それで「あなた達は何がしたいの」，「いや，別に」という感じだからね．

池谷：やっぱり「出る杭は打たれる」という恐れがものすごく強いんだよ．

牧：「出過ぎれば，打たれない」のにね，リーダーになるのを嫌がるのね．

池谷：そう，表に立つことがね．

牧：目立つ事を嫌がるのね．

池谷：皆からイジメられたりするから．

江坂：僕には，そのイジメというのが，よく分からないな．

池谷：それは，僕らが考える以上に，もう深刻だよ．

牧：大学の方は，まだ少ないでしょ？

池谷：大学にもありますよ．「いじられキャラ」とか，「いじりキャラ」とか．イジメすれすれの状況が起こっている．

牧：ちょっと違うとイジメられる．

池谷：学級委員長とか，そういう学校の表組織の上にいる子はイジメられる可能性がある．

江坂：僕の時代は特別尊敬の的でもなかったけど，イジメの対象でも何でもなかった．

牧：あの当時はね．

池谷：勉強ができる奴にはね．かつて僕なんかもそうだった．中学校時代にいわゆる「不良」はいたけど，彼は僕らには手を出さなかった．それなりに勉強ができる奴には一目置いてるわけ．

江坂：勉強だけではなく，運動とか遊びでも，とにかく何でも抜きん出ているものには一目置いていたよ．

牧：そうそう，一目置いていたわよ．それが無くなったよね．

池谷：今の学生は上にちょっと出て，目立つってことになると，何かイジメられたりするから，なるべく目立たないようにしている．

江坂：何でイジメるのかな．僕らの頃は皆それぞれ得手・不得手があって，それで皆で一目置き合っていた．小さくっても作文がうまい子もいたし，勉強ができなくても，魚を釣るのが得意なとか，「かっちん玉」の上手なのがいた．

牧：それって，何？

江坂：僕の村ではそう呼んでいたが，ビー玉？とにかくラムネのビンの栓として使われていたガラス玉のことでね，それに色々な色で模様のついているのもあったが，それを順番に当て合って，相手のを当てたら，自分のものになる，そういう子供の取り合い遊び．僕は彼にいつも取られる方で，彼は僕の「お師匠さん」だった．その技を真似ながら盗んでと頑張ったが，彼はいつも僕の上を行っていた．それで学校から家に帰って弟たちとやって，その仇を取る．

池谷：それはいじめじゃないの？（笑）

江坂：はっはっ，は．いや，遊びだよ．弟から「かっちん玉」を取っても，奪い尽くしたら遊べなくなるから分けてやって，兄弟仲良くまた遊びの再開，それで遊びのルールと「お師匠さん」の技が兄貴経由で弟たちに伝わる．

池谷：なるほど，とにかく今の子はリーダーになりたがらない．

江坂：僕の小・中学校は田舎だったからか，池谷さんの言う「不良」はいなかったな．でも小学校ではね，すぐ暴れる奴が 2，3 人いた．彼らは僕たちには手を出さなかったが，彼ら同士で突然，掃除の箒とか椅子を武器に喧嘩が始まり，流血に至ったこともあった．どうしてそうなったのか，僕には全く分からなかったが，小学校卒業後のクラス会で招待した先生がその一つの原因をそっと語ってくれました．日本人の彼は戦争で親を亡くしていて，親戚のお婆さんの所で世話になってたが，時にはお寺の床下で寝ていたりしてたそうだ．当時の小学校では今のような給食はなく，僕は毎日「日の丸」弁当でしたが，彼はそれさえも持たせてもらえず，昼食の時間になると教室を抜け出し，校庭の木の下でグーグー鳴るお腹を押さえながら，悔しい時間を過ごしていたそうだ．彼は 6 年生で突然いなくなったんだが，確か広島の施設に送られたと聞いていたから，ひょっとしたら原爆で両親を亡くしていたのかもしれないね．教え子の一人が施設送りになってしまった当時の事を思い出したのか，先生はそっと目頭を押さえていらっしゃった．他の二人はね，これも後で知らされたことなんだが，朝鮮から来た家の子でした．きっと差別の鬱憤が何かの拍子でね，彼とその二人の間で暴力沙汰になったんだと思う．だから暴力が生まれるには，何か社会的な原因があるんだよね．

牧：そう，同じ田舎でもそんな悲しい現実があったのですね……．私も高知の田舎出よ．両親は大阪で花屋をしてたのですが，戦争の空襲で焼き出され，高知に帰ってきて，いずれ大阪に戻ろうと思ってたのに，そこにはもう戻る場所が無くなっていたそうなの．一家を支えるべき男として妻の田舎に帰らざるをえなかった父は，母の親戚のおばちゃん達とは話しづらかったのでしょうね．それで父は新聞を読むのが好きで，娘の私が話し相手として選ばれたようで，私は随分そ

の相手をしてたようでしたわ．とにかく父は人と喋りたいわけで，近所の人たちとか，よそ者とは仲良くなるんだけどね．母の親戚とは話しづらかったのでしょうね，母が後で「お父ちゃん，あんたが好きだったから，よく喋ってた」と話してくれたわ．父はそれで読んでたのかしら，その新聞を父につられて私も小学生で読んでました．娘が相手なのに，「社会党の市長になった」とか，そういう新聞ダネを話の種に政治批判を吹っかけてくるのよ．父はもともと尾道の人なので，よく法事なんかでついて行ってたけど，その時もそこに集まった人たちとの会話に入れなかった，そういう父親の姿が思い出されるわ．父は男として故郷に錦を飾れず，妻の所で不甲斐ないと思っていたのでしょうね，それで父親としての人生を娘の私に語ってくれなかったんかと思い出されるわ．

江坂：牧さんは小学生でもう新聞を読んでいたとは，すごいですね．僕にとって新聞はアルミの弁当箱を包むもの，家に持ち帰れば風呂や煮炊きの付け火ように使っていた．新聞を読むようになったのは大学生になってからかな．

牧：当時はその新聞以外漫画も何もなかったからね．そんな私の田舎に戦争で疎開されて来られたのか，その後の財閥解体でか，それは分かりませんが，私のいた高知の田舎に三菱かどこかの財閥で偉くなってた人がね，青山学院大学出の奥さんたちを連れて帰って来ていて，その人たちがクリスチャンだったの．それは田舎では珍しく稀なものよ．その家が塩の専売所をやっていて，結構広くてね，一部を開放して毎週日曜学校をやってくれていたんですよ．私は 4，5 歳ぐらいからそこに通い初めましたね．田舎の私に違った精神的な影響を与えてくれたのは，ああいう小母ちゃん達やなと思い出しますね．そこで毎週「エルサレムの丘」とかの話をね，洗脳するという訳ではなく話していたの．「キリスト様っていうのはこうで，マリア様はこうで」とね，子どもに分かりやすくね．あの戦争がなければ，ああいう上流の人達は田舎に帰って来ないでしょ？東京で良い生活していた人達がたまたま帰って来て，私たち田舎の子どもの教育をしてくれたのね．そこでお昼をご馳走になるとか，ちょっとハイカラな物を見せられたりとかで，子どもながら珍しい，好奇心をそそってくれるから，母親には「あんた，あそこにばっかり行って，あそこの影響を受けて」と嫌がられましたが，私は高校 3 年まで毎週ずっと「教会」というところに通っていましたね．そこで私はキリスト教の小母さんから外国の話を聞いてたから，海外への憧れとか，都会への憧れを抱いたと思うわ．両親が若い頃に大阪にいたという事にも影響されてか，とにかく田舎は皆大学なんてお金があっても行かせたがらない，せいぜい「四国の中に収まれ」，「高知市内で収まってくれるのが一番いい」という雰囲気でしたのに，私にはそういう壁がなく，あまり深い意識もなかったのは，世界は広い，都会に行くと何か楽しい事があるという印象をそこからもらったのかな．それで娘の頃にね，「高知市に絵画展や映画を見に行きたい」と言ったら，親に「女の子が一人で都会に行ってはいかん」と反対され，弟をおぶって電車に乗って観に行ったの．

池谷，江坂：はっはっ，は．確かに背中に男はいるが．

牧：どうしても行きたかったのよ．子どもの頃から培ったそういう気持ちも，あの敗戦という時

代の影響と地域の力によって創られているんですね．それに私の村は小さかったから，複式学級とか隣町との統廃合があったりで，何十年か経ってね，その学校が消えたということが，たまたま読んだ高知県教職員組合の出した本にちゃんと出ていましたよ．だから余り小さ過ぎる所にいると，そういう危険性もあるということも何となく感じてたわね．

江坂：その学校の統廃合といえば，現在少子化で全国的に問題になっていますね．そのなかでも夕張市は財政が破綻して，学校だけでなく病院までもという状況ですよね．その市は石炭がエネルギーの供給源であった時代に，炭鉱で栄えていたのですが，石油や原子力に取って代わられ，廃坑になり，若い働き手は職を求めて町を去り，人口減と高齢化の町になってしまいました．そういう産業の移り変わりが家庭や地域を変化させて来たというか，壊してきた．僕は牧さんと同じ田舎育ちですから，今振り返ってみると，その違いがよく分かりますよ．農業というのは一家総出の，さらに農業用水の管理などで，地域全体が支える産業なんですよ．子どもには稲の束を縛る〈すげ〉を作る仕事が冬にあり，それが 50 本 1 束で 10 円のお駄賃になり，それを貯めて秋のお祭りの出店でね，綿菓子や玩具などを買うのが楽しみでしたよ．お爺さんやお婆さんにも地域のお付き合いや孫のお守り，軽い畑作業など年寄りに相応しい仕事がちゃんとありましたよ．

その後次男三男は都会に出て会社などに勤め，長男は両親と家を継ぎ兼業農家となるか，離農した家の農地を借り受け専業農家になる．もちろんそれを可能にしたのは農具の革新で，人力による鍬や鎌から牛が引く鋤に，そして耕運機からトラクターへと移り変わり，一人で広い農地を耕すことができるようになったことですが，今ではその農業を担う若い後継者が少なくなり，お年寄りに任されていますよね．

牧：それで，都会に出たのは，男の子だけではないですよ．彼がいなくなってしまえば，彼女の方は嫁入り先が減るんですから，都会に出る．これが家と夫からの女性の解放と自立に繋がった，そういう側面はありますが…….

江坂：そうだね．そういう波は経済だけでなく，そういう人間関係にまで広がっている．農業だけでなく，漁業などの第一次産業は同じような状況になっていますよね．

昔は子どもが学校から帰れば，家にはお母さんやお婆さんがいました．その後核家族化と共稼ぎが進み，「鍵っ子」が一時問題になりましたが，今では学童保育とか塾通いで，家庭というものが急激に変化し，親子の関係も随分薄くなっているように思えますね．僕は鎌の使い方から始まり一年間の農作業はすべて教えられましたが，今では親から子への生計の糧となる技術の伝授は，家元制度が健全に残っているお茶とか，歌舞伎ぐらいではないでしょうか．僕は鎌とか鍬を使う親の手さばきとか，足の動かし方の上手さに感心していましたが，その後「子は親の背を見て育つ」と変わり，今では何で育っているのか分からない．テレビとかゲームのヒーローからか，ゲーム機を鮮やかに扱う友達の指さばきか，またはお金を払えば裏技を伝授してくれるゲームの解説本によってでしょうかね．今日では遊び相手はコンピュータ，人間関係は携帯の中継によってですよね．あの頃の遊びは，先ず自分たちで薮や林から竹や木を切り出して，ピストルとか木刀を作ってね，ちゃんばらで木の枝を振り回し，赤胴鈴之助になり切っていた．木とか竹の陰に

隠れての撃ち合いは竹筒のピストルで，弾の木の実をその筒に詰めて，圧縮空気の力でポンと撃って遊びましたよ，田舎の僕らはね．母の裁縫箱から失敬した糸を竹に結びつけ，釣竿を作ってね，先ずそういう道具を作るところから始まりましたよ．その武器を手に森の探検に出かけ，色んな珍しい戦利品を持ち帰ったりとか，蛙を餌にザリガニを釣り上げ，それを鶏の餌にして，産ませた卵を売りに行きましたよ．現代っ子はそういう自然のなかで，皆と工夫しながら遊ぶという創造的な楽しさから離れ，大人が作ったゲームの虚構と幻想の世界に引き込まれ，逆に遊ばれてる，そういう感じがしますよね．

僕は文学をやっていますから，もちろん虚構と幻想も必要だと思うけど，その育ての親である現実の自然と社会との濃密な付き合いがなければ，変なことになると思うよ．木登りの遊びで落ちて，自分がスパーマンでないことを，痛い思をして初めて知らされ，落ちないようにするには片方の手でしっかり枝を握っていること，さらに足の位置や重心の掛け方にも初めて注意するようになる．それでこの経験が後でね，万有引力を物理で習う時に，まさに身を持って理解に導いてくれる．

池谷：そういう子供同士で遊ぶとか，自然の中のキャンプ体験は重要だと思うよ．ところで「家庭の教育力」の低下が問題などとよく言われるけど，しばらく前までの日本では家庭の教育力はさほどなかったんだよ．1950 年代ごろまであったのは地域の教育力で，家庭じゃなかった．子どもの手伝い，それは家庭の教育力という訳じゃないんだ．家族も地域に組み込まれているし，地域でみんなが協力しなきゃいけないという事で，地域自体がお互いにね，良い意味での「看視」を子どもに差別なしでし合っていた．色々な調査研究も今出ているから，それを読んでもらったら良いけど，例えば，広田照幸の『日本人のしつけは衰退したか ――「教育する家族」のゆくえ』(講談社現代新書)，そこではね，家庭に教育力があったわけではなく，むしろそれは地域の共同体の中に「労働のしつけ」としてあった，そして学校が求める「学力」と地域が子どもに期待するものとは別物であったことが，なかなか説得的に書かれているよ．

牧：子どもに色々教えなければという意識が親にあまり無かったの？

池谷：そうそう．

江坂：僕は田んぼと林の中の一軒家で，自然の中で充足していたからね，地域の教育力なんて言われても余りピンと来ないけど，そういえば夏の暑さから逃げようと，小川に飛び込み，泥水の中で泳いでいたら，知らない農作業の大人に叱られたことが思い出されるな．子どもたち同士の遊びも，兄弟だけで遊んでいた僕にはあまり縁がなかった．

牧：江坂さんが育った環境は特別としても，お二人は戦後になって，子どもがどんどん生まれる段階の世代でしょう．私の頃は子どもが少なくってね，だから 1，2 年下のベビィ・ブームの子たちに，すぐ後ろからウワーッと押し寄せられたという記憶が未だにあるのよ．彼らは団塊の世代だけでなく競争の世代，ところが私たちは競争を知らない唯一の世代で，同じ年ごろ同士にはそういう意識は全くなく，逆に少人数やけど仲良くしよう，人間競争しても仕方ない，自分に勝つしかない，そんな意識が未だに続いてるわ．そういう私たちと違って，次の世代は競争で，他

人より良い所へ，もっと良い所へ，人よりも偏差値をより高く，より高くとね，そう色彩が強くなってたような，

江坂：なるほど牧さんの世代から見れば，僕と池谷さんは他人との競争の世代に属することになるのか．確かに競争意識を起こさせるように，中学から早くも実力テストの結果をね，順番と氏名そして点数を表にして廊下に張り出していたが，僕のグループはあまり意識せずに，仲良く教え合ったりしてたよ．でも，その順番表に影響されたのか，猛勉強でグングン成績を伸ばしてきたが，病気になって，急落したという生徒がいたということも耳にしたよ．それが噂どおり，彼の病気の切っ掛けになっていたとしたら，一体何のための競争かですよね．

それに対して先ほど牧さんが言われた「自分に勝つ」という克己の精神，それこそが教養という自己成長の精神だと思うよ．ゲーテの『ファウスト』の話は自己満足して，無益に寝そべって日々を過ごそうとしたら，人間として終わりだという所から始まる．そして人類の究極の精神にまで，自己を高めようとするのだが，それは自由な個々人の「一致協同」の精神なのだと悟り，それが実現した光景を夢想してね，「止まれ，お前は実に美しい」と満足して，亡くなるんです．

牧：そのファウストは自己満足したから死んだの，それとも満足して死んだの？

江坂：量として限りある生と，その質の問題だから，それは人間の永遠の問題でしょうね．ところで牧さんの言われた偏差値とか，「もっと良い所へ」というのは世間的な量を測る物差しで，しかもある一つの物差しでしかない，それは確かだよね．その物差しが変わったら，あっと言う間にその量も変わって，ひどい場合にはプラスからマイナスにね．それに較べたら，皆で「自分に勝つ」という克己の精神は，「一致協同」という理念にまで自己を成長させるのだから，質の問題で，最近使い古されて，手垢がついてしまった感があるが，「品格」の問題だよね．

牧：その「一致協同」って，生協と社会福祉の精神ですが，それを具体化し，実現するのが大変なの．北欧を先陣にヨーロッパでは福祉社会を創ろうとしてるのに，日本はどちらかと言うと，アメリカ流の「自己責任論」で，格差社会に傾いているわ．

歴代の政府と自治体は800兆円という借金を抱え，そういう社会が作りだした下層の弱者も仲良く社会のみんなの「一致協同」の精神で助け合わねばと思うのに，都会の高齢者は高層マンションで，地方の老人は農業とか林業で，地べたに這うように，細々と暮らしてるのに，その予算を削って，削り過ぎて，参議院選で負け，それで今はアメリカのサブ・プライム問題と目前の選挙のために，また財政出動でしょう．「それで，どうなるの」って，そんな感じですよね．

日本の社会福祉の最大問題は少子高齢化よ．老人は老人で老後に安心できない，若者は若者で結婚して，安心して子どもが育てられる社会になってない．老人になった時，払い込んだだけの年金は受け取れない．それは分かってるけど，給料から天引きされるから，「しょうがない．何に使われるか知らないけど，税金を払っていると考えるしかない」，そういう諦めの境地ですよ．

田舎では都会に若者がどんどん出て行き，老人ばかりが残って，働いても貧しい，その田舎出の若者と，東京・大阪で落ちこぼれた若い子たちがね，ネット・カフェで同居してる．都会でも田舎でもワーキング・プア問題がひどくなってる．

池谷：このワーキング・プアの問題はね，若者と社会とのつながりに係わる問題にもつながっているね．さっき話していた学生のね，仲間とかマニュアルから外れることに不安を抱くということにも係わる．僕たち大人は，「社会との接点を求めなければ」と考えるが，今の若い人たちのなかに強烈に出てきてるのは「社会からもう降りている」という意識，あるいは「引きこもって自分を守りたい」というような意識，これがかなり出てきている．その底流には「自己防衛の意識」があるように思われる．それは，一つには友だち関係の問題で，空気が読めなかったりすると，はじかれてしまう．もう一つは大きな社会との関係で，若者は社会との接触に対しても大きな不安を抱えているが，これは若者が何か事件を起こすと「今の若者はこうだ」と断定して，若者をバッシングする傾向がそうさせている．だから，これは大人社会の問題なんだ．こういう大人と子どもの関係は，これまでも同じように繰り返されてきたのだろうけど，

江坂：そう言えば昔はね，例えば父親が子どもを殴ると，母親がそっとかばったり，お爺さんやお婆さんが「お前の子どもの頃に良く似とる，やっぱりお前の子だなあ」と叱られた子どもに逃げ場を作ってくれていた．地域でもよその子に畑の瓜が食べられても，「うちの子もどこかで同じような事をしているだろう」と，それほど目くじらを立てなかった．つまり，同じ地域の子という意識があった．夏目漱石の『坊ちゃん』が農家の命ともいえる水利施設の穴を詰めてしまって，怒鳴られたというような記述が確かあったが，その作品では子どもの悪戯という笑いで包まれているよ．ところが今では農家の目もサラリーマンの子などをね，昔のように同じ地域の子とは思えなくなってきた．消費者と生産者の間に商業が深く入ってきて，農作物は商品になってしまったんだ．昔は農機具の鍬とか備中が壊れると，村の鍛冶屋さんに直してもらっていたが，今ではどこかの工場で造られた耕運機やトラクターを流通業から購入し，修理も知らない人が部品を交換して，「ハイ，X 万円也」．かつては人の顔が見えていたが，今の社会では人間関係が疎遠なものになっている．消費者と生産者の間にできたそう言うよそよそしいものを克服し，信頼関係で結ぼうという運動，例えば産地直通で購入するとか，生産者の顔が見えるように工夫するとか，そういう動きが出ている反面，偽の飛騨牛で儲けるとか，工業米を食用として流通させる錬金術と，それを見抜けなかった監督官庁の問題が出てきている．

池谷：そういう新しい問題も起こってきて，それはそれで深刻だけど，社会と若者の関係に話を戻すとね，大人側からの「今の若者は……」というバッシングがね，昔は家庭内とか地域内に止まっていたけど，今ではテレビや新聞というマスコミで全国に流され，政治家や専門家とかが加わりキャンペーンを繰り広げる，そういう傾向がかなり強烈に出てきていると思う．

2，30 年ほど前に，鉛筆を削るために持っていたナイフで傷害事件が起きたよね．その生徒間で「どうして，そうなったのか」という原因究明から，また「人を傷つけることに道具を使ってはいけない」というしつけの問題から目が逸らされ，いつの間にか「ナイフを持たせていけない」という事になってしまった．それで子どもたちが鉛筆を削ることで獲得していた手の器用さが失われてしまったという嘆きが漏らされたが，それは後の祭りとなってしまった．

若者の間での携帯の使われ方には問題もあるが，今日では「出会い系サイト」の問題で同じよ

うな事が繰り返されている．その問題を作っている大人の側の問題がキャンペーン化されるのではなく，若者の方を取り締まるとか携帯否定の方向でいつの間にか落ち着いてしまう．しかし携帯とかインター・ネットそのものを否定することは社会的に難しいことは明らかで，それで儲けるために子どもや若者に使わせている業者という大人の問題はいつの間にか等閑視されている．

ワーキング・プアの問題とかネット・カフェ難民の問題も同じで，ああいう層を作ってきたという事の責任は大人の社会にあるわけでしょ？そういう意味で言うと，若者たちが社会に入って来る時に，彼らを支えていく仕組みが完全に失われているという問題があるよね．

これはかなり議論になるかと思うけど，1990 年代以前の日本では，どこが若者を大人にして来たかと言うと，良くも悪くも会社だったんだよね．つまり，金の卵として集団就職してきた若者を企業の先輩たちが家族同様に面倒を見て，彼らに技を伝えて行く，彼らの方は技を真似て学んで行くという形で技術を身につける，そういう関係のなかで一人前の大人に成長して来た．ところが今は，「雇用の流動化」の名のもとで，大企業はその雇用・研修システムをほとんど捨ててしまって，研修もまともにやらないし，企業内の福利厚生もどんどん削って行く．

江坂：それで，すぐ社会で役に立つ完成された者を中高そして大学にまで求めている．青田買いの問題は先ほど議論したから省きますが，大学の特に基礎研究と研究者養成という社会的な任務が疎かにされ，すぐに役立つ目先だけの研究に忙殺されることになる．これは長い目で見れば，企業・社会にとっても大きな損失になると思うよ．結果として不完全な「完成者」が社会に出て，結局マニュアル人間として機械的に使われる．

池谷：ではそのシステムが潰れたとき日本の社会にね，彼ら若者の色々な紆余曲折の人生や，挫折後のやり直しを保障できる，何かそういう代替システムがあるかと言うと，実はそういう社会保障はほとんど皆無と言って良い．若者の自立を長い目で支え，後押しするようなシステムをこれまで日本の社会は自覚的に作ってこなかった．だから結局，親にパラサイトするしかない．寄生できる親がいる者はまだ良いけど，それもない若者にはもう何もない，これが日本の現状だよ．

パラサイトできる親がいたとしても，ずっと一緒にいたら，考え方も違うし，性的な欲求だって違うわけだから，親子間でも色々なが出てくるし，葛藤も起きてくる．最近親殺しが増えている一因もそこにあると思う．でも，そういう彼らを家庭から押し出して，社会へと繋げて行くことができるような多様な道筋がない．この問題をきちっと押さえて置かないといけない．その上で社会との繋がりという問題をどう考えるか，あるいは若者が社会と関わりあって行ける仕組みをどう大人の側が作って行くのかという問題があると思うんだよね．

江坂：産業の変遷は夕張市だけの問題ではなく，どの時代でも全国どこでも起こっている．IT 革命と騒がれ，情報産業が持てはやされたのはつい最近だったと思うが，もう衰退産業になってしまった．

戦後東大生の人気就職先が石炭産業で，その後石油関係とか繊維産業などに代わって行ったということをね，どこかの本で読んだことがあるんだが，この産業の変遷に翻弄されながらも，最初炭鉱に勤めた彼らも流れに乗りながら，自己変革し生長して来たんだと思う．そうでなかった

ら，みんな脱落者になったでしょう．そういう変遷を乗り越えて，新しい分野でも自己成長できる力が教養だと思うのだが，果たして現在の社会の中で若者はそれを獲得しているのだろうかと，心配になる場面が多いね．

そう思わされるのは，例えばマニュアル言葉に接した時，次に何か購入する際にその品について尋ねると，その店員が自分の売っている商品についての無知をさらけ出した場合だが，こういう場合が最近多くなっている．僕の相手をしてくれたのが若いアルバイトかパートで，そのため勤労意欲が湧かず，そうなっているのかも知れないが，それが中年以上の人となると随分違うよ．それなりに自分が理解している範囲で応え，分からないことは同僚とか上司に尋ねてくれますからね．ところが若者からは好奇心とか探究心が余り感じられず，池谷さんが言ったように「社会からもう降りている」，または「自分の殻の中に閉じこもっている」，そして人間として死んでいるように思われる者もいるからね．

牧：江坂さんの話を聞いていて思い出したんですが，子どもは全くその逆ですよ．小さな孫のお守りをしていると，その子は小さな手で刃物や熱湯の入ったやかんを掴もうとしたり，何でも口に入れようとして，危なくて少しも気を緩められませんね．それ以外は自由にさせているのですが，大人から見たら余計なこと，どうでも良いようなことにも興味を示し，あれは本当に好奇心の塊ですね．そうしながら周りのものを認識し，自分との関係を創ろうとしているのでしょうね．よちよち歩きを始め，外に出られるようになると，手を繋いで歩いていても，わき見をして道草を食うというか，すぐ道端のものに手を伸ばそうとします．見ていると，面白いですよ．

江坂：僕も子どもの頃よくやったが，道草っていうのは重要ですよ．日常性の主体的打破であり，冒険でもあり，それで自分が大きくなる．

池谷：その歩くということ，これは多分今でも科学的に解明されていないと思うんだけど，なぜ赤ちゃんが歩くのか，あるいは人類はなぜ二足歩行したのかというのはね，意外と学問的・科学的に解明されてないんだ．

牧：でも，歩くんですよね？

池谷：ただ分かったことは何かって言うとね，赤ちゃんや人類は歩きたいと思ったと言うこと．

牧：それはやっぱり見本を見てでしょう？

池谷：そうそう．最初の人類にそうさせた見本は何か分からないが，その後は彼がそして現代では，大人達が歩いているのを見て，赤ちゃんも自分で歩きたいなと思って……，どうもそれしか理由がない．

牧：子どもは好奇心の塊だから，すぐ真似をする．

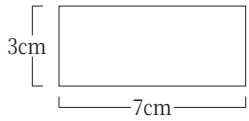
池谷：それが大学生ぐらいになってくると，好奇心は特に何も無くなってしまう．

江坂：その前に二足歩行ができる形態の問題があると思うよ．人間の子どもは歩きたいと思って歩けるようになるが，家で飼われている猫は歩けない．

池谷：それはもちろん身体的構造の問題があるからだが，人間の二足歩行の原因を探って行くと，最終的な所では，「歩きたいから立ち上がった」のだと言う結論しか出ない．

江坂：なるほど．『狼に育てられた子』（福村出版）にはね，その子どもはある程度の年齢になって発見されたからか，すでに狼の歩き方を既に身につけてしまって，ところが形態的発達が狼と人間の子は違うから，変な四足歩行しかできなかった，そう書かれていた．発達過程の或る段階を過ぎると，もう体の形態が固定してしまい，人間の二足歩行はもう無理だったようだ．生まれたてのアヒルの子を親から離し，傍で玩具を動かして育てると，その玩具を親だと思ってか，ついていくという「刷り込み論」があるよね．人間の子というのは未完成で生まれ，環境の中で刷り込まれながら発達し，固定化して行くのではないかとね，その狼・人間の報告書を読んでそう考えた．もちろんそれは僕の勝手な推量だけどね，人間の子が思春期に至る年齢は他の動物と較べて随分遅く，大人になるには随分ゆっくりで，その間に大人社会との交わりの中でだんだんと自己成長して行くのだと思う．その間の自由な発達過程を無視し，本質とか基礎を本人が理解するまで待たずに，型にはめる教育をすると変になるのではないかと思う．

算数問題例小 4



この長方形のまわりの長さは，次のどれですか

① 7cm　③20cm
②10cm　④21cm

正答：③

順位	国・地域名	正答率
①	シンガポール	92%
②	カザフスタン	80
③	台湾	78
国際平均値		51
㉗	日本	34

（日本は④の解答が多く，面積を問われているとの勘違いが多かったとみられる）

例えば今年（2008）12 月 10 日付の朝日新聞で，昨年実施された国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）の小 4 年の結果が紹介（図参照）されている．この算数全体としては 59 カ国・地域中第 4 位だが，上の問題では第 27 位で正解率は 34%と低い．これは市販のドリルを利用して，計算式を早く解く練習ばかりさせ，その式の意味とか基本を無視してしまった結果，そして実際の生活のなかで数学的に考えるという視点が育てられていないことの証拠ではないかと思うよ．だって，この問題文は長方形の周辺の長さを尋ねているのに，日本の小学生はそれを考えずに，3 と 7 という数字を見ただけで，その掛け算をして面積を出しているからね．こういう基本を身に付けないまま入学して来るから，学生にテキストや新聞記事に出てくる数字を利用して問題を出すと，「式を解くのは習いましたが，こういう応用問題はどうして良いか分かりません」という答えが返ってくる．この状況に気づかず，大学でまたマニュアル式の教育を続けたら恐ろしい事になる．ウランを入れたバケツを運んでいる自分が何をしているのか分からないから，「上司の命」というマニュアルに従って動くしかない．そして連鎖反応を起こさせてしまうことになる，その可能性が日本中で秘められている，この現状は恐ろしいと思うよ．

ところで，池谷さんが先日話してくれた「ベテラン看護師」の話，実に面白かったから，ここで紹介してもらえませんか．

池谷：今から話すベテラン看護師になるためには，江坂さんが今紹介してくれた数学的頭脳は当然持っていないと駄目だと思うよ．看護師さんの知識や学習の発達についていくつか研究した本

があるけど，学習の結果最終的にたどり着くのは何かって言うと「勘」だそうだ．ベテランになると，来院の患者さんを一目見て，これまでの自分の色々な経験を全部統合して，「この人はこういう症状だからこれじゃないか」と，勘で判断できてしまう．それがベテラン看護師だというわけ．これは今，看護師の養成課程でも強調されていると思うけど，それは職人でもそうだと思う．最初はいろいろ真似したり，知識を身につけたりしながら，対象に向かっていくけど，そうしたやりとりのなかで，最終的には「勘」というものに統合されていく．

牧：ある程度，量的な事をずっと積み重ねていると，質的なものに転化して行くのよね．それが勘の鋭い看護師さんという事になるわけね．

池谷：そうそう．その場合はもちろん一般的な，知識はもちろん，経験とか色々なものがね，そして最終的に到達するのはやっぱり勘だという．

牧：医師にも勘は必要，福祉関係の人にもね．私はボーッとしているようですけど，ちょっと見るだけで，この人の問題は何かと案外きちんと把握できてしまうの．随分元気そうにしていられるが，この人の目つきと目線は何か可笑しいのではないか，この人のコミュニケーション能力はちょっと弱いのでは，これがウィーク・ポイントと違うんではないかとね．それくらいは普通に皆が持っていると考えていたのですが，実はあまり持っていられないという事に気付いて，ではこれは私の能力かなと思っているの．医師だってそうでしょ？

江坂：最近の医師はそういう勘にではなく，すぐ採血などの検査に頼りますね．すべての検査が無用とは思わないが，例えば歯医者に行くとすぐレントゲンを撮る，麻酔を打つ，ちょっと度を過ごしているのではと思うよ．これを希望者だけに限れば，医療費の節約になると思うのだが．ところでこれは教養の問題と係わると思うのだが，受付とか問診カルテには「妊娠の可能性がある方は，お申し出ください」とある．あれを見ると，「顔を見れば，すぐ分かるのに」と，いつも苦笑してしまう．女性は皆「妊娠の可能性」を持っているのだから，あれは「妊娠している可能性」でなければね．

池谷：あはは，確かにね．ところで国語力の問題ではなく，勘の問題に戻すとして，多分これも教養の問題と係わるけど思うが，やっぱり今までの広い知識とか経験を「統合」していくもの，それが必要となる．

牧：そう．人間の脳には網のようなものが張り巡らされて，経験を重ねる事と「意識的に」何かをする事で，その網がすごく強くなって来る．歳をとると体力は弱くなるが，脳には非常に強い膜，網が出来上がって来るんですって．

江坂：牧さんの言われた「意識的にする」という所が重要だと思うな．

牧：そう，マニュアルにただ従っているのではなく，主体的にということ，これが大切よ．そうしてマニュアルを乗り越え，自分のものにした知識とか経験，これを池谷さんが言ったように「統合」しながら蓄積して行くとね，脳内にできた網の目の遠く離れた部分と部分が結びついたとし考えられない，そういうことが突然浮かぶことがあるの．経験したことも，思っても見なかったことがね．

池谷：そう，突然に．実にたわいもないこと，突拍子もない馬鹿げたこともあるが，すごい発見のようなものもね．

牧：あれって子どもが寄り道をしようとする好奇心にも似ていますね．今まで大人に手を引かれて通った道筋から「突然」はずれてみたいという心，冒険心とかに似ている．これは私たち大人の「突然」な思いつきである脳内のとんでもない結合と同じかもしれないわね．

池谷：そういう思いつきや疑問を大切にして，これまでの知識や経験と統合して，馬鹿げた事とか，とんでもない事を排除・整理しながら自己を成長させて行くもの，それが教養になるのではないかな．

江坂：個人の自己成長ではそうなると思う．それが社会となるとね，権力者のとんでもない思いつきに振り回され，巻き込まれ，一緒に滅亡へと転げ落ちることもあるからね．その時それを「殿，ご乱心」と押し止める家老とかの臣下の役割，社会制度としての民主主義が大切になってくる．例えば国土とか都市開発計画の場合，政治家と役人などが不動産や建設企業と秘密裏にとか，談合によってではなく，地質学者の知識や意見そして地元住民の要望を取り入れる，それを保障する社会の民主的なシステムを創って行くことが社会の成長を促すのではないかな．

池谷：そういう場合は歴史学者や地元のとかの意見も重要だと思う．東京電力の原発が活断層上に建設されていたことがこの前の地震で明らかになったけど，昔の寺に残っている古文書などにそういう記述があったかもしれないからね．とにかく，憲法に国民主権と書いてあるからだけでなく，その民主主義を皆で創造して行くこと，これが重要で，これを社会が自ら発達してゆく教養（Bildung）と言って良いかも知れない．民主主義というと「多数決」だとか，その主である民をね，選挙権を持っている大人だとか，それで選ばれた議員たちだと思っている節もあるが，本当はここで生活している皆だよね．

牧：子どももその主人公よ．生まれた時から国籍を持っているし，それにミルクを飲めば，ちゃんと消費税を払った事になるのだからね．寄り道しようとする子どもの手を離し，その子の好奇心を満たしてやり，危険に近づいたら，こちらに引き寄せてやる，そういう自己成長を見守る子育てが重要だと思うわ．でも親にとって安心できない誘拐とか傷害事件が起こって，マス・コミ報道で皆が戦々恐々となって，「親心」から子どもを囲い込み管理する対象にしてしまう．子供同士で遊べる環境もなくなっている．

池谷：今の子どもにそんな自由はないよ．幼稚園とか学校と塾，都会では小学生に卒業後私立の有名中学校に入れようと，そのための塾通いをさせようという風潮もある．もちろん，それなりの高収入で教育熱心な家庭の子どもしか，その恩恵に浴せないが，しかし本当にそれでその子は自己成長できる教養の力を身に付けることができるのだろうか．もちろんその中学校の質にも依るけど，重要な成長時期にそのような特殊な人工的塀のなかに囲い込まれれば，そういうマイナスを背負い込むことにならないだろうか．それにね，「かつての神童，今はただの人」，逆に「あいつが，こんなに立派になって」という例はどこにもあるからね．子どもたちが持っている自己成長しようという力は，そもそももっと根源的な所にあり，親や学校の先生の思惑どおりにはな

らないのではないかな．

僕はやっぱり「なぜ人間は歩こうとしたのか」という所から考えなければいけないと思う．江坂さんが紹介したように，狼に育てられた子はその親のように生物学的には同じ形態には成長できず，走る姿も食べる物も人間とは違うものになってしまう．だから，「親の振り見て，子は育つ」ですよ．大人がしっかり自分の足で歩いていなければ，子どもは自立できない．「子を見れば，親が分かる」というように，子どものイジメは大人世界の反映だ．仲間はずれにするイジメには目くじらを立てるのに，会社で同じ仕事をしていても派遣社員と正社員とでは待遇が全く違う，これにはそれほど関心を示さない．これは差別で，イジメではないのか．

牧：そう，そうね．でも，正社員でも不安でね，今の給料で将来は大丈夫か，中年の人は子育てと教育でお金がいるから，高年の人は老後が心配だから貯金して備えなければとか，韓国や中国が後に迫っているから価格競争に負けないためにも少々の犠牲は必要なのかと，そう考えると分からなくなり，諦めている，そういう状況もあると思うの．スウェーデンなどの福祉国家では上は政府から下は個々人までの合意で，そういう教育・医療・老後などを保障するという社会的安心像が描かれ共有されている．上下も左右もそういう安心と信頼の関係で結ばれている．だからスウェーデンを旅行した人は「何とみんな落ち着いて，空気までのんびりしていような感じだわ」と言うのよ．でも日本で一番信用されていないのは政治家でしょう？

少子高齢化で困るからと「若い人に子どもを産んでくれ」と言うが，そういう社会でフリータとか派遣では安心して結婚できないわよ．共稼ぎでようやく家計がなりたっているのに子どもができたら，仕事をやめなければならない，そして再就職は難しい．正社員はリストラで同僚が減って，その仕事が回ってきて，長時間労働で疲れきっている．無駄な事をしてないか，馬鹿げた事をしてないかと反省したり，自己成長のためにゆっくり本を読む暇もない．少し前に「子どもと同じ目線で，しつけを」と言われてたでしょう．でも，同じ目線になるように腰を落として，玩具の取り合いをした子の喧嘩を仲裁していても，保育園とか幼稚園の先生は他の多くの子どもの面倒も見なければいけないから，その子に背を向けるの．その子はそっと抱きしめてもらい，取り合いの相手と握手させてもらいたかったのに，ただ叱られただけで終わって，先生に見捨てられたと思うかも知れないね．老人は安全のための隔離施設で，忙しく働く孫のような若い介護人にお世話をしてもらっているだけで，老・孫のような人間らしい交流も，老から若への技や教養の伝達もできないね．

池谷・江坂：わっはっはあ．そうだ，

江坂：「老孫」とは面白いですね．コンビニにそんな名前があるね．

池谷：大学に通う学生はアルバイトで忙しい，先生も大学でとにかく何やからで忙しくさせられている．

牧：とにかく孫は可愛いですよ．好奇心旺盛で，色々なものに手を出しますよ．蟻を見つけて，じっと見ているの．そして可愛い指を出したら，蟻が登って来て，最初は不思議そうに，手から袖の中にそれが消えたら，驚いて急に泣き出すの．面白いですよ，私の腕に飛び込んできた孫の

顔は，泣いていても可愛い，全身で学んでるのよ．

江坂：その蟻を始めて発見したお孫さんを励まして，それと仲良くさせて，アリさんのことを教えてあげなくてはね．僕はアリンコには驚かなかったが，蛇に驚いて，今でも嫌いですよ．だが大人はその蛇の尻尾を捕まえて，くるくる回して遠くに投げ捨てた，その勇気には驚きましたよ．僕は驚くだけで終わってしまったが，それを真似てクルクル回して遊んでいた子もいましたよ．彼は勉強がそれほどできなかったが，僕は尊敬していましたよ．

池谷：横浜ではもう蛇なんかに，お目にかかれないんじゃないかな．

江坂：この美浜にはまだ自然が残っていますから，いますよ，蛙もね．人間は自然の一部ですから，自然破壊ではなく，その懐の中で共に成長する社会，それがこれからは大切ですよね．「この山も過去から成長（Bildung）して来て，今ここにこういう姿であり，未来へと成長して行くのだ」，確かそうガタマー（H. G. Gadamar）が言っていましたね．

(2008 年 7 月 23，30 日収録)

おわりに

この鼎談は 2008 年 7 月の 23 日と 30 日の二日にわたり，レコーダーに録音しながら行なわれた．テープを起こす段になって，その録音状態がそれほど良くないことが判明したが，とにかくそれを最後まで遂行していただき，9 月末には聞き取り不能な箇所も混在した不完全な原稿が完成した．その後この三人でお互いにその欠陥を補いながら，さらに鼎談中に話しそびれたことなども加筆することにより，読者にできるだけ分かりやすいものにする仕事が始まり，その完成に漕ぎ着けるまで何と 3 ヶ月も要することになった．両先生には多忙にもかかわらず，この困難な仕事の最後の詰めに至るまで多大なご協力を頂き，改めて感謝したい．

ところで，ここでは「教養」を個人的な自己形成・成長として，そして各人が社会の中で専門的役割を果たすための基礎的なものとして捉え，その社会的環境や背景との関係も含めて話し合ってきた．その中で様々な問題が浮かび上がってきたが，例えば「青田買いは良くない」という意見で大学側と産業界が一致しても，一部が走り出すと他のものも遅れないように後を追うという現状があり，大学と高校との関係も事情は同じで，後で大きなマイナスを背負い込み，「06 年度は 6 割の大学が高校教育の補習授業を行っていた」(朝日新聞，2009 年 2 月 8 日記事）となる．しかし入学までに習得しそこねてきたものは各学生で異なっているだろうし，そういう結果を生み出した原因を反省せず，補習と称して同じ事を繰り返しても何にもならない．

例えば，10 年ほど前にこういう学生のレポートを読んだことがある．「分数の割り算で，『ひっくり返して掛けろ』と教えられ，どうしてそうなるのか分からず，算数が分からなくなり，嫌いになりました」．これは四則計算を分数に拡大するとき，その基礎を理解させないままテクニックだけを教え，計算問題ばかりやらせた弊害の例である．自ら人間としての創造的な頭脳をコンピュータに貶めるのを嫌い，「分からない」と拒否反応を起こしたことまでは正しいが，それを

克服するために，乗除の関係を初めから考え直すとか，友達に尋ね，一緒にあれこれの場合を試し合うとか，それでも分からなかったら，先生に質問すれば良かった．こうして分からなかったことが克服できれば，自分が一皮むけて，一回り大きく成長したように感じられたであろうに．

目立つ子は「いじめ」の対象になりやすいと，この鼎談で話題になった．その対象になりたくなければ，授業中に手を上げて質問するような目立つことは避け，古い皮に閉じこもり，分からないままの自分に甘んずることになる．鳥は自らのくちばしで殻を割って孵化し，成鳥となって大空に舞い上がるが，「いじめ」の学校では「空気を読み」合い，集団的に読み合わせ，成長のチャンスをつぶし合うことになろう．

この鼎談を機に，このように色々なことを考えさせられた．かつて授業中「質問はありませんか」と尋ねても，殻に閉じこもったような無反応な学生たち，個人的に指名すると「どこが分からないか，分かりません」と困ったような顔をする学生のことを思い起こすと，基礎教養の未修得とか「いじめ」の後遺症の大きさに驚かされる．もちろん，それだけでなく，アルバイトの合間に講義に出るというスケジュール化された学生生活など色々な障害も明らかになった．それらを克服するためには，講義を通して自分の殻を内なる力で割って孵化するよう彼らを励ます，そして仲間として共に自由に意見を交換しながら学び成長することが重要となろう．

(「おわりに」の文責，江坂)